

2015 年度
「FD 研究会」
「学外 FD 関連研修会 参加支援」
報告書

佛教大学 教育推進部 教育推進課

目次

2015年度FD研究会

第1回FD研究会 <2015年7月23日(木)実施>	3
・広報用A4ポスター	
・発表概要	
・当日配布資料	
第2回FD研究会 <2015年10月29日(木)実施>	27
・広報用A4ポスター	
・発表概要	
・当日配布資料	
第3回FD研究会 <2015年11月4日(水)実施>	53
・広報用A4ポスター	
・発表概要	
第4回FD研究会 <2015年11月11日(水)実施>	65
・広報用A4ポスター	
・発表概要	
・当日配布資料	
第5回FD研究会 <2015年12月3日(木)実施>	85
・広報用A4ポスター	
・発表概要	
・当日配布資料	
第6回FD研究会 <2015年12月7日(月)実施>	135
・発表概要	
・当日配布資料	
2015年度FD関連研究会 参加支援 報告書	161

2015 年度
「FD 研究会」
「学外 FD 関連研修会 参加支援」
報告書

第 1 回 FD 研究会

「学生の学びを促す教授法

～ 表面的な学習をさせない工夫 ～」

開催日：2015年7月23日（木）13：30～

会場：佛教大学紫野キャンパス 1-309 教室（1号館3階）

二条キャンパス N1-207 教室（1号館2階）

発表者：中井 俊樹（愛媛大学 教育・学生支援機構 教授）

参加者数：48名

学生の学びを促す教授法

～ 表面的な学習をさせない工夫 ～

教員から提供される知識を批判的に吟味することなくノートに書きとめる。

試験が近づくと、ひたすら暗記し、試験にのぞむ。

試験が終了した後に、

「おわった。もうこの分野について覚えなくていいんだ…」とつぶやく。そして、1週間後には記憶した知識の大半を忘却する。

上記のような学習は、表面的な学習と呼ばれます。

多くの教員は、表面的な学習ではなく、学生が学習内容の本質を深く理解し、習得した知識をその後の学習や生活の中で活用し、さらに学習意欲が高められその分野の学習を進めていく、といった学習を期待するのではないのでしょうか。

本研究会では、教授法の知見や工夫を紹介することで、学生の学びを促す教授法を身につけることを目指します。

是非、ご参加ください。

7/23 木

13:30 ~ 15:30

13:00より受付

講師



中井 俊樹 先生

愛媛大学
教育・学生支援機構
教育企画室 教授

プロフィール

専門は大学教育論、人材育成論。

1998年に名古屋大学高等教育研究センター助手となり、同准教授などを経て2015年より現職。著書に、『看護現場で使える教育学の理論と技法』(編著)、『大学のIR Q&A』(共編著)、『大学の教務 Q&A』(共編著)、『大学教員のための教室英語表現300』(編著)、『大学教員準備講座』(共著)、『成長するティップス先生』(共著)などがある。

■会場 佛教大学 紫野キャンパス
1号館3階 1-309教室

■申込 下記内容を記入のうえ、[fdoffice@bukkyo-u.ac.jp]までメールにてお申込みください **7月17日(金) 必**

件名:FD研究会申込み

本文:氏名、所属、役職、緊急連絡先(携帯電話等)、
参加者のe-mailアドレス

※ 申込みメールアドレス宛に事務連絡およびアンケートのご依頼をする場合がございます



※駐車場がございませんので、
公共交通機関にてご来場ください。



佛教大学教育推進機構

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL:075(491)2141(代表)
mail: fdoffice@bukkyo-u.ac.jp

2015年度 第1回佛教大学FD研究会

1. 開催概要

開催日：2015年7月23日（木）13：30～15：30

テーマ：「学生の学びを促す教授法 ～表面的な学習をさせない工夫～」

会場：佛教大学紫野キャンパス 1号館3階 1-309教室

発表者：中井 俊樹（教育・学生支援機構 教育企画室 教授）

司会進行：岡崎 祐司（教育推進機構長）

参加者数：48名

2. 発表（要約）

はじめに

本日の研修会では、教授法の知見や工夫を紹介することで、学生の学びを促す教授法を身に付けることを目指す。

まず、大村はまさんという教育界ではかなり有名な方の言葉を紹介する。

『これから教師になる若い人が、「自分には何もできないけれど、教育への愛がある、真心がある、これでやっていくんだ」とよくいいます。そこらへんは不安です。熱心と愛情、それだけでやれることは、教育の世界にはない。』（大村はま「灯し続けることば」小学館pp22-23）

これは、どの職業でもいえることである。本日は看護学科の先生も多く参加されているが、看護の世界でも同じことが言える。

素材・道具・方法

	料理	音楽	教育
素材	食材	曲	教える内容
道具	調理器具	楽器	教える道具
方法	調理方法	演奏方法	教える方法

おいしい料理はどういうもので構成されているか

料理は、食材という素材、調理器具という道具、そして調理方法の3つに分解できる。どんなに良い素材があったとしても、道具と方法が悪ければなかなか良い料理にはならない。このことは多くの方が認識していることである。音楽にも、曲という素材、楽器という道具、そして演奏方法がある。どんなに良い曲という素材があっても、楽器や演奏方法が駄目であれば、なかなか良い音楽にはならない。それらと同じことが教育にもあてはま

るのではないか。教える内容という素材があり、教える道具(機材、マイク)があり、教える方法がある。素材がどれだけ良くても、その方法や道具が悪ければ、学生に授業内容が伝わらず、教育効果があがらない場合がある。

料理や音楽に関しては、道具や方法にかなり力を入れており、多少素材が悪くても料理の腕である程度の料理にしていこうという“ふし”がある。

一方で、教育に関しては、素材ばかりが注目されて、道具や方法まで頭が回らないということがよくある。確かに、素材を非常に大事にしたいという気持ちは分かるのだが、それでも道具や方法をしっかりと考えておかないと、結果的に良い教育にはならないだろう。

本日は、道具をどのように上手く使えばよいかというところを考えて頂きたい。

本日の流れ

- 意義ある学習とは

学習をやっているように見えて、身に付いていない。本当に学生にとっての意義のある学習とは、何なのであろうか。

- 授業設計の型

特に、初めて教える人や若手の人には考えていただきたい。

- 説明、発問、指示

昔の講義は説明が中心であった。学生への授業参加を促すとか、色々な能力を身に付けてもらおうと考えると、ただ単に内容を説明するだけではなく、学生に問いかけをしてみたり、指示を与えたりすることが必要である。

- 学習課題の組み立て方

グループワーク 1

《学生Aの学習》

教員から提供される知識を批判的に吟味することなくノートに書き留める。試験が近づくとひたすら暗記して試験に臨む。試験が終了した後に、「終わった、もうこの分野について覚えなくていいんだ」とつぶやく。そして、1週間後には記憶した知識の大半を忘却する。

課題：教員にできること

学生Aの学習は表面的な学習と呼ばれることがある。学習内容の本質を深く理解したり、その後の学習や生活で活用するなど、より望ましいと考えられる学習に導くには教員は何ができるだろうか。

これは、学生の問題なのか、あるいは教員の問題なのか。高等教育なので学生自身が学ぶ必要があるという意見もある。

【グループディスカッション(10分)】

グループディスカッションの内容をまとめると、以下のような工夫ができるのではないかという意見があった。

- 学生への授業概要の説明
- ノートの取り方を工夫させる
- 授業で教える内容をある程度絞る
- コメントペーパーを活用する
- 練習問題による学習の定着

グループワーク 2

《学生 B の学習》

受講している授業は、流行のアクティブラーニング型。授業のテーマに関連した議論、フィールドワーク、学生の発表などさまざま活動が盛りだくさん。活動が苦手な学生はそもそも履修しない選択科目であるためか、受講生の満足度は高い。しかし、授業終了時に「いろいろ活動して楽しかった。けど、何が身についたのだろうか」とつぶやく。

これは学生 A とは全く違う失敗である。今流行りのアクティブラーニングを導入しており、活動はしているがそれがなかなか学習に身に付いていない。厄介なことに、授業評価アンケートの評価は高いので、教員自身も失敗と自覚していないことが多く、学生からも評判が良い。

課題：教員にできること

学生 B の受講している授業の状況は、「這い回る経験主義」と呼ばれることがある。活動という手段が目的化され、学習が断片的になったり知識の積み重ねが不十分になったりするといった批判がある。より望ましいと考えられる学習に導くには教員がどのような改善を行なう必要があるだろうか。

【グループディスカッション(10分)】

学生 A と学生 B の両方のケースについて考えてもらったが、学生の学びを促す教授法と行った時に、この 2 つの大きな失敗があることを理解してほしい。

1 つ目の例は色々な要素があるが、これは網羅主義の失敗である。教員は全てのことを教えたいが故に学生に身に付かない。

2 つ目の例は、過度の活動主義の失敗である。網羅しようとするのが裏目に出たり、活

動を加えたりすることが失敗することもあるという事を、授業を成形する際に考えて頂きたい。これは、教授法だけの問題ではなく、授業を設計するシラバスにも関係してくる。到達目標をどのように設定するのか。何かを記憶するという目標だけであれば、学生は記憶することだけに専念する。知識をどのように活用していくのかということも含めて、目標を設定することが必要であろう。例えば期末試験が記憶を再生するだけの試験であれば、学生は記憶を重視して学習をしてしまうので、基礎知識をベースとした応用問題を設定し、知識を活用させるのが良い。

90分の授業をどのように作っていくか

【ワーク3：「長方形の面積」を教える(5分)】

- 以下の場面であなとはどのように指導しますか。指導案を作成してください。
- 対象：小学4年生
 - 内容：長方形の面積の求め方を理解し、計算できるようになる
(正方形の面積は前回の授業で学んでいる)
 - 指導時間：45分
 - 書き方：導入、展開、まとめの3部で構成する

【グループディスカッション(10分)】

長方形の面積を教える授業の構成例

小学校の先生は、導入の時、展開の時、まとめの時に何をするのかを場面別に明確にしている。小・中・高の先生は、指導案を作成して授業をするのだが、その際に使っているのが、「導入」「展開」「まとめ」であり学校の授業作りの基本である。

なぜこのようなことが必要なのかというと、「急に始めない」「急に終わらない」ためである。学習者のために、きちんと「導入」を作り、頭の準備運動をさせ、最後のまとめでは整理の体操をして終わる。発表や論文にも同じことが言えるかもしれない。

導入

- 快適な雰囲気始める
 - あいさつ、教室の温度、マイクなどの確認、「では始めましょう」
- 興味・関心を喚起する
 - 形の異なる長方形のケーキを見せて、「ケーキ好きな人？大きいのを食べたいよね。ではどちらが大きいかな？」

- 学習目標を知らせる
 - 「長方形の大きさはどうやって求めるのだろうか?」「みんなが長方形の面積を計算できるようになること。それが今日の授業の目標です」
- 学生の準備状況を確認する
 - 「長方形ってどんな図形だったかな?」「正方形の面積はどうやって求めたかな?」「掛け算も大丈夫かな」
- アウトラインを紹介する
 - 「今日の授業では、まず縦 2 センチ、横 3 センチの長方形の面積をみんなで考えます。そして・・・」

興味・関心のところで、果物や食べ物を例に考えた人はいるだろうか。小学校の算数などでは常に使う手法である。食欲と学習を結び付ける簡単な動機付けであるが、これが意外と効果的である。学習を進めるにあたっての準備段階では、どのように興味・関心を持たせるかが 1 つのテーマである。勿論、毎回このようなことをしては時間を取られるので、適度に学生に合わせて使っていくのが良い。

展開

- 内容を精選する
- 内容を順序よく配列する
 - 「長方形の面積は縦×横です」を先に伝えるか、後に伝えるか、学生が理解しやすい順序に、基本から応用
- ハイライトを演出する
 - 「なぜその式で求められるのかな?」(マグネットの長方形の図形を裏返すと方眼に)「正方形の面積の求め方とどこが違うかな?」
- 学習方法を工夫する
 - 「では、ノートで練習問題を解いてみましょう」、黒板で解かせる、教具を使う、ペアで問題を出させる、競争させる
- 学習の進み具合を確認する
 - 「長方形の面積はどうやって求めるかな?」、「平方センチメートルの小さい 2 は書いているかな?」、正しい答えを板書して確認。間違った生徒がいないかどうかを確認する。
- 順番にやるというよりは、いくつか組み合わせて行う。

まとめ

- 内容の定着を図る
 - もう一度、長方形の面積の出し方を確認する。「もう一度いいますね。長方形の面積は縦×横で求めます。」
- 学習の成果を確認する
 - 小テストを実施する。できなかった生徒がいるかどうか確認する。
- 達成感を与える
 - 「みんなよくできましたね」、「長方形の面積はもう大丈夫だね」
- その後の学習につなげる
 - 「今日できなかった練習問題は次の授業までにノートにやっておきなさい」、「長方形に線を引くと三角形、では三角形の面積はどうやって求めるのかな？」

説明・発問・指示

大学の授業ではこの全てを導入する時間がないと思われるが、少しは学べる所があるのではないだろうか。ここまで丁寧にすることはないのだが、ある程度の人数がいる場合や、学習意欲が低い学生がいる場合は、こういった丁寧な指導が必要な時もある。

また、クエスチョンマークが多かったことに注目していただきたい。「長方形ってどんな図形だったかな？」と言っている先生本人はこのことを知っており、敢えて質問している。これは、冒頭で説明した「説明」「発問」「指示」の「発問」にあたる行為であり、教師として非常に大切な作業である。

説明：長方形の面積の求め方は縦×横です

発問：正方形の面積はどうやって求めたかな？

指示：その問題をノートでやってください

教師の指導方法は、概ねこの 3 つに分かれることを理解しておきたい。そして、自身の授業を思い浮かべて見直してもらおうと良い。大学の授業は説明が中心になっていると言われているが、小・中の授業は、授業の中での問いかけを非常に大事にしている。アクティブラーニングが浸透してきて学生参加型の授業が増えているが、「発問」が上手く使いこなすところが大事になってくる。

発問法

発問は思考活動を刺激するものであって、小手先の技ではないと言われている。発問は

1899年に「発問法」という形で始まった。アクティブラーニングの歴史はまだ10年だが、発問法は100年以上前から日本が積み上げてきた体系だと言える。

また、発問において大事なことは、優れた発問ができるかどうかである。これが高等教育において求められているところではないか。

すぐれた発問とは

- 思考を深める
- 課題意識をもたせる
- 学習意欲を高める
- 明快で簡潔
- 適度な量

小学校の授業だと1時間で20～50問の発問があると言われている。大学の授業時間で言えば40～100問になる。実際にはそこまでできないが、発問をもう少し増やす努力はしたい。

場面別の発問

	学習活動	発問の例
導入	<ul style="list-style-type: none"> • 前時の学習内容を確認する。 • 興味、関心を喚起する。 • 学習課題を明確にする。 • 既習事項と比較する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 不思議ですね。どうしてなのか調べてみましょう。 • 今日の課題をつくりましょう。 • どんな点が問題でしたか。 • これまでの学習とどこが違いますか。
展開	<ul style="list-style-type: none"> • 解決への見通しをもつ。 • 関連や関係に気付く。 • 考えを明確にする。 • 分析的、総合的に考える。 	<ul style="list-style-type: none"> • どんな順序(方法)で考えたらよいでしょう。 • △△の方法も考えられないでしょうか。 • Aさんはこういうことを言いたいのですね。 • 何からそのことがわかりましたか。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> • 学習したことをとらえる。 • 発展的にとらえる。 • 次の学習への意欲付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> • 今日学習したことをまとめてみましょう。 • このことは、別の場合でも言えますか。 • 次の学習では、△△を調べてみましょう。

函館市教育委員会 (2010)

多様な発問のプール

高等教育において大事なことは、色々な発問が出せるようになることである。例えば、出生率や少子化問題について次のような発問が考えられる。

- 基礎知識 「出生率はどのような計算式で求めることができますか」
- 比較 「年と地方では人口減少にどのような違いがありますか」
- 動機や原因 「なぜ人口減少がおきているのでしょうか」
- 行動 「人口減少に対して国は何をすべきでしょうか」
- 因果関係 「都市への若者流入は、人口の増減にどのような影響を与えていますか」
- 発展 「この授業で私が説明した以外に少子化の原因はありませんか」
- 仮説 「子育て支援が進めば、人口の減少が抑制されますか」
- 優先順位 「少子化対策の中で最も有効な方法はなんですか」
- 総括 「A県の少子化対策の事例からどのような教訓が得られますか」

このように色々な発問の仕方がある。日本の伝統的な教授法の 1 つなので、使えるところがあれば使って頂きたい。また、ハーバード大学のサンデル教授の発問も非常に参考になるので例にあげておく。

- 「5人の命を救うために1人を殺すことは、正しい殺人と言えるか？」
- 「生き延びるために瀕死の少年を殺して食べることは許されないのか？」
- 「ビル・ゲイツやイチローの年収は高すぎるのか？」
- 「オバマ大統領は日本人に対して原爆投下を謝罪するべきなのか？」
- 「同性の結婚は認められるのか？」
- 「君は養子をもろうとき、その子に値段をつけられるかな？」

様々な条件で思考させ、意見の矛盾をつく。そこを起点として話を展開し、最終的には自分が教えた形にもっていく技術が素晴らしい。サンデル先生の話は普通の学生にとっては身近に感じられないものを、こういった身近な問題に置き換えて、発問で揺さぶるところが上手い。

ディスカッションの失敗例

教師：「それじゃ、最近の若者をテーマに自由に議論しましょう。なんでもいいですから、だれか意見を出してください。」

しーん。全体は沈黙する。

教師：「なにもないですか？ないってことはないでしょう。それじゃ石井さん。どう思いますか。」

哀れな石井さん、石になる。

教師：(苛立ちを隠せず)「なにもないことはないでしょう？いいから言ってみてください。」

石井さん、依然として石のまま

見かねて岩田さんが挙手。

教師：(ほっとして)「はい。岩田さん。」

岩田さん：「.....(思いっきりハズした意見)」

教師はとりあえずディスカッションを取り入れてみようと思ったのだが、残念ながら失敗している。そのうちに、やっぱりうちの学生はディスカッションが向いていないのだと結論付けて、説明中心の講義になる。だが、見てのとおり教師の工夫がなさすぎる。学生のせいにもできなくもないが、教師がきちんと設計していれば、こんなことにはならなかった。

教師として大事なことは、学習をどう設計するかということである。具体的には、学習課題の与え方であり、時間外として与えることもあれば、授業として与えるものがある。

学習課題を組み立てる

学習課題

- 何をどのように学習するかを教員が学生に示すもの

優れた学習課題

- 学習目標に沿っている
- 学問分野の本質的な問いに関連している
- 自分で考えないとできない
- 学生の関心と能力に合っている

本質的な問いの例

- 「宇宙はどのようにして始まったのか。」
- 「生命はどのように誕生したのか」
- 「DNA はどの程度その人に影響を与えるのか」
- 「技術の進展は人間の生活を豊かにしているか」
- 「健康的に生きるとはどのようなことなのか」
- 「政府はどのような方法で市場を統制すべきなのか」
- 「どのような制度にすれば、政府の権力の濫用を防ぐことができるのか」
- 「心とはそもそも何なのか」
- 「普遍的な価値は存在するのか」
- 「言葉はどのように思考に影響を与えているのか」
- 「人は歴史から何を学ぶことができるのか」

以上のような本質的な問いを学生に与えるのが良い。網羅するよりも、本質的な問いに従って授業を構成した方が、学生にとっても意義ある学習ができる。

学習活動の流れの例

学習課題の提示

- 学習課題の内容と意義を明確に伝える
- 必要な教材を配布する

学習の活動

- 学生に学習活動に取り組ませる
- 学生の活動の状況を確認し、必要に応じてフィードバックを与える

活動の成果の確認

- 活動の成果を確認する
- 学生に成果を報告する

振り返り

- 授業の目標にそって活動を振り返る
- 学習の進んだ点と進まなかった点を明らかにする

魅力的な学習課題をつくる工夫

- 単調にならないようにする
- 高次の思考を促す
- 特定の状況を設定する
- 学生の生活と結びつける
- 科学と結びつける

ブルーム（教育心理学）の学習の分類

- 知識：学習した内容を覚えている、必要に応じて学習した内容を想起できる
- 理解：学習した内容の意味を理解している、学習内容を言い換えたり例をあげたりすることができる
- 応用：学習した内容を新たな文脈で使用できる、学習した内容を活用して問題を解決できる
- 分析：ある概念や事象を構成要素に分解することができる、各構成要素の相互関係を説明できる
- 統合：複数の構成要素を結合して、新しい全体を形づくることはできる、創造性や獨創性を必要とする問題を解決できる

- ・評価：一定の評価基準を使用して、価値を合理的に判断できる

さまざまな学習活動

学生の多様な学習活動

- ・ 聞く、読む、書く、見る、話す、体験する、教える・・・
- ・ 一斉学習、個別学習、協同学習
- ・ 対面学習とオンライン学習

学習活動を効果的に組み合わせる

- ・ 個人で考えさせる→考えを書かせる→ペアで議論させる→全体で議論する

様々な教育学でも言われているいくつかの例

《バズ学習》

- ・ 小グループごとに議論させる技法。あるテーマについて6人のグループで6分間の議論を行った後、全体としての結論にまとめていく。6人と6分から、6・6討議法と呼ばれることもある。バズとは蜂の羽音のこと。経験の交流や意見の集約に効果がある。議論が円滑に進まない場合には、6人より少数人数にする、グループごとにリーダーと記録係を決めさせるなどの工夫がある。

《シンク・ペア・シェア》

- ・ 段階的に議論させる技法。文字通り、「考える」、「2人組」、「共有」の順序で議論させる。あるテーマについてまず一人で考えさせ、隣同士のペアで共有した後、全体で共有する。教室全員の前で意見を述べるには抵抗があるが、他者と共有した意見は述べやすくなるという効果をもつ。「書かせる」活動を加えた「ライト・ペア・シェア」、4人組での議論を加えた「シンク・ペア・スクエア・シェア」などの応用例もある。

《ディベート》

- ・ あるテーマについて2つの異なる立場にわかれ、交互に意見をやりとりする方法。
- ・ 肯定側と否定側にわけて、それぞれが交互に批判を出し合うテニスディベートが基本的な方法。
- ・ 各チームは準備学習をしておき、当日は制限時間等の決められたルールに基づいて進める。終了後は審判や聴衆がどちらのチームの方が説得力があったかを投票し、良かった点や改善点も合わせてフィードバックする。

《ワールドカフェ》

- ・ カフェのようにリラックスした雰囲気の中で一つのテーマについて4～5人で議論を行

う方法。

- テーブル上には模造紙を用意し、自由にメモしながら 20-30 分程度の対話を行う。
- メンバーを一部変えながら、3 回程度対話を行うことで、一つのテーブルで出たアイデアが他のテーブルに伝播し、新たなアイデアが生まれることが期待できる。

まとめ

1. 意義ある学習がどのようなものなのか

網羅主義による失敗と活動中心による失敗がある。その 2 つの失敗を避けるために、しっかりと授業設計をしてもらおう。そして教授法を工夫してカバーすることが教員には必要である。

2. 授業設計

小・中・高の先生から学ぶ。導入を作ること。発問をすることが大事である。教授法は急がば回れの部分がある。教えたことが減るのではないかという懸念もあるだろうが、導入からまとめまでしっかりと設計した方が学習の効果は高い。結局は、回り道をした方が早い。

3. 説明、発問、指示

発問は、日本において伝統的に使われてきた教授法である。これを授業の中でどのように活用していくのか。活動型の授業では特に大事になってくる。

4. 学習課題の組み立て方

どのような学習課題を作るのか。意欲的且つ到達目標に則した課題を設定することが大事である。

学生の学びを促す教授法 表面的な学習をさせない工夫

2015年7月23日
愛媛大学
中井俊樹



これから教師になる若い人が、「自分には何もできないけれど、教育への愛がある、真意がある、これでやっています。そくんだ」とよくいいます。そこからへんは不安です。
熱心と愛情、それだけでやれることは、教育の世界にはない。

大村はま『灯し続けることば』小学館、pp.22-23

話題提供の目標

- 本話題提供では、教授法の知見や工夫を紹介することで、学生の学びを促す教授法を身につけることを目指します。

素材・道具・方法

	料理	音楽	教育
素材	食材	曲	教える内容
道具	調理器具	楽器	教える道具
方法	調理方法	演奏方法	教える方法

構成

- 意義ある学習とは
- 授業設計の型
- 説明、発問、指示
- 学習課題の組み立て方

学生Aの学習

- 教員から提供される知識を批判的に吟味することなくノートに書きとめる。試験が近づくと、ひたすら暗記し、試験にぞむ。試験が終了した後、「おわった。もうこの分野について覚えなくていいんだ」とつぶやく。そして、1週間後には記憶した知識の大半を忘却する。

課題1 教員にできること

- 学生Aの学習は表面的な学習と呼ばれることがあります。学習内容の本質を深く理解したり、その後の学習や生活で活用するなど、より望ましいと考えられる学習に導くには教員は何ができるでしょうか。

学生Bの学習

- 受講している授業は、流行のアクティブラーニング型。授業のテーマに関連した議論、フィードバック、学生の発表などさまざまな活動が盛りだくさん。活動が苦手な学生はそもそも履修しない選択科目であるためか、受講生の満足度は高い。しかし、授業終了時に「いろいろ活動して楽しかった。けど、何が身についたのだろうか」とつぶやく。

課題2 教員にできること

- 学生Bの受講している授業の状況は、「這い回る経験主義」と呼ばれることがあります。活動という手段が目的化され、学習が断片的になったり、知識の積み重ねが不十分になったりするといった批判があります。より望ましいと考えられる学習に導くには教員はどのような改善が必要でしょうか。

課題 長方形の面積

- 以下の場面であなたはどのように指導しますか。指導案を作成してください
 - ・対象：小学4年生
 - ・内容：長方形の面積の求め方を理解し、計算できるようにする
 - ・参考：正方形の面積は前回の授業で学んでいる
 - ・指導時間：45分
 - ・書き方：導入、展開、まとめの3部で構成する

教師の発問

■ 教師が指導するときの言葉

- ・説明
- ・発問
- ・指示
- 発問
 - ・わかっている人がわかっている人に問う
 - ・「思考活動を刺激するものである」、「指導技術の小手先のわざと軽く考えるべきではない」（平井、1961）

すぐれた発問とは？

- 思考を深める
- 課題意識をもたせる
- 学習意欲を高める
- 明解で簡潔
- 適度な量

参考情報 小学校での1時間での発問の数(は、20問から50問 (松浦ら、1986)

場面別の発問

	学習活動	発問の例
導入	<ul style="list-style-type: none"> 前時の学習内容を確認する。 興味・関心を喚起する。 学習課題を明確にする。 既習事項と比較する。 	<ul style="list-style-type: none"> 不思議ですね。どうしてなのか調べてみましょう。 今日の課題をつくりましょう。 どんな点が問題でしたか。 これまでの学習とどこがちがいますか。
展開	<ul style="list-style-type: none"> 解決への見通しをもつ。 関連や関係に気付く。 考えを明確にする。 分析的、総合的に考える。 	<ul style="list-style-type: none"> どんな順序（方法）で考えたらよいでしょう。 △△の方法も考えられないでしょうか。 Aさんはこういうことを言いたいのですね。 何からそのことがわかりましたか。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 学習したことをとらえる。 発展的にとらえる。 次の学習への意欲付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 今日学習したことをまとめてみましょう。 このことは、別の場合でも言えますか。 次の学習では、△△を調べてみましょう。

函館市教育委員会（2010）

多様な発問のプール

- 基礎知識「出生率はどのような計算式で求めることができますか」
- 比較「都市と地方では人口減少にどのような違いがありますか」
- 動機や原因「なぜ人口減少が起きているのでしょうか」
- 行動「人口減少に対して国は何をすべきでしょうか」
- 因果関係「都市への若者流入は、人口の増減にどのような影響を与えていますか」
- 発展「この授業で私が説明した以外に少子化の原因はありますか」
- 仮説「子育て支援が進めば、人口の減少が抑制されますか」
- 優先順位「少子化対策の中で最も有効な方法は何かでしょうか」
- 総括「A県の少子化対策の事例からどのような教訓が得られますか」

サンデル教授に学ぶ発問

- 「5人の命を救うために1人を殺すことは、正しい殺人と言えるか？」
- 「生き延びるために瀕死の少年を殺して食べることは許されないのか？」
- 「ビル・ゲイツやイチローの年収は高すぎるのか？」
- 「オバマ大統領は日本人に対して原爆投下を謝罪すべきなのか？」
- 「同性の結婚は認められるのか？」
- 「君は養子をもらうとき、その子に値段をつけられるかな？」

ディスカッションの失敗例

教師：「それじゃ、最近の若者をテーマに自由に自由に議論しましょう。なんでもいいですから、誰か意見を出してください」。

しーん。全体は沈黙する。

教師：「なにもないですか？ ないつてことはないでしょう。それじゃ石井さん。どう思いますか？」

哀れな石井さん、石になる。

教師：（いらだちを隠せず）「なにもないことはないでしょう？ いいから言ってみてください」。

石井さん、依然として石のまま。

見かねて岩田さんが拳手。

教師：（ホツとして）「はい、岩田さん」。

岩田さん：「……（思いつきりハズした意見）」

学習課題を組み立てる

- 学習課題
 - 何をどのように学習するかを教員が学生に示すもの
- 優れた学習課題
 - 学習目標に沿っている
 - 学問分野の本質的な問いに関連している
 - 自分で考えないとできない
 - 学生の関心と能力に合っている

本質的な問いの例

- 「宇宙はどのようにして始まったのか」
- 「生命はどのように誕生したのか」
- 「DNAはどの程度その人に影響を与えるのか」
- 「技術の進展は人間の生活を豊かにしているか」
- 「健康的に生きるとはどのようなことなのか」
- 「政府はどのような方法で市場を統制すべきなのか」
- 「どのような制度にすれば、政府の権力の濫用を防ぐことができるのか」
- 「心とはそもそも何なのか」
- 「普遍的な価値は存在するのか」
- 「言葉はどのように思考に影響を与えているのか」
- 「人は歴史から何を学ぶことができるのか」

学習活動の流れの例

- 学習課題の提示
 - 学習課題の内容と意義を明確に伝える
 - 必要な教材を配付する
- 学習の活動
 - 学生に学習活動に取り組みさせる
 - 学生の活動の状況を確認し、必要に応じてフィードバックを与える
- 活動の成果の確認
 - 活動の成果を確認する
 - 学生に成果を報告させる
- 振り返り
 - 授業の目標にそって活動を振り返る
 - 学習の進んだ点と進まなかった点を明らかにする

魅力的な学習課題をつくる工夫

- 単調にならないようにする
- 高次の思考を促す
- 特定の状況を設定する
- 学生の生活と結びつける
- 科学と結びつける

ブルームの学習目標の分類

- 知識 学習した内容を覚えていて、必要に応じて学習した内容を想起できる
- 理解 学習した内容の意味を理解している、学習内容を言い換えたり例をあげたりすることができる
- 応用 学習した内容を新たな文脈で使用できる、学習した内容を活用して問題を解決できる
- 分析 ある概念や事象を構成要素に分解することができる、各構成要素の相互関係を説明できる
- 統合 複数の構成要素を結合して、新しい全体を形づくることはできる、創造性や独創性を必要とする問題を解決できる
- 評価 一定の評価基準を使用して、価値を合理的に判断できる

さまざまな学習活動

- 学生の多様な学習活動
 - ・ 聞く、読む、書く、見る、話す、体験する、教える・・・
 - ・ 一斉学習、個別学習、協同学習
 - ・ 教室内学習と教室外学習
 - ・ 対面学習とオンライン学習
- 学習活動を効果的に組み合わせる
 - ・ 個人で考えさせる → 考えを書かせる → ペアで議論させる → 全体で議論する

バズ学習

- 小グループごとに議論させる技法。あるテーマについて6人のグループで6分間の議論を行った後、全体としての結論にまとめいく。6人と6分から、6・6討議法と呼ばれることもある。バズとは蜂の羽音のこと。経験の交流や意見の集約に効果がある。議論が円滑に進まない場合には、6人より少人数にする、グループごとにリーダーと記録係を決めさせるなどの工夫がある。

シンク・ペア・シェア

- 段階的に議論させる技法。文字通り、「考える」、「2人組」、「共有」の順序で議論させる。あるテーマについてまず一人で考えさせ、隣同士のペアで共有し、全体で共有する。教室全員の前で意見を述べるのには抵抗があるが、他者と共有した意見は述べやすくなるという効果をもつ。「書かせる」活動を加えた「ライト・ペア・シェア」、4人組での議論を加えた「シンク・ペア・スクエア・シェア」などの応用例もある。

ディベート

- あるテーマについて2つの異なる立場にわかれ、交互に意見をやりとりする方法。
- 肯定側と否定側にわけて、それぞれが交互に批判を出し合うテニスディベートが基本的な方法。
- 各チームは準備をして当日は、制限時間など決められたルールに基づき進める。終了後は審判や聴衆がどちらのチームの方が説得力があったかを投票し、良かった点や改善点も合わせてフィードバックする。

ワールドカフェ

- カフェのようにリラックスした雰囲気の中で一つのテーマで4〜5人で議論を行う方法。
- テーブル上には模造紙を用意し、自由にメモを描きながら20-30分程度の対話を行う。
- メンバーを一部変えながら、3回程度対話を行うことで、一つのテーブルで出たアイデアが他のテーブルに伝播すると同時に、新たなアイデアが生まれることが期待できる。

課題 学習課題を組み立てる

- あなたが担当する授業において、あなたが望ましいと考える学習を導く学習課題を作成してください。学習目標、課題内容、学習方法を明確にして記してください。
- 例
 - ・ 学習目標：大学の歴史の大きな流れを自分の言葉で説明できるようになる
 - ・ 課題内容：中世から始まる大学の歴史の中で、その後の大学のあり方に影響を与えた10の出来事を選び、その意義をレポートにまとめる
 - ・ 学習方法：宿題として各自にレポートを書かせた後、黒板上で年表をつくらせ、各出来事の意義を年代順に説明させる

FD・SD教材



長方形の面積の授業の構成例

導入

- ・ 快適な雰囲気始める
 - ・ あいさつ、教室の温度、マイクなどの確認、「では始めましょう」
- ・ 興味・関心を喚起する
 - ・ 形の異なる長方形のケーキを見せて、「ケーキ好きな人？大きいのを食べた
いよね。では、どちらが大きいかな？」
- ・ 学習目標を知らせる
 - ・ 「長方形の大きさはどうやって求めるのだろうね？」、「みんなが長方形の面
積を計算できるようになること。それが今日の授業の目標です」
- ・ 学生の準備状況を確認する
 - ・ 「長方形ってどんな図形だったかな？」、「正方形の面積はどうやって求めた
かな？」、「かけ算も大丈夫かな」
- ・ アウトラインを紹介する
 - ・ 「今日の授業では、まず縦2センチ、横3センチの長方形の面積をみんなで
考えます。そして、・・・」

展開

- ・ 内容を精選する
 - ・ 重要性の高い内容を優先して、1回の授業で消化できる情報量にする
- ・ 内容を順序よく配列する
 - ・ 「長方形の面積はたて×横です」を先に伝えるか、後に伝えるか、学生が理
解しやすい順序に、基本から応用
- ・ ハイライトを演出する
 - ・ 「なぜその式で求められるのかな？」、マグネットの長方形の図形を裏返す
と方眼に、「正方形の面積の求め方とどこが違うかな」
- ・ 学習方法を工夫する
 - ・ 「では、ノートで練習問題を解いてみましょう」、黒板で解かせる、教具を
使う、、ペアで問題を出させ合う、競争させる
- ・ 学習の進み具合を確認する
 - ・ 「長方形の面積はどうやって求めるかな」、「平方センチメートルの小さい2
はかけてるかな」、正しい答えを板書して、答えを確認。間違っただもが
いないかどうかを確認する

まとめ

- ・ 内容の定着を図る
 - ・ もう一度、長方形の面積の出し方を確認する。「もう一度いいますね、長方
形の面積はたて×横で求めます。」
- ・ 学習の成果を確認する
 - ・ 小テストを実施する。できなかった子どもがいるかどうか確認する。
- ・ 達成感を与える
 - ・ 「みんなよくできましたね」、「長方形の面積はもう大丈夫だね」
- ・ その後の学習につなげる
 - ・ 「今日できなかった練習問題は次の授業までにノートにやっておきなさい」、
「長方形に線を引くと三角形、では三角形の面積はどうやって求めるの
かな？」

第 2 回 FD 研究会

「グループワークをはじめよう！」

開催日：2015年10月29日（木）15：15 ～

会場：佛教大学紫野キャンパス 1-309 教室（1号館3階）

発表者：中野 民夫（東京工業大学 教授）

参加者数：28名

グループワークをはじめよう！

10.29 木 15:15 ~ 17:15
受付: 14:45 ~

昨今、アクティブラーニングの普及に伴い、グループワークが導入されることが多くなりました。

グループワークは学習効果を高めるための有意義な手法ですが、反面、適切に運用されなければ、単なる「話し合い」に終わる場合もあります。

今回のFD研究会では、学生の生身のコミュニケーション力や主体性を育む「参加型授業」を創るファシリテーションのポイントを学びます。



講師

中野 民夫 先生

ワークショップ企画プロデューサー
東京工業大学 教授

略歴

1957年東京生まれ。東京大学文学部卒。株式会社博報堂に30年勤務。90年前後に休職しカリフォルニア統合学大学院 (CIIS) に留学し、組織変革やワークショップを学ぶ。復職後、人と人、自然、自分自身をつなぎ直すワークショップやファシリテーション講座をBe-Nature Schoolなどで実践。12年から同志社大学政策学部教授を経て、今秋から現職。主著『ワークショップ』『ファシリテーション革命』『みんなの楽しい修行』等

■会場 佛教大学 紫野キャンパス
1号館3階 1-309教室

■定員 40名

■申込 下記内容を記入のうえ、[fdoffice@bukkyo-u.ac.jp]
までメールにてお申込みください **10月23日(金) 〆**

件名: 第2回FD研究会申込み
本文: 氏名、所属、役職、
緊急連絡先(携帯電話等)、
参加者のe-mailアドレス

※ 申込みメールアドレス宛に事務連絡およびアンケートのご依頼をする場合がございます



※駐車場がございませんので、
公共交通機関にてご来場ください。



佛教大学教育推進機構

〒603-8301京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL: 075(491)2141(代表)
mail: fdoffice@bukkyo-u.ac.jp

2015年度 第2回佛教大学FD研究会

1. 開催概要

開催日：2015年10月29日（木）15：15～17：15

テーマ：「グループワークをはじめよう！」

会場：佛教大学紫野キャンパス 1号館3階 1-309教室

発表者：中野 民夫（ワークショップ企画プロデューサー 東京工業大学 教授）

司会進行：岡崎 祐司（教育推進機構長）

参加者数：28名

2. 発表

今回は、昨今重要視されているアクティブラーニングの中でも、グループワークの効果的な進め方を学ぶ。また、現代の学生の生身のコミュニケーション力や、主体性を育む「参加型授業」を創る「ファシリテーション」のポイントを学ぶ。

本日の流れとして、オリエンテーションの後、ミニ講義とグループチェックインを行なう。グループでの作業を経て、大人数講義での参加型授業の試みを紹介した後、それをふまえてグループ討議を行なう。後半は「参加型授業を作る工夫8か条」と「ファシリテーションの基礎スキル」といったテーマで講義を行なう。その後、大人数講義以外の授業の工夫を紹介し、全体でどんな学びがあったかを確認する。

【オリエンテーション】

最近の東工大の「対話を育む実践ファシリテーション論」の授業は、2～4年生の約90名で、150名収容の教室を使用している。教室の入り口にクジを置き、前に席次表を貼る。2名掛けの指定席にして、奇数列の生徒が振り向くと4人組のグループになるようにしている。

【動画視聴】

この回は、生徒それぞれが自己紹介のやり方を考えてきて、6分間でグループをリードし、ファシリテートするという授業である（4人が6分ずつ実施）。大人数で教室を放っておくと、後ろと横から埋まってしまうので、“どう座る”・“どうグループ作る”という点は、くじ引きを使って対応している。くじ引きなので、座席とグループはまさに天の采配となる。その上で、今日は縁があって集まったのだから、お互い関心を持って聞き合おう、と伝えるようにしている。簡単に聞き方のポイント等を伝えた後は、早速、各々が司会進行を始める。そこで学ぶことなどを、振り返りながら確認するというをしている。

ワークショップ

意味：工房、仕事場、協同作業場、一緒に創る場

2001年のワークショップの本の中で、「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」と仮に定義している。定義の中にもあるが、「参加」や「体験」そして「相互作用」が鍵になる。

ファシリテーション

意味：「促進する」、「〈事を〉容易にする」という2つの意味がある。

「促進する」とは、物事を効率よく進める、相互作用や創造性を促す、という意味。「〈事を〉容易に進める」とは、緊張や紛争を解いていく、ステップを丁寧に刻んで導いていく。という2つの意味がある。いろんな定義の仕方があり、分野によって様々である。

例えば、人々が集い、何かを学んだり、対話をしたり、創造しようとする時、その過程を、参加者主体で、円滑かつ効果的に促していく技法である。

私の原点

90年前後に会社を退職しカリフォルニアに2年ほどいた時に湾岸戦争があった。アメリカの有識者にインタビューなどをし、日本へ編集して送ったりしていた。そこでジョアンナ・メイシーという先生に「戦争を止めるために私たちに何ができるのでしょうか」というストレートな問いをしたところ、「孤立しないで、集い合い、問い合うことが、力です。」という答えが返ってきた。日本の場合、大きい問題には問うことは諦め、話し合う事がない。「何が起きているのか」「何ができるのか」を問い合うことが、必ず次に繋がるというメッセージを頂いた。そのことにより日本人の中で湾岸戦争に関して想いをシェアする会をカリフォルニアで作ри、そこから色々なものが生まれた。これが1つのワークショップの原点である。

ワークショップおよびファシリテーションの効果

- 価値観が変わる

様々な人とやり取りをして「関係の豊かさ」を紡ぐ。話したり、作ったりするのがこんなに楽しく、皆がこんなにもクリエイティブだと感じることができる。それは、お金がかかることでもなく、豊だと思えると、随分今の価値観が変わる。

- 当事者意識の高まり

一緒に創ったり学んだりしていると、「当事者意識」が高まる。聞くだけでは、「良い話だな」「なるほどな」と思ったとしてもすぐに忘れてしまうが、聞くだけでなく自ら参

加したものはおのずとコミットしていきたくなるという効果がある。そして互いの一言が場を動かす。自分が言った一言や行動が波紋をなげかけ、それがきっかけで場が盛り上がる。小さな一言や行動によって、場を動かし、全体にも影響を与えることの練習をしておかないといけない。「どうせ社会は変わらない」「一人じゃ何もできない」という、雰囲気は日本にはあるが、自分はかけがえのない一員だということを練習している場である。

【グループワーク –グループチェックイン–】6分

(1) グループチェックイン

- ・どんな人がどんな思いでここにいるのか
- ・グループごとに全員がまず一言ずつ話して聴きあう

(2) A4の紙を4つ折りにする

①どこの誰 所属とか普段の活動、お名前「どこでなにしている〇〇です。」など	③
②参加動機 今日参加したきっかけや理由。今日の期待など。	④

(3) 名札を作る

「●●が好きな〇〇です。」と書く (例)鴨川の朝の散歩が好きな中野民夫です

先に、名札に書いたことの紹介で1周し、その後A4用紙①の内容でまた1周し、同様に②で1周とする。1人でずっと話すというよりも、1つの話題ごとに回していくのが良い。

この後、大教室での参加型授業の試みと事例紹介を30分程度で行ない、その後、見聞きしたことについてグループで振り返りながら学びあう。その際、次のような観点で、先ほどのA4用紙の右側にメモを取ること。

③印象的なことは？良い面でも疑問でも。

④聞きながら考えたことは？自分の現場にひきつけて、これはこう使える！等考えていたことは？

【実践事例紹介 一大教室での参加型授業の試みー】

- 受講者数が約 200 名の「NGO・NPO 論」という科目
- アシスタント：協同研究者 1 人、TA3 人（2013 年）
受講学生ボランティアのみ（2014 年）
TA 1 人+学生ボランティア（2015 年）
- 教室：3 人掛けのテーブル、横 6 列×縦 20 列

第 1 回目授業

まず、教室の入り口に設置されている“お楽しみボックス”の中からくじを引かせる。番号札は教室前方の見え易い席に貼り、見えにくい席には貼らない。また、後ろの方の机は予備用としておく。何人出席するか分からないので、少な目に席を用意しておき、人数が超過してきたら、予備の席を足すようにする等、細かい配慮が必要である。人数が予想できない場合、くじを何枚用意するかは若干のノウハウが必要となる。

授業を始める際、必ず最初にオリエンテーションで、当日の授業内容を話す。そして、自分が講義を行ったらそれに対して受講生に少し話をしてもらい、それをうけてまた自分が講義するといった具合に、合間に受講生に話をしてもらうことにしている。そして、最後には必ずフィードバックシートを書いてもらう。

この NGO・NPO という様々な社会課題に取り組む新しいセクターを学ぶにあたって「組織や活動を具体的に知ろうという事」、「そこで働く人の生き方に学ぶ」というものを記した。NGO・NPO の方は、様々な課題を放っておけない、気になってしょうがないという人が多い。その生き方に触発されて、一人一人の「ほっとけない」「なんとかしたい」は何だろうということを探求していくという授業にしていった。

大教室での参加型授業の試みということで、自ら調べ、まとめ、少人数で話し合い、学びあうことが必要である。それには、受講生の積極的な参加が不可欠であることは勿論、毎回の宿題もある。受講生には、大変だけれども必ずコミュニケーション力や書く力がつく、と言いつけて授業をしている。また、FD の部門の支援をうけて作成した冊子、『「教える」より「学び合う」場を創ろう!!』を配付する等して理解を促した。

若者へのメッセージ

授業では自分（教師）の自己紹介を行なう。一般企業にいたことや、ワークショップをやってきた話、色々な団体の理事や会員での経験、NGO が集まる万博での地球市村という大事業のこと等、NGO と接点や繋がりがある話をする。また、「若者よ、旅せよ、恋せよ、大志を抱け！」と題し、自分は何よりも旅から学んだというような話をする。

最後に、「気になることについていこう！」として、神話学者 Joseph Campbell が提唱

していた「自分の至福を追及する」ということを伝えている。日本人は何かと先生や親が社会の規範に合わせようとしており、自分の身体や心が喜ぶことを素直に実行できない、あるいは実行することが難しいという人が多い。あえて、自分の身体や心が求めていることについていけば、必ず道が開けるし、本人の人生が充実するだけでなく、必ず周囲に良い影響を与え、社会が変わると思っている。

世論調査

大人数授業の時によく行なう手法だが、挙手制で受講者に質問をすることが多い。自分が手を挙げながら、周りの様子を見て、自分だけではないと安心感を与えたり、周りの状況を確認したりする手段として使う。

Q1.「NGO,NPO」認知度は？

- ①ほとんど知らない。(2割)
- ②なんとなく、知ってはいる。(ほとんど)
- ③すでにNPOに所属したり活動したりしている。(ごく一部)

Q2.この授業を取った理由

- ①興味があつて。
- ②単に単位のため時間が空いていた。(一番多い)
- ③おもしろいという噂を聞いて。

全員チェックイン

人が集ったとき、どういう人がどういう思いでここにいるのか、一言ずつ話してもらおうといったチェックインの作業をしていく。人数が多いので、1机(3人)を1グループとして扱っている。本来は、先程視聴した映像(東工大の授業)のように2名掛で着席し、2:2のグループとした方が、余裕があつて良い。

- ①どこの誰(出身や回生、サークルやゼミ。)
- ②最近の関心ごと、きになっていること。
- ③この授業を取ったわけ。期待すること。
- ④NGOやNPOって何だと思っている。

グループ分けの後、①~④についてメモをさせる。そして、先ほどのグループワークのように、数分で話し合い、隣の人も、顔見知りになった所で、本題に入る。この場合、NGO授業の初回であるため、NGOとは~という話をするよりも、「東アジア地球市民村 in 上海」というイベントで、日中を繋ごうとしているNPOが主催の集まりに参加してきた話をスライド混じりで紹介し、NPOの活動の一部の例として紹介する。そのあと、ミニミニ講義で、NGOとは~とい

った話を少しだけ行なうようにしている。教科書的な NGO は、もともと国連のほうからできた国際的な団体に主に使われる。教科書的な NPO はアメリカの非営利組織で税政関係から生まれた言葉であり、日本でこれが法制化されたのがまだ最近であるから、日本ではまだまだ始まったところ。といった話を 10 分ぐらいです。

工夫のポイント

- くじでやる
- 学生同士で「問い」について話し合う
- 対話の機会を何度も作る
- その上で全体にシェアし、質疑応答などのやりとりをする
- 学生スピーカーを募集する（NGO・NPO でボランティア経験者を募る等）
- フィードバックシートを書いてもらい極力活かす
- 双方向の授業であることを伝える

最初の授業から宿題を課す

「NGO・NPO とは」を高校生に簡単に説明する（400 字程度）

検索すれば何でもでてくる時代だが、自分が高校生に説明するならどのように説明するのかを考えさせる。また、具体的な団体を 2 つ取り上げ、概要(名前と目的と主な活動)を調べ、まとめる。具体的な団体がどうしても分からない受講生がいる場合は、例としていくつかの団体を挙げ、その中から興味あるところを選択する。聞いたことを自分で言い直すことで、自分も身に付く。教員が伝えたことをすぐに忘れてしまうよりは、学生自身が調べて少しでも身に付けてもらおうという試み。

成績評価基準

- 出席：各回 5 点。出席と積極的な参加が何よりも必要で、宿題も毎回のように出題。
- 中間レポートと期末レポート：加味する程度。

遅刻、私語、居眠りは論外としてスマホ、携帯も原則禁止。稀に「人に迷惑かからないからいいでしょ」という態度をとる学生がいるが、そこは迷惑であるとはっきりと伝えている。授業の途中、グループワークを行なう時に、それまで寝ていた人がいると作業をする上で迷惑がかかるし、遅れてきた場合、既にグループ分けをした後だと迷惑がかかる。単にダメと言うのではなく、ここ（教室）にいることを選択した自分自身に対する姿勢の問題であることを伝えるようにしている。他のことを選択するのであれば、教室から退出して頂くということまで、場合によっては伝えている。

出席票は、フィードバックシートを兼ねて毎回提出してもらっている。200 名以上の大人数授業となると教員の負担は非常に大きいのだが、頑張って全部読み、その後の授業に活かしている。

ボランティア募集

250人以上が履修登録する授業においては、資料の配布や机上札貼り等の作業で毎回大イベントになる。そこで受講生の中から5名程ボランティアの募集を行なったところ、7名応募してくれた。授業前に時間が空いている人は研究室から一緒に物を運んだりしている。

第2回目授業

各自が手分けして調べてきたNPOを紹介し合う（調べてきたことを分かち合う）。

第3回授業

座席およびグループは3回目まで固定にしておき、4回目には変更するようにしている。2度だと、あいさつだけで終わるが、3度以上会うと、ちょっとした“知り合い”になるので3回とした。ただし、授業の後半はもう少し固定することがあるが、その辺は試行錯誤しながら調整するようにしている。3回目も今日の流れ→オリエンテーション→グループワーク→フィードバックを行なう。毎回のフィードバックシートからは次のような生徒の声があった。

- 学年の異なる人との意見交換が楽しかった。
- 人の考え方は異なるものなので、非常に勉強になる。
- 最初は知らない人といっしょになるのは非常に緊張するが、違う考え方があってこそ、学びがあるってことがだんだんわかってきた。
- 苦手意識があったけど、意外と楽しくできた。
- 調べ方がすごい人を見ると良い刺激を受けた。
- 人のレポートを初めて見て、なるほどそういうやり方があった。

学生スピーカー

授業の中で学生スピーカー候補を募ると3名の応募があった。受講生からすると、隣にいる人が教壇にあがって話し出すと、皆「そこまで考えているのか」と非常に刺激を受けるようで、教室がシーンと静まり返り、学生スピーカーに釘づけになる。

[映像視聴]

【小グループワーク】8分

ここまでの話でメモをした「印象に残った点」「聞きながら考えたこと」を、グループチェックインで使用したA4用紙の右側を利用し、次のことを順番に話していく。

- ③印象的なこと。良い面でも疑問面でも。
- ④聞きながら考えたことは。自分の現場に引き付けて、これは使える等、考えていたこと。

【グループワーク】10分

グループで話題になった意見や疑問などを全体で共有するため、1つの輪になり話し合う。そこで、今グループで話し合ったこと、前半で印象的だったこと、或いは疑問だったこと。そして、こんなことを自分の現場にも活かそうと考え始めている、といったことをシェアする。

【質疑応答】

参加者 A 氏 宿題をやらせた場合、やってこない学生への対応の仕方について。

中野先生 中間レポート等の大きい宿題はチェックするが、普段はしない。グループワークで気まずい思いを敢えて体験させ、本人が自ずと正して頂くのを期待している。

参加者 B 氏 フィードバックシートについて、200名以上の授業だと学籍番号順に並べるだけでも時間がかかる。多かった評価・項目を書きだすだけで、授業で30分はかかってしまい負担が増えていくので、2年目はやめてしまった。その辺りにかかる時間はどうやって捻出されているか。

中野先生 確かに200枚読むだけで、2・3時間かかる。出席簿への転記はTAにお任せしている。シートは、マーカーをつけながら読み、だいたい自分に沁みたものにAを付している。分析等はせず、気になったシートをよけておき、最後にもう一度見直し、コメントを書いているので時間はかかる。授業でのフィードバックは、前回の振り返りとあわせて5分くらいに留めている。

参加者 B 氏 授業でフィードバックをする項目の基準とは。

中野先生 多かった意見と、着目すべき少数の意見と両方をバランス良く抽出する。また、ネガティブな意見や提案も含めて抽出している。

参加者 C 氏 くじを引いて座るまでの時間がどれくらいかかるのか。週に何コマくらいされていて、全てを参加型授業のスタイルでやられているのか。

中野先生 週5コマで、全て参加型授業のスタイルでやっていた。ただし人数が多い授業は一つだけで、あとは130人の授業が一つと、その他は10名前後の少人数授業になる。着席には、特段時間はかからない。慣れてくれば、ワールドカフェ等で教室のレイアウトを変えていても15分でもとに戻せるようになった。

参加者 D 氏 教師育成からの観点からグループワークには興味がある。小学校でもグループワークを積極的に取り入れている学校は多いが、実際に教師になる学生が大学でこのような授業を経験していないというところが問題であり、大学の中でしっかりと学んでおかないと現場で全く歯がたたないということが、私が問題視している点である。紹介して頂いた大人数講義のグループワーク（ワールドカフェ）について、あれほどの人数を捌いているのは驚いた。例えば、停滞しているグループを教員がフォローできる数は、8から10が限界であると経験的には思っている。中野先生はどのような手法で多数のグループをマネジメントされているのか。また、講義の後に集まって学生の話の聞いたり、次の手だてを考えたりとか、裏方の仕事はどのくらいなさ

っているのか。

中野先生 余裕があれば入るが、基本的には全てを把握することは不可能なので、逆に任せるようにしている。一部のグループの状況を見たら全体の状況もある程度推測はできる。学校の良い部分は、失敗しても学び直すことができることであるし、失敗から学ぶことが多いと思っている。今は様々なことを手取り足取りサポートしていて自由すら与えてないような気がするので、そういう意味ではどんどん失敗したらいいと思う。

[休憩

【グループワークの手法・工夫】

以前、約 130 人の授業で、学生から「10 分 15 分話すのは楽しいけれど、もっといっぱい話したい」という意見があったのでワールドカフェを実施した。ただし、机の移動が難かったため、2:2 で座らせ、後ろの偶数列に「えんたくん」と紙を置き、グループで「この仲間と問い合いたいのは何か」というテーマについてあらかじめ考えてきてもらい、話し合った。

ワールドカフェはアメリカで開発されて 20 年になるグループワークの手法の一つである。授業の後半は、机を外し、「えんたくん」という 1m 程の丸いダンボールの上に丸い紙を敷いて、キーワードをメモしながら話し合った。「えんたくん」は、環境科学のパイオニア川嶋直氏が発案したツールなので、一度検索して調べてみてほしい。

また、少人数クラスでは、最初(チェックイン)と最後(今日学んだことなど)に、皆で輪になって順番に話すということをしている。これを繰り返すと人前で話す練習にもなり、最初は人前で話すのが苦手だった生徒が 15 回の授業の後「そんなに負担じゃなくなってきて、あの授業のおかげで話せるようになった」という意見もでてきた。大学院の授業も最初はこのような形で始めている。グループワークの時、輪になったり、机を花びら型(放射状)に並べて座ると、他のメンバーを見渡すことができるので試してみてほしい。

落ち着いた雰囲気でのゼミ

ゼミは同志社大学の京町屋キャンパス「江湖館」で行なっていた。最初に身体と呼吸を整え、瞑想も少し行ない、落ち着いた気分で授業をしていた。

口の字の工夫

大きな口の字ではなく、口の字の中を机で埋めて、囲むように座る。中が空いているのとは、雰囲気が変わり、“よそよそしさ”がなくなるので、実験してみてほしい。

食に関わる授業

大学 1 年生で下宿の学生は親元を離れており食生活が不安定なので、食育に関わっている卒業生や大学院生に協力していただき、食育に関する授業を実施したこともある。

「みんなの楽しい修行」(春秋社 2014) 紹介

より納得できる自分の人生と社会のための 10 の項目をまとめたもの。

- 2つの基本
 - (1) (至福)自分の至福についていく
 - (2) (今ここ)今ここをマインドフルに

- 8つの道
 - (1) (身心)身体と呼吸と心を調える。
 - (2) (食農)食生活を正し農に触れる
 - (3) (自然)外と内の自然を体験する
 - (4) (対話)多様な人々と対話をする
 - (5) (旅)未知なる異世界を旅する
 - (6) (仕事)目の前の仕事をやりきる
 - (7) (アート)もっと気楽にアートする
 - (8) (祈り)祈ることと感謝すること

【大教室での参加型授業の工夫 8か条】

①座り方の工夫(場づくり)

教室の席は扉でクジを引き、少人数のグループを作る。

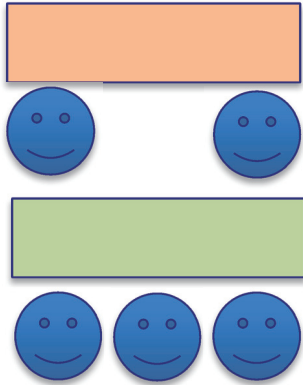
- 大教室どこから座りますか
 - ・後ろと横から埋まり、前はがら空き
 - ・友だちと一緒に来れば、ついおしゃべりをしてしまう
 - ・知らない人と出会い、話す機会がとても少ない

↓

- くじで座席を指定して、知らない人と隣同士に
 - ・前からぎっしり濃密空間
 - ・何かのご縁、あらたな予感
 - ・初対面の人とコミュニケーション、良い緊張感
 - ・多様な人と考え方に会い、刺激し学び合う

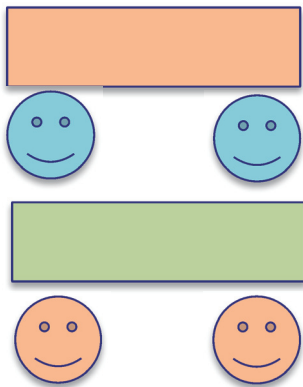
5人組み

奇数列の中央を空け、前の2人が振り向いて5人組とする。



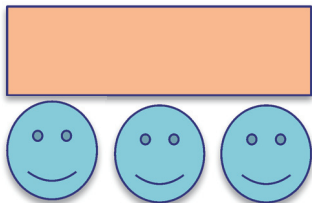
4人組

3名掛けの机に2人ずつ着席。2人ペアでも4人でも話すことができる。



3人組

受講者数の関係で空席作れなかった場合は、3名掛机に3人座る。この場合、中央の人が背を引き、両側の人を身を乗り出して聞き合うことになる。



②まずは皆が一言話す。(場づくり 2)

- a. どんな人がどんな思いでここにいるの？
まずは、一人ずつ声を出すことから始める。大教室なら小グループやお隣と。少人数なら全員で。
- b. 「問い」があると話しやすい。
- ・「今の気分は？」(身体や心の調子)
 - ・「今週のトピックスは？」(近況)
 - ・「先週のゲストで印象に残っていることは？」(復習)

効果

自分から話すことで、場への参加意識が高まる。お互いにどういう人か少し分かり、安心する。

③どう生きたらいい？(関心喚起)

専門の勉強以前に「人生」に焦点をあてて生きる意欲を。

- 「若者よ、旅せよ、恋せよ、大志を抱け！」
自分の学生時代からの悩みや一人旅の話を。
- NGO・NPO 論
NPO を創った人やそのスタッフに来てもらい、活動半分とそこに至るライフストーリー半分で講演。弱さ克服などの生き方に反響大。
- 政策トピックス「至福の追及と社会変革」
”Follow your bliss”by Joseph Cambell。気になること、気を惹かれることについていこうよ
- アカデミックスキル読解：生きる意味を巡って
「夜と霧」(ビクトール・フランクル)をともに読み込み、対話する。
- FYE(First Year Experience)
少人数制の対話を重ね、「大学時代にやりたいこと」明確に。

④学生にチャンス！(機会提供)

学生の中に特別な経験をしている方がいたら、スピーチを頼めば皆釘づけになる。

以前 NGO 論で学生に体験談のスピーチを頼んだところ大ヒットした。

- ・休学して Teach for Japan で専従スタッフとして活躍されていた I 君
- ・休学して東京で UNHCR や JVC でインターンした T さん
- ・春休みにスタディツアーでフィリピンに行った I さん

同年代の見事なプレゼンと行動力が刺激になり、学生相手だと聴講の学生から多数の意見や質問があった。教師の役割は「若者にチャンスを創って任せること」であると改めて感じた。

- ・フィードバックシートに書いたり申し出てくる学生の話聞く
- ・「オープンマイク」でインドの旅報告や催事紹介等をしてもらう
- ・「オープニングミュージック」で、音楽演奏の機会を与える

⑤横の対話を促す(対話促進)

ひとしきり話を聴いたらグループで、気づきや発見を話し合う。20分も一方的に話すとは寝てしまう。ならば、話は短く切り、小グループで「ここまで聞いて印象に残ったこと、もっと聞きたいことは？」といったことについて話し合う(ぺちゃくちゃタイム)。そうすると、聴いていないと話せないし、話していれば眠くならない。

様々な対話の機会を与える

- ・ 毎回最初はチェックイン(近況や今の気分)
- ・ 宿題を出し、まず小グループで発表し合う
- ・ その場で資料を手分けして読み、報告し合う
- ・ フィードバックシートを書いて、シェアし合って終了

⑥あてない主義(自主性尊重)

全体で質疑応答シェアリング、決して当てずにじっと待つ。

大人数でなかなか手が挙がらないことについて、日本は周りがどう出るか空気を読みあう文化、同調圧力があるので、分かっている人も手を挙げない。だからといって、教師が当ててしまうと、学生にとってはわざわざ手を挙げる気はしなくなるのではないか(あてる教育が主体性をそこなってきた)と考えている。

そこで、授業の最初に「自分は絶対にあてません。手が挙がらなかったら残念だけど先にいきます」と宣言し、意見を求める時はしばらく無言で待つことにしている。そして、実際に手が挙がらなかった場合は、「残念だなあ」とつぶやいて本当に先に進んでしまい、あえて学生を悔しがらせることをしている。

ただし、この試みが功を奏しているかどうかはまだ十分に検証されておらず、現在も試行錯誤をしているところである。

⑦困った常識、どうしましょ?(学生心得)

「出席は100%今ここに、私語スマホ読書居眠りありえません」

大教室の後ろの方では、私語・スマホ・居眠り等がある意味で常識になってしまっていて、諦めてしまっている先生もいるかもしれない。先述のとおり、遅刻・私語・居眠り・スマホ・携帯は原則禁止。学生には、ここ(教室)にいることを選択した自分自身に対する姿勢の問題であること

を伝え、場合によっては教室から退出させることもある。

⑧フィードバック・ループ(循環生成)

「最後にはフィードバックを集めます。きっちり読んで次につなごう」

授業の最後には、出席確認を兼ねて、小さなコメントシートを提出させている。大人数の場合、読むにも転記するにも大変だが、自分なりのまとめ方を身に付けて効率化を図っている。

また、学生は挙手することはしないが、紙に書くとなるとみんなお利口で立派なことを書いてくれる(寝ていた子も?)。最初はその内容に一喜一憂していたが、今は「もうだまされん」という気持ちで見ている。

コメントシートで学生から提案があった場合は、その提案を極力活かして、授業デザインに組み込むようにする。例えば、「本を紹介してほしい」との意見があった場合はクリスマスのイベント(キャンドルナイト)のような場を設定して自分のお気に入りの本をプレゼントし合ったり、「皆でもっと話し合いたい」との意見があった場合はワールドカフェを開催する等している。

● 学生にとっての参加型授業の意義

1. 多様な価値観に触れ、「世界」が広がる。
 - 考え方の違う「他者」から互いに学び合う。
2. 生身のコミュニケーション力が上がる。
 - 人と話すことの難しさと楽しさを体感。
3. 主体性が育まれ、意欲も上がる。
 - 自らの小さな一歩の手ごたえ。その好循環。
4. 学び合う「楽しさ」に目覚める。
 - 皆、生き生きしてくる。学生も教員も。

● ファシリテーションが拓く新たな大学教育

1. 今大学はいったい何をする場なのか?
 - 知識の授受だけであればネットから即座に取ることができる時代。ハーバードの授業もネットで観ることができる。
 - そのような中で、生身の人間がわざわざ集まっている意味は何か?
2. 「対話」と「学び合い」の世界へ
 - 生身の対話、道後の刺激で、「生きること」と「学び合い」への意欲を引き出そう。
3. ワークショップやファシリテーションは活用できる。
 - 課題は、成績評価をどうするか、大きな問題。
4. 「教える」より、「学び合う」場を創ろう。

東工大立志プロジェクト

ワークショップは、本来的には安心・安全な場でのびのびと行うものである。そこに教師が介入し評価しだすと、生徒にとっては決して安心・安全な場ではなくなる。などと言いつつも、やはり成績を付けなければならないため、非常に悩ましいところである。

東工大の学生でも“人から評価される”というマインドが高校生の時から染み付いている。初年次科目の立志プロジェクトという授業では、池上彰氏の講義を聞いた後、グループワークを行ない、そこで何を聞いたか、そこから何を学べるか、自分の志にどう影響を与えるかといったことを議論することを行っているが、その授業では、成績評価を Pass or fail (合否だけ) にすることについて相当議論している。この授業においては、人から評価されるよりも、やはり自分自身が納得した人生を歩めるか、自分が本当にやりたいことをやれるか、志を立てることができるといったことが大事である。そのような授業で学生に点数を付けるのはふさわしくないだろうと考えており、慎重姿勢の大学当局と闘っているところである。

【5つの基本技(基礎スキル)まとめ】

①場づくり

a. 空間のデザイン

- 椅子や机の並べ方という物理的なところ。
- 固定席でもやれることはある。

b. 雰囲気づくり

- 心理的な部分をどう整えるか。チェックインやオリエンテーションなどをきちんとし、何をしようとしているか土俵をはっきりさせる。
- チェックインで皆一言（音楽、歌、映像、音読等）。

②グループサイズ

- 様々なサイズを自在に使いこなす。
- 2、3、4、5人、全体の特性を活かして繰り出す。

③問い

- 身近・具体・触発・裁かれない問いから始める
- 自分の経験から出発し、次第にテーマに向けて本質的な深い問いへ

④見える化

言葉、議論、アイデアは思いつき、発言してもすぐ霧散してしまうので、アイデアを書き出し、見える形にする。ワールドカフェなどは「見える化」の良い例。

⑤流れのあるプログラムデザイン

90分の中で、人の身体と心の自然をふまえた起承転結で流れを作る。時間管理もしっかりと行なう。

【教員として心がけたい事】

- 教えるより学び合う場を創るには。
- アクティブラーニングには丁寧なファシリテーションが不可欠。
前述の基本スキル（場づくり、グループサイズ、問い、流れ等）を繰り返すには技と心構えが必要。
- 「学習者中心」という視点
“教員は教える人”というアイデンティティが築かれているので、なかなか学習者目線で観ることは難しい。
- カール・ロジャースの三つの条件
人を育てる、人に教えることはそもそもできない。人は自分がその気になった時しか、成長しない。そのために以下の三つが不可欠である。
 - ・自己一致、純粹さ
 - ・受容、無条件の肯定的配慮、関心
 - ・共感的理解これらを備えた人の前で人は自ずと成長する

【グループディスカッション】5分

- ・席に一人だけ残り、他の参加者は席を移動し、学んだこと、活かしたいことなどを話し合う。

【質疑応答】

塩満：授業内での具体的な叱り方などを教えてほしい。

中野：うつ伏して寝ているのなら「出て」と言うぐらい。本当に許せない時、きつく言って回ることもある。怒ると後で消耗してしまう。まだまだその辺は悩ましいところ。

岡：手が1回目や2回目だとなかなか挙がらない。授業を進めていく過程で徐々に挙がってくるようになるのか、それとも自発的に手が挙がる試みを授業中にされているのか。

中野：その年やグループによって違う。放っておいても活発に話し始めた年もあれば、そうでない年もある。また、最初は活発に意見を述べていた子が、途中から手を挙げなくなったので後で本人に聞いてみると、「僕だけが手を挙げていると後で小グループに戻ったときに罰が悪い」という意見があり、これはショックだった。皆がアメリカのサンデル教授の授業のように発熱した討論をしてほしいとは言わない。いきなり人前で話せと言われても話せないということも、それもまた日本の文化だと認識しており、日本のやり方があると思っている。机を自由に動かせるときには小グループを作って話しやすい環境を作ったり、意見を書かせたりすると、皆一応は自分の意見を書いてくる。中規模の人数でグループワークをしたい時は、最初は4人の小グループで話し合い、その後8人、12人といった具合に人数を増やすと話し易い。

グループワークをはじめよう！

【抜粋配布用35p版】

2015年10月29日
ワークショップ企画プロデューサー
東京工業大学教授
中野民夫

主な著作



ワークショップ
新しい学びと創造の場
(岩波新書, 2001)

16刷！



ファシリテーション革命
参加型の場づくりの技法
(岩波アクティブ新書, 2003)

8刷！



自分という自然に出会う
(編著, 講談社, 2003)



ファシリテーション
実践から学ぶスキルとコツ
(共著, 岩波書店, 2009年)

5刷！



対話する力
ファシリテーター23の問い
(共著, 日経出版社, 2009年)



みんなの楽しい修行
より納得できる人生と社会のために
(春秋社, 2014年)

New!

今日の流れ (Agenda)

- 1515 開会、研修会開始・オリエンテーション
- 1530 ミニ講義・グループチェックイン
- 1540 「大人数での参加型授業」の紹介
 - ・グループワーク①
- 1630 「参加型授業の工夫8か条」とファシリテーションの基礎スキル
 - ・その他の授業での工夫
 - ・グループワーク②・全体で質疑応答
- 1715 終了予定

自己紹介

- 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院(来春正式発足)教授
 - 社会性・人間性を兼ね備えた志ある人材を！人としての教養を。「コミュニケーション論」
- 元同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科教授
 - 「至福の追求と社会変革」をテーマに、参加型授業を実践
- 2012年3月まで、(株)博報堂に30年勤務
 - 大阪営業から。愛知万博「地球市民村」、環境・NGO・CSR等社会テーマ系等。
- ワークショップ企画プロデューサー
 - 90年前後に米留学、組織変革等。01年『ワークショップ』(岩波新書)出版
 - 市民活動、NPO/NGO、企業、行政、まちづくり、研修、学校教育、環境教育等
- 屋久島「本然庵」庵主

今日の目的

- 最近重要視されるアクティブラーニングの中でも、「グループワーク」の効果的な進め方を学ぶ。
 - 学生の生身のコミュニケーション力や主体性を育む「参加型授業」を創る、「ファシリテーション」のポイントを学ぶ。

ワークショップ (WS) とは

- “workshop” :
 - 工房、仕事場、共同作業場。一緒に創る場
- 「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする、学びと創造のスタイル」(『ワークショップ』中野2001)
- 「参加」「体験」「相互作用」が鍵

私の原点

- Joanna Macyに、湾岸戦争(1991)の時のインタビューで、「戦争を止めるために、私たちに何ができるのでしょうか?」と聞いたときの返答:

「孤立しないで、集い合い、
問い合わせることが、力です。」

* 最近ジョアンナ・メイシーの「アクティブ・ホープ」(春秋社)出版!

7

ファシリテーション(F)とは

- “facilitate”
 - 「促進する」
 - →物事を、効率よく進める。相互作用や創造性を促す。
 - 「<事を>容易にする」
 - →緊張や紛争を解く。ステップを刻んで、導く。
- 「人々が集い、何かを学んだり、対話したり、創造しようとする時、その過程を、参加者主体で、円滑かつ効果的に促していく技法」(中野2012)

8

WSやFの可能性

- 「非日常」の場だからこそできることがある。
 - オフサイトの意義。非現実だが表層的な日常より「リアル」
- 所有や支配でなく、「関係の豊かさ」を紡ぐ。
 - 人は、一緒に話したり、創ったりがこんなに楽しい!
- 自分ごとになり「当事者意識」が高まる。
 - 聞くだけでなく、自ら参加して得たものには自ずとコミット
- 互いの一言が場を動かす民主主義の練習
 - 「一人では何もできない」「どうせ変わらないよ」を超えて

9

グループ・チェックインから

- チェックイン
 - どんな人がどんな思いでここに?
 - グループごとに、全員がまず一言話し、聴き合う
 - A4用紙を二回折って四つに。
- 最初のお題は、まず左側の二つ(次頁)
 - ①「どこの誰?」
 - 所属・活動、お名前
 - ②「参加動機」
 - 今日来たきっかけやわけ、今日の期待など
- 時間はあわせて6分。話す箇所だけ見せながら。

①どこの誰?
(所属・活動、名前)

②参加動機は?
今日来たきっかけや
わけは?

後ほどのグループワークを
有効に進めるために

- これから「大教室での参加型授業」事例紹介を30分くらい話します。
- そのあと、見聞きしたことについて、小グループで振り返りながら学びあいたく。
- そこに向け、主に次の観点でメモを。
 - ③印象的なことは? 良い面でも疑問でも。
 - ④聞きながら考えたことは? 自分の現場にひきつけて、これはこう使える! 等、考えていたことは。

大教室での参加型授業の試み
【実践事例事例】

同志社大学政策学部
「NGO・NPO論」
(約200名)

アシスタント:
13年: 共同研究者1人、TA3人
14年: 受講学生ボランティアのみ
15年: TA1人+学生ボランティア

13

小グループワーク①

- ここまでの話をどのように聞きましたか?
- 「印象に残った点」
- 「聞きながら考えたこと」
の2点で、ポイントをキーワードでメモしてから、話し合ってみましょう。
- 先ほどのチェックインのシートの右側に、まずキーワードを大きくメモ。
- 時間は、8分。(4分で合図します)
- どなたからでも結構です。迷うようなら私に一番近い人から。

①どこの誰?
(所属・活動、名前)

③印象的なことは? 良
い面でも疑問でも。

②参加動機は?
今日来たきっかけや
わけは?

④聞きながら考えたこと
は? 自分の現場にひきつけて、
これはこう使える! 等、考えてい
たことは

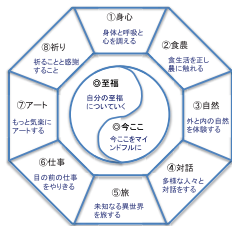
【後半】

その他の授業での工夫

16

『みんなの楽しい修行』(春秋社、2014)
より納得できる自分の人生と社会のための10のこと: 2つ
の基本と8つの道

- ◎二つの基本
 - 自分の至福について 【至福】
 - 今ここをマインドフルに 【今ここ】
- ◎八つの道
 - ①身体と呼吸と心を調える 【身心】
 - ②食生活を正し農に触れる 【食農】
 - ③外と内の自然を体験する 【自然】
 - ④多様な人々と対話をする 【対話】
 - ⑤未知なる異世界を旅する 【旅】
 - ⑥目の前の仕事をやりきる 【仕事】
 - ⑦もっと気楽にアートする 【アート】
 - ⑧祈ることと感謝すること 【祈り】



17

大教室での参加型授業の工夫
8か条

お手元の配布資料をご覧ください。

18

「大教室での参加型授業の工夫8ヶ条」
中野民夫

1. 教室の席は扉でくじを引き、少人数のグループ作る。
2. オリエン後チェックインから始めます。横に坐る子ども人？
3. 専門の勉強以前に「人生」に、焦点あてて生きる意欲を。
4. 学生の中にいるいるやってる子、スピーチ頼めば皆釘付け。
5. ひとしきり話を聴いたらグループで、気づきや発見話し合う。
6. 全体で質疑応答シェアリング、決してあてずにじっと待つ。
7. 出席は100%今ここに、私語スマホ読書居眠りありえません。
8. 最後にはフィードバックを集めます。きっちり読んで次につなごう。

19

1. 坐り方の工夫(場づくり)

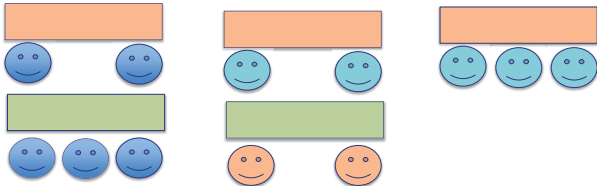
「教室の席は扉でくじを引き、少人数のグループ作る」

- 大教室、どこから坐りますか？
 - 後ろと横から埋まり、前はがら空き、寂しいな。
 - 友だちと一緒にくれば、ついおしゃべりも。
 - 知らない人と出会ったり話す機会、とても少ない。
- ↓
- 「くじ」で座席を指定して、知らない人と隣同士に
 - 前からぎっしり濃密空間。何かのご縁、新たな予感。
 - 初対面の人とコミュニケーション、良い緊張感。
 - 多様な人と考え方に出会い、刺激し学び合う。

20

5人・4人・3人組の坐り方

- 【5人組=2+3】
奇数列真ん中空ける。前の二人が中向いて、ふりかえれば、あら不思議、5人組！
- 【4人組=2+2】
3人掛けに2人ずつ。2人ペアでも4人でも話せる。偶数列にえんたくん乗せれば最高。
- 【3人組】
空席作れず机ごとに3人で。真ん中の人が背を引いて両側乗り出せば濃い関係。



21

2. まずは皆が一言話す(場づくり2)

「オリエン後チェックインから始めます。横に坐る子ども人？」

- どんな人がどんな思いでここにいるの？
 - まずは、一人ずつ声を出すことから始めよう。
 - 大教室なら小グループやお隣と。少人数なら全員で。
- 「問い」があると話しやすい。
 - 「今の気分は？」(身体や心の調子)How do you feel now?
 - 「今週のトピックスは？」(近況)what's going on in your life?
 - 「先週のゲストで印象に残っていることは？」(復習)
- 効果
 - 自分から話すことで、場への参加意識が高まる。
 - お互いにどういふ人が少しわかり、安心する。

22

3. どう生きたらいい？(関心喚起)

「専門の勉強以前に「人生」に、焦点あてて生きる意欲を」

- 「若者よ、旅せよ、恋せよ、大志を抱け！」
 - 自分の学生時代からの悩みや一人旅の話
- NGO・NPO論
 - NPOを創った人やスタッフに来てもらい、活動半分そこに至るライフストーリー半分。弱さ克服等の生き方に反響大
- 政策トピックス:「至福の追求と社会変革」
 - “Follow your bliss!” by Joseph Campbell
 - 気になること、気を惹かれることについていこうよ
- アカデミックスキル読解: 生きる意味を巡って
 - 『夜と霧』(ビクトール・フランクル)を共に読み込み、対話
- FYE(First Year Experience)
 - 少人数の対話を重ね、「大学時代にやりたいこと」明確に。

23

4. 学生にチャンスをと！(機会提供)

「学生の中にいるいるやってる子、スピーチ頼めば皆釘付け」

- NGO論で学生に体験談を頼んだら大ヒット
 - 休学してTeach for Japanで専従やってきたI君
 - 休学し東京でUNHCRやJVCでインターンしたTさん
 - 春休みにスタディツアーでフィリピン行ったさん
- 同年代の見事なプレゼンと行動力が刺激に
- オヤジの役割は「若者にチャンスを創って任せること」？
 - フィードバックシートに書いたり申し出てくる子を前へ
 - 「オープンマイク」で、インドの旅報告や催事紹介など
 - 「オープニングミュージック」で、音楽演奏の機会を

24

5. 横の対話を促す (対話促進)

「ひとしきり話を聴いたらグループで、気づきや発見話し合う」

- 20分も一方的に話すと、寝てしまう。
- ならば、話は短く切り、小グループで、「ここまで聞いて印象に残ったこと、もっと聞きたいことは？」等で話し合う。(べちゃくちやタイム)
 - 聴いてないと話せない。話してれば眠くならない。
- 様々な対話の機会を
 - 毎回最初はチェックイン。近況や今の気分。
 - 宿題を出し、まず小グループで発表しあう。
 - その場で資料を手分けして読み、報告し合う。
 - フィードバックシートを書いて、シェアし合って終了。

25

6. あてない主義 (自主性尊重)

「全体で質疑応答シェアリング、決してあてずにじっと待つ」

- 大人数では、なかなか手が上がらない。
 - 周りがどう出るか空気を読み合う文化、同調圧力
- だからといって、教師があてしまったら、もうわざわざ手をあげる気はしなくなるのでは？
 - あてる教育が、主体性をそこなってきた！？
- 「**ぼくは絶対にあてません**。手が上がらなかったら、残念だけど、先に行きます」と宣言。
 - あてれば、書かせれば、意見あるのは承知。
- しばらく無言で待つ。1、2、・・・10以上。
 - 上がらなかったら本当に先に行って、悔しがらせる。

26

7. 困った常識、どうしましょ？ (学生心得)

「出席は100%今ここに、私語スマホ読書居眠りありえません」

- 教室は何するところ？ (学費は1授業に約4,300円？)
 - こっちは本気でやってるのに、遅刻・居眠り、許せん！
- 私語は論外、スマホ・携帯、内職・読書はいいの？
 - 「迷惑かけなければ」と諦めていては、お互いによくない。
- うつぶして眠るのは、どうしても許せない。
 - うたた寝はともかく。「聞く気のない奴は外へ出て！」
- 「**ここにいるなら、今ここに100%いようよ！**」
 - モラトリアム心理。「(ここでない)いつかどこかで・・・」
 - それはいつ？ 生きているのは常に今ここ。Be Here Now!
- やる気ある人vsやる気ない人？
 - 「やる気がない人はいない。やる気がない時があるだけ」

27

8. フィードバック・ループ (循環生成)

「最後にはフィードバックを集めます。きっちり読んで次につなごう」

- 出席確認を兼ねて、小さなコメントシート提出
 - 200枚もあると、読むのも出席簿転記も大変だが
- 「今日、感じたこと、気づいたこと、発見したこと、講師への意見等、**フィードバックをよろしく**」
 - みんなお利口で立派なこと書く。寝てた子も？
 - 最初は一喜一憂していたけれど、もうだまされん。
- 提案は極力活かして、授業デザインに活かす。
 - 「本を紹介して」→キャンドルナイトで紹介し合う
 - 「皆でもっと話したい」→ワールドカフェ。
 - **フィードバック・ループは、生命活動の要。**

28

学生にとっての 「参加型」授業の意義

- 多様な価値観に触れ、「世界」が広がる！
 - 考え方の違う「他者」から、互いに学び合う。
- 生身のコミュニケーション力が上がる！
 - 人と話すことの難しさと楽しさを体感。
- 主体性が生まれ、意欲も上がる！
 - 自らの小さな一歩の手応え。その好循環。
- 学び合う「**楽しさ**」に目覚める！
 - 皆、生き生きしてくる。学生も教員も。

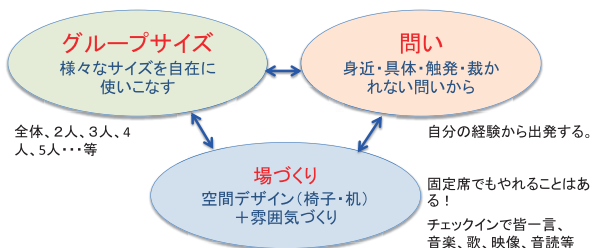
29

ファシリテーションが拓く新たな大学教育

- 今大学は一体何をする場なのか？
 - 知識だけだったら、ネットから取れる時代。
 - 生身の人間が、わざわざ集まっている意味は？
- 「対話」と「学び合い」の世界へ
 - 生身の対話、相互の刺激で、「生きること」と「学び合い」への意欲をこそ引き出そう！
 - ワークショップやファシリテーションは活用できる。
 - * 課題は、成績評価をどうするか、大きな問題。
- 「教える」より、「**学び合う**」場を創ろう！

30

「教える」から「学び合う場づくり」へ
「ファシリテーション」=参加型場づくりの技法
3つの基本スキルの応用



31

5つの基本技(基礎スキル)まとめ

- 一の技: **場づくり**
- 空間の物理的デザイン+関係性の心理的デザイン
- 二の技: **グループサイズ**
- 小グループ(1、2、3、4、4~5人)の活用
- 三の技: **問い**
- 共通で触発的、身近・具体・裁かれない問いから、順に。
- 四の技: **見える化**
- 言葉、議論、アイデアを書き出し、見える形にする。
- 五の技: **流れのあるプログラム・デザイン**
- 人の身体と心の自然をふまえた起承転結で流れを作る。

32

グループワークのはじめ方
【まとめ】

- ①場づくり:
- どう座るか? (→くじ)、オリエン、導入は?
- ②グループサイズ:
- 2、3、4、5人、全体の特性を活かして繰り出す
- ③問い:
- 具体的な事実、個人の体験、裁かれない問い、から始め、次第にテーマに向けて本質的な深い問いへ
- ④見える化:
- A4紙、板書や模造紙、ポストイットなどに書き出す
- ⑤流れのあるプログラムデザイン
- 人の心理と生理に即した起承転結。時間管理もしっかり

最後に
教員として心がけたいこと

- 「教える」より「学び合う」場を創るには?
- 「アクティブラーニング」には、丁寧な「ファシリテーション」が不可欠。
- 場づくり、グループサイズ、問い、流れ、ホールド...
- 「学習者中心」という視点
- カール・ロジャースの三つの条件
- 自己一致、純粋さ
- 受容、無条件の肯定的配慮/関心
- 共感的理解
- これらを備えた人の前で人は必ずと成長する、って!

34

参考: 関西での中野の講座

- **場づくりカレッジ**
- 11月7日(土)~8日(日)
- 主催: 場とつながりのラボhome'vi(ホームズビー)
- テーマ: 「プログラムデザインのセンスを磨く」
- **今日29日夜!**
- Impact Hub Kyoto(鞍馬口)でチャンティング・サークルwith Kevin James
- **京大での大学教育研究フォーラム**
- 2016年3月18日午前にワークショップ予定

35

第3回FD研究会

「学びをサポートするTAの活用方法」

開催日：2015年11月4日（水）17：00～

会場：佛教大学紫野キャンパス 1号館4階 1-404教室

発表者：岡崎 祐司（佛教大学 教育推進機構長 社会福祉学部教授）

松本 真治（佛教大学 文学部教授）

大西 気絵（ティーチング・アシスタント 文学研究科 英米文学専攻）

参加者数：5名

学びをサポートするTAの活用方法

本学のTA制度は、平成13年に運用開始され、これまでに多くの実績を残しています。

しかし、平成23年の中央教育審議会の「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」(答申)において、「TAの組織的な活用」と「大学教員の養成としてのTA」について提言があったことをうけて、わが国のTA制度の在り方が変わりつつあります。

そのような動向もふまえて、今回の研修では、教育効果を高めるため、TA活用方法について理解を深めたいと思います。

■開催概要

日時:平成27年11月4日(水) 17:00 ~ 18:30

会場:1号館4階 1-404教室

■プログラム詳細

- ・ TA制度の現状<岡崎祐司先生 教育推進機構長>
- ・ TAを活用した授業の実践事例報告<松本真治先生 学生支援機構長>
- ・ 授業補助をとおして得られたこと<大西気絵氏 文学研究科英米文学専攻>
- ・ まとめ:本学のTA制度のあり方<岡崎祐司先生 教育推進機構長>

■対象

専任教員 ※次年度TA任用申請をされた方は必ず受講してください

■申込

11月3日(火)までに教育推進課(内線:2332・2333)までご連絡ください



佛教大学教育推進機構

〒603-8301京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL:075(491)2141(代表)
mail: fdoffice@bukkyo-u.ac.jp

2015年度 第3回佛教大学FD研究会

1. 開催概要

開催日：2015年11月4日（水）17：00～18：30

テーマ：「学びをサポートするTAの活用方法」

会場：佛教大学紫野キャンパス 1号館4階 1-404教室

発表者：岡崎 祐司 先生（佛教大学 教育推進機構長 社会福祉学部教授）

松本 真治 先生（佛教大学 文学部教授）

大西 気絵 さん（ティーチング・アシスタント 文学研究科 英米文学専攻）

司会進行：岡崎 祐司（教育推進機構長）

参加者数：5名

2. 発表：岡崎 祐司 先生（佛教大学 社会福祉学部 教授）

本学のTA制度の運用について、これまで制度の運営や活動について説明する場や、TAを活用して頂いている先生からの報告・課題を共有する場が全くなかった。TAの科目申請をいただいた先生には、この研修会に参加いただき、TA制度に関する様々な意見・課題等を共有する場を作るために今回の研修会を企画した。

まずは、TA制度や業務について資料に沿って説明した後、実際にTA制度を活用してどのような成果や効果、あるいは課題があるのか、学生支援機構長の松本真治先生からご報告頂きたい、また今回は実際にTAとして活躍いただいている大西気絵さんからも、実際にTAを担当した成果や課題についてご報告いただく。

TAの目的

- 博士後期課程及び、修士課程の学生が、担当教員の指導のもと授業補助を行うことで、本人の研究者、教育者としての質の向上を目指す。
- 担当教員がTAを置くことにより、その教育効果を高める
- 大学院生が、今後、教育者として自立的に活動していくうえで参考になる所やエッセンス等を学び取ってもらう。

ティーチングアシスタントの業務(具体的な指示は教員から)

授業中における業務

- ・ 学生への助言
- ・ 実験・実習補助
- ・ グループワークの補助

- ・学生の質疑への対応
- ・出席管理補助
- ・情報機器の設置・装置補助
- ・授業環境の維持

授業外における業務

- ・授業の発表・報告のための指導及び支援
- ・レジュメ、補助教材の作成補助
- ・e-learning等の運用補助
- ・小テストや質問票や感想文の整理

担当することができない業務

- ・定期試験およびレポート試験の採点
- ・授業に関連しない業務(学会の実務等)

注意事項

- ・守秘義務(学生名簿、成績評価、USB、SNS等)
- ・学業とTAの業務とを両立
- ・大学によっては服装

ハラスメント

本学のハラスメントの規程に基づいて対応している。ハラスメントとお感じになったら教育推進課の方に相談してくださいと伝えている。

3. 発表：松本 真治 先生（佛教大学 文学部 教授）

TAの資格

- ・大学院生であること
修士、博士後期課程に在籍
- ・専門知識・能力
英米学科の科目担当であれば英語直が必須
- ・教育力
どこで、どのように確認するのか
- ・人柄
教員との相性

イギリスの高等教育

- ・ Postgraduate Certificate in Higher Education(PGCHE)

修士レベルの資格。大学教師(非常勤も含め)に最低限求められ、取得するのに約2年間くらいかかる資格。“UKPSF”という全英共通の枠組みに準拠している。

- ・ PGCH のプログラムで大学院生も教授法を学ぶ。

イギリスの高等教育における「基準枠組み」

“The UK Professional Standards Framework for teaching and supporting learning in high education” (The UKPSE)

- ・ 高等教育機関がそれぞれの教授法に関するプログラムを作成するための枠組み、教員の基準。
- ・ HEA(Higher Education Academy)をはじめとする7つの団体で作成。
- ・ 3つの領域に関して具体的な項目
 - ①活動領域：Areas of activity
 - ②コアとなる知識：Core Knowledge
 - ③職業倫理：Professional Values

以上3つに関して、達成しようということが書かれている。

①The UKPSE : Areas of Activity

高等教育では教えるだけではなくて、教える機能と自分の専門知識を継続的に職能開発していくことが求められている。

A1)学習活動、学習プログラムの設計、計画

A2)教授、学習支援。

A3)評価フィードバック

A4)効果的な学習環境と学習者支援の開発

A5)研究・学習・教育活動評価も含む、科目と分野とその教授法に関する継続的な職能開発

②The UKPSE : Core Knowledge

K1)科目内容

K2)科目領域と課程レベルに応じた教授・学習・評価方法

K3)学習者はどのように学ぶのか、一般論/科目・分野別

K4)適切な学習テクノロジーの実用性

K5)教授効果の評価方法

K6)質保証と質向上が、教授に焦点をあてた研究・教育活動に及ぼす効果・影響

③The UKPSF : Professional Values

V1)個々の学習者と多様な学習集団の尊重

V2)高等教育と学習者の機会均等の普及推進

V3)証拠に基づく手法と研究・学識・継続的職能開発の結果の利用

V4)高等教育の置かれた幅広い文脈と、教育活動に対するその影響の認識

The UKPSF : Descriptor

D1)PhD 院生／院生 TA／経験のない教員(含非常勤講師)／学術支援に関わる職員(e.g.図書館職員、学習関連の技術者)etc.

D2)キャリアの浅い研究者／教育に関して大きな責任を担う立場の学術関連・支援職員／経験はあるがイギリスでははじめての研究者 etc.

D3)模範となったり、影響を与えることのできる経験豊かなスタッフ／教育経験のない者を指導する、経験豊かな指導教授スタッフ／所属機関において学部・学科または全額レベルでの教育支援顧問の立場にある、経験豊かなスタッフ

英米系 TA の確保の難しさ

● 大学院生の人数

文学専攻英米文学系の場合

修士：4名

博士：2名(1～3回生：0名、4回生以上：2名)

上記の中から、更に英語力を求めると人材が限られてくる。

● 院生の時間割等の都合

院生の時間割等と、TA がつく科目の授業の時間がバッティングしてしまうと、更に人材が限られてくる。

英米系 TA の必要性

● 英米学科系科目受講生：15～100名程度

講義：100名程度

英会話：15～20名程度

TA がいてくれたらありがたいが、喫緊性はなく、数少ない TA を付けることができない。数少ない TA をどのように活用するか議論があり、TOEFL 科目への TA の配置や、特別講座の開講等がなされた。

TOEFL 特別講座

● 2004(平成16)年「英語圏長期派遣留学生養成 TOEFL 特別講座」(ペーパーダイ大学

派遣留学)として開講

- 国際交流課主催
- 春学期、秋学期のそれぞれ週 2 回(火・木)午後 6 時～8 時
- 最終回の授業で TOEFL-ITP 試験を受験
- 受講料：10,000 円(TOEFL-ITP 試験料込)(学生のモチベーションをあげるため)
- 各学期 10 名程度が受講

ペパーダイン大学 (Pepperdine University) 派遣留学

- カリフォルニア州マリブにあるカトリック系私立大学
- 派遣期間：2005 年 8 月～2006 年 7 月
- 学位取得を目的としない学生
- 留学先学費：本学が支給
- 「在学」身分で派遣(学費は支払うこと)
- 応募資格：通学課程の学部 2 回生以上
TOEFL550(CBT 213)以上
- 単位認定：30 単位を上限
- 申込み：2005 年 1 月～

授業内容

- 1～4 年生までの混合クラス
- 目標およびクラスレベルは TOEFL500 点以上
- 基本問題(語彙・文法・作文)は毎年、每学期同じものを繰り返し使用：3 年くらいで、ほぼ修得
- 他にリスニングやリーディングの教材を加える
- 3 年間くらいの学習で、TOEFL500 点到達(英検準 1 級も合格)
- 最高：TOEFL530 点(550 点は到達せず)
- 姫路獨協大学専任講師(阪大院経由)も輩出

基本問題

毎学期同じ教材を使用。解答時間に大きな差ができるため、個別指導の必要性がある。

- ・早く回答できた学生：どこかに間違いがあることだけを指摘し、プライドをくすぐる
- ・困っている学生：付き添って丁寧に個別指導

基本問題は前回分の復習を毎時間行い、4.5 人でできる子、できない子を混ぜて、学生同士で答えあわせをさせる。

- ・できる学生のプライドを利用：できなかつたら恥
- ・先輩のできの良さ：身近な目標となりうる

帰りの速読

授業の最後は毎回速読問題行っていた。4つのパッセージの趣旨を4択から選ぶ。4問とも解答できれば、即帰宅という形でやっていた。「解答できた人手を挙げてください、答え合わせするから」と問いかけ、答え合わせをしても、どれが間違っているかは教えない。

Advanced English(TOEFL)

2010年に仏教学部、歴史学部が開設されるときに英米学科もカリキュラムを改変した。その時に、課外講座のTOEFL講座を正規授業の講座にした。特別講座の経験から、3年間学習でTOEFL500点の目安から、Advanced English(TOEFL)1~6を開講した。(履修開始は1 Semester)。できる学生と初心者を混るため、春学期の1.3.5と、秋学期の2.4.6を合同開講している。

受講者

2010(平成22年度)	2011(平成23年度)	2012(平成24年度)
春学期 1H : 13名	春学期 1H+3H : 49名	春学期 1H+3H+5H : 61名
秋学期 2A : 18名	秋学期 2A+4A : 56名	

人数が50名くらい集まるようになってきた。

授業内容

TOEFL特別講座とほぼ同じ。レベル設定はTOEFL500点。英作文基礎問題を追加した。

*参考文献:「大学生のための英語の新マナビー第4巻、作文・会話ナビ」(海鳴社)

TAの必要性

初年度のような15名程度であれば、TOEFL特別講座のような授業展開が担当者一人でも可能だが、その人数を超えると担当者一人では同じスタイルが出来なくなってきた。そのことにより、TAが必要になってきた。

本学の全学共通科目の「英語」の授業は一応習熟度別にクラス編成をしている。TOEFL講座に関しては、受講生に合わせるのではなく、受講生がクラスのレベルに合わせる。そうすると学生のレベル差が生じることは必至であるが、それを解決するためには、複式学級の指導が必要である。その役割をTAに分担してもらうという発想になった。

TAの良さ

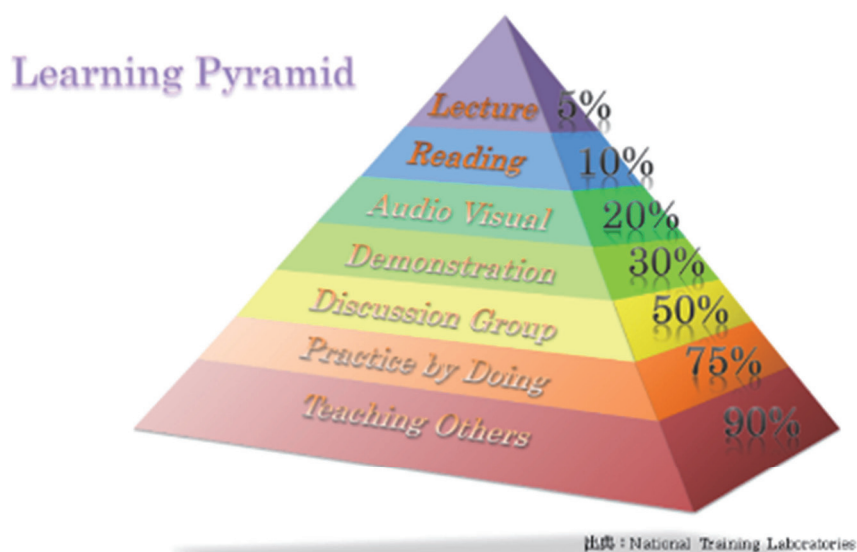
- 個別指導時に、他の学生を見てもらえる。
- 時には世間話をしながら、クラスを楽しみ雰囲気のできる。
 - ・ 授業内容が難しいので、クラスが楽しくないとすぐに離脱してしまう

- ・ 学年を越えた学習コミュニティの形成(英語上達を意識)
- 個別指導は教員でもいいが、年齢が近く、さらに女性の TA が良い場合もある。
- ・ 机間巡査中に解答を見せてくれない。
- ・ すぐには話しかけにくい学生もいる。
- ・ 覗き込みにくいときもある(特に女子学生)
- プリント配布を頼める

TA の課題

- TOEFL の授業であるから、それなりの英語力が必要
大西さん(TA)は学部時代にこの授業を受講
- 解答だけならいいが、解説まで任せるのか。
教員の講義を聴きにきているのに…
- グループでの英語スピーチ、ディスカッション、作文の添削をサポートできるのか。
教育力や専門性の高さが求められる。

【学習効果のピラミッド】



「他者に教える」ことが最も定着率が高い。われわれ教員も学生に教えて、学んできた。

【まとめ】

- 授業の効率、費用対効果という側面もあるが、大学院生を育てるという点では TA 制度は意義がある。
- すぐに効果的に TA が使えるわけではなく、担当者の工夫も必要。

4. 発表：大西 気絵 さん (TA 文学研究科 英米文学専攻)

TA として普段こころがけていること

昨年度 1 年間と今年度 TA を担当したが、まだ手探りの状態である。基本的に先生が前に立ち、解説されている時以外は、邪魔にならない程度に机間指導、机間巡視をしている。学生が問題の解き始めとか、リスニングなど、気が散る時には、歩き回らないようにしている。机間指導の時は、学生が問題を解いている途中に、横から見て、「何番が違うよ」と言う。答えを言わずに学生自身に考えさせて、導き出させるということを心掛けている。

実際に TA をして得られた効果

ある学生に、私なりの面白い単語の覚え方を提案した。次の週、授業始めに問題を解いてもらった時、その単語の問題を正解していた。普段、TA が入っている授業はあまりないため、どんなに小さなアドバイスも、学生にとっては大きく印象付ける効果がある。学生の学習のサポートにもなる効果がある。

問題点と改善点

- TA が解答を判断してよいのか。
答えは必ずしも 1 つではない。その場合 TA が判断してもよいのか。先生と TA の発言が違うと生徒も混乱するので、担当の先生との連携が大切である。
- 学生が授業と関係ない事をしている時の注意の仕方
学生同士という感覚があるので、下手に注意してトラブルになっても困る。担当の先生と打ち合わせして対策を考えるようにしている。
- 指導マニュアルの作成
例えば、科目の性質にあった指導マニュアル等を作成していただき、それをもとに担当の先生と TA が事前に打ち合わせをするといったことができるとうい。
- TA 制度がもたらす学部生への可能性
 - ・学生が前向きに授業に努める環境を作れる
 - ・学部生が院生を知るきっかけになる
 - ・大学院を身近に感じるきっかけになる

第4回FD研究会

「どうする入門ゼミ?! ～実践事例報告会～」

開催日：2015年11月11日（水） 16:30 ～

会場：佛教大学紫野キャンパス 1号館3階 1-309教室

発表者：伊藤 真宏（佛教大学 仏教学部 准教授）

山崎 覚士（佛教大学 歴史学部 准教授）

井上 洋平（佛教大学 社会福祉学部 准教授）

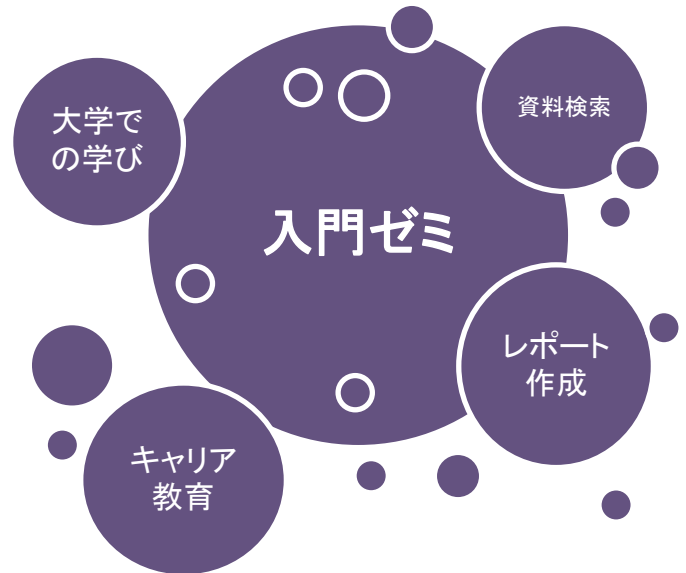
参加者数：20名

どうする入門ゼミ！？

～実践事例報告会～

本学では初年次教育の一環として全学共通で1回生の春学期に「入門ゼミ」を開設していますが、その授業運営には相当な時間と労力を費やされている先生方も多いと思います。

今回のFD研究会は、その「入門ゼミ」に焦点を当て、実際にこの科目を担当されている先生より、グループワークや教材の活用方法、工夫されている取組など、どのように授業運営されているかをご報告いただき、参加者とのディスカッションを通して「入門ゼミ」の発展に向けた足がかりにしたいと思います。



開催概要

日時：平成27年**11月11日(水)**

会場：1-309教室（紫野キャンパス1号館3階）

※二条キャンパスでの中継はございません

対象：①本学専任教員 ②本学非常勤講師

※入門ゼミ1・2の担当者はできる限り参加してください

申込：下記内容を記入のうえ、[fdoffice@bukkyo-u.ac.jp]までメールもしくはお電話にてお申込みください。

(内線電話:2332・2333) **11月10日(火)まで**

件名：第4回FD研究会申込み
本文：氏名、所属、緊急連絡先

※ 申込みメールアドレス宛に事務連絡およびアンケートのご依頼をさせていただきます

■タイムテーブル

16:10 開場

16:30 FD研究会開会

16:35 事例発表①

仏教学科 伊藤 真宏 先生

「『入門ゼミノート』の作成経緯と活用」

17:00 事例発表②

歴史学科 山崎 覚士 先生

「歴史学部と私のこころみ」

17:25 事例発表③

社会福祉学科 井上 洋平 先生

「入門ゼミに期待されるものと学生の実態(仮)」

17:50 全体討論

18:00 閉会



**入門ゼミ1・2の担当者は
できる限り参加してください**



BUKKYO UNIVERSITY

佛教大学教育推進機構

〒603-8301京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL:075(491)2141(代表)

mail: fdoffice@bukkyo-u.ac.jp

2015年度 第4回佛教大学FD研究会

1. 開催概要

開催日：2015年11月11日（水） 16：30～18：00

テーマ：「どうする入門ゼミ?! ～実践事例報告会～」

会場：佛教大学紫野キャンパス 1号館3階 1-309教室

発表者：伊藤 真宏 先生（佛教大学 仏教学部 准教授）

山崎 覚士 先生（佛教大学 歴史学部 准教授）

井上 洋平 先生（佛教大学 社会福祉学部 准教授）

コーディネーター：岡崎 祐司 先生（佛教大学 社会福祉学部 教授／教育推進機構長）

参加者数：20名

2. はじめに

岡崎 祐司 先生（佛教大学 社会福祉学部 教授／教育推進機構長）

初年次教育の重要性が叫ばれるようになって久しいが、本学の入門ゼミが初年次教育において大きな位置を占めていることは間違いない。ただし、初年次教育の役割を入門ゼミだけが担っているわけではなく、他の科目も含めての初年次教育と考えている。

入門ゼミについては、その年によって学生の性質が日々変化するので、学科及び教員は戸惑いながら授業を展開している部分もあるだろう。あるいは、しっかりした確信をもって進めているところもあるだろう。また、学生についても同様に、戸惑いながら入門ゼミを受講しているのが実情だろう。個人的には、新入生をどのようにして“高校4年生”から“大学1年生”にしていくのかという事が、平たく言えば入門ゼミもしくは大学の初年次教育のポイントだと考える。

初年次教育の定義については様々な議論がなされてきているが、学生の実像や実態であるとか彼らの心情といったものは、現在の高等教育の議論の中でモデルにしている学生像とは、明らかに異なっている学生もいる。そうしたところが、初年次教育において課題となり、この課題に対して様々な取組がなされている。今回のFD研究会では、初年次教育における課題や工夫について教員間で共有することが一つの狙いである。

入門ゼミのシラバスは、春学期については全学統一である。このことについては、様々な議論があり、統一シラバスに基づいて授業をしている学科もあれば、シラバス通りでは難しいという学科もある。入門ゼミのシラバスの在り方の議論も必要ではあるが、まずはカリキュラム改革に向けて、統一シラバスの課題や成果を含めて入門ゼミにおける諸問題を精査し議論のベースを作っていく必要があると考え、今回のFD研究会を企画した。

入門ゼミにおける取り組みの共有は、実は 4 年前にも実施したことがあるが、それ以来深められていない。本来は全学部学科の先生から報告していただきたいかったが、今回は報告者を 3 名に限定し、報告の後に意見交換をしたい。

3. 発表

「入門ゼミノートの作成と経緯」伊藤 真宏 先生（仏教学部 准教授）

入門ゼミについて、仏教学部の場合、シラバスは共通だが基本的には各クラスの先生の判断のもと、ある程度柔軟に取り組んでいただいている。ただ、そうすると当然色々な問題が生じてくるので、情報交換の場を設けたりするが、授業や会議等の関係でなかなか情報共有がすすまない。メールや、立ち話などで少しずつ情報を共有してきたが、共通シラバスがあったとしても、相当は教員の経験や授業の手法によって、科目の在り方や方向性が違っているという問題が少しずつ明らかになってきた。学生についても、2・3 ヶ月程経つと、ある程度学生間の情報交換が進んできて、「あの先生はこうだ」、「この先生はこうだ」といった情報が共有される。そうすると、「あの先生は合う、合わない」等といった教員への評価へと繋がり、学習意欲の低下といった様々な問題が起こってきたわけである。

そのような状況の中、教員の苦労話も含めた意見や工夫されている事例を集めていく過程で、ある教員から「孫みたいな学生となかなか話ができない」といった正直な意見があった。経験深い教員も、その経験や父親のような温かい、包み込むような人間性の中で、学生とうまく打ち解ける教員もいるが、一方でオヤジのように叱るつもりが全く響かなかったり、あるいは、叱られ慣れていないのか、叱ると次から授業に出てこない学生もいたり、世代格差によるコミュニケーションの問題が仏教学部では顕在化してきた。もちろん、学生だけでなく教員の資質にもよるが、いずれにしても 18 歳の学生との接し方という課題はあるだろう。

また、入門ゼミは 1 講目に設定されているが、学生の中で 1 講時目に大学に来るのが辛いという声がある。当然ながら、社会に出れば通勤時間や距離に関わらず、定められた時間に行くことは当たり前であり、その予備段階である大学においても、1 講目の授業にきちんと出席することは基本的なことであるという指導は勿論行なうが、やはり現実にはどうしても難しい学生が必ず存在する。遅刻者が多いと、当然授業においても教員が同じ事を何度も説明しないとイケない上に、真面目に授業を受けている学生から不満が噴出する。

その他の課題点として、教員間の情報共有がある。入門ゼミの各クラスを担当する教員の思いや情熱もあるので、入門ゼミの担当教員同士が「ここをこうしてください」ともなかなか言えない環境でもある。そのような背景もあり、シラバス以外で学部共通の学びの基本になるようなものが何かないかと考え、提案したのがこの「入門ゼミノート」であっ

た。

他の学部学科の学生も同様であるが、1回生の時に入門ゼミ、2回生で基礎ゼミ、3回生で卒業論文予備ゼミ、4回生で卒業論文ゼミという具合に、卒業に向けてゼミ科目が順序立てて設定されている。それを踏まえて、仏教学部では入門ゼミで何をやるべきなのかということを再考した結果、シラバスよりももう一步踏み込んだ内容のもの（入門ゼミノート）が必要との結論に至った。

作成の際には、学部全体に趣旨説明をして、入門ゼミノートに掲載すべき内容について各教員と相談し、色々な方からのご意見を頂戴して作り上げた。2年目には運用を開始し、今年度で4年目になる。勿論、新しい情報も盛り込む余地は多分にあり、常にバージョンアップしていくつもりであるので、この機会に様々なご意見を頂戴できたらと思っている。

まず、目次の頁の上部に次のような文言を載せている。これが入門ゼミノートのコンセプトになっている。

「入門ゼミは各学部設置されている。大学研究の専門の入り口に立つ皆さんに、文字通り入門して頂き、大学生生活を順調に進めて頂くためのゼミである。高校までの授業と違い、勉強の方法の違い等々様々な戸惑いがあるだろう。それらが少しでも軽減され、スムーズな大学生生活、研究活動ができるように、ゼミや講義が進められるだろう。仏教の分野を研究対象とする本学は、使いなれない用語や、新たに覚えないといけないことも多い。このゼミで基礎的な様々な方法を身に付け、基礎ゼミ、予備ゼミ、卒業ゼミとステップアップして、4年間の研究成果としての論文を書きあげる準備として頂きたい。身近な先生との信頼関係を気づき、友人関係を深めて、大学生生活を満喫して頂きたい。」

これは、大学の学びは研究活動であり、高校までの学習とは違うということを明確にするということを第一目的としている。

次頁は「大学の意義 学問とは 研究とは」という少し難しい内容だが、各クラスの教員が学生にそれぞれの内容を噛み砕いて説明し、或いは参考文献を読ませる等の課題を与えることで学生の理解を促す。また、少し広めにとった余白には、学生が直接書き込めるノートとしても使うことも想定している。

5頁では、大学でのノートの取り方、講義の受け方を具体的に記している。ここまで書いておくべきなのかという意見もあるかと思うが、中学や高校の学びとは違うことを明確にするためにも、講義を聴くという基本的な態度について項目立てて説明している。

9頁では、辞書や年表、地図、目録、作品等といった文献の活用方法についてレクチャーする内容となっている。11頁は、教員が学生を連れて図書館内を案内し、図書館の使い方や研究の具体的な進め方等をレクチャーする内容であり、このノートの一番の目玉である。後は、15頁の文章の読み方や深く読む方法、19頁の本の読み方や引用文献の確認等について、各クラスの教員が指導することで少しずつ大学としての学びを身に付けていくこととしている。

仏教学部の入門ゼミでは、入門ゼミノート導入の他にポイント制を取り入れている。1回の出席で4ポイントを与え、15回出席すると60ポイントになる。この60ポイントは60点という意味ではないので、出席さえすれば試験を受けなくても合格するという意味ではない。60ポイント+課題提出をもって成績を付けることができる形とし、学生の出席を促す仕掛けとして運用している。それに加えて、遅刻した場合は2ポイントで、別途提出物を提出すれば、ポイントにするといった細かい運用は各クラスの教員の裁量に任せている。

また、授業に変化を持たせるため、何回かは合同クラスでの授業、振替講義、学外授業も行なっている。今年度は、1回目の授業を合同で行なった。そこで、入門ゼミのコンセプト、ポイント制も含む入門ゼミの運営に関するルール、大学生としての学びといったことを説明した後、講義を行なった。講義では、仏教学部としての4年間の学びの概要や、入門ゼミノートの活用方法について説明をした。さらに、4年間の学びに必要な情報（研究所の情報や文献・辞書、専門分野の論文）を小冊子にまとめて配布している。

それから、5月には大学周辺を知るということも含めて、地域には多様な社会があり、そこに住む人々が互いに協力し合って生きていることについて意識し、考え、学ぶためにライトハウスへ見学に行った。ただし、ライトハウスは受け入れ人数が限られているため、2クラスずつ交代で実施している。

振替授業については、4月に開催される法然仏教学研究センター主催の講演会や、6月に開催される宗教文化ミュージアムの特別展への参加とレポート提出をもって1コマ分の出席に替えることとしている。学生はまだ仏教学を学び始めて日が浅いため、事前に合同ゼミで予備知識を修得させる等の工夫をしている。

このように、単に教室だけの授業ではなく、たまには合同授業、たまには外への見学という具合に、変化を取り入れながら、佛教大学或いは周辺の施設を知るという機会を設けている。

最後に入門ゼミノートのまとめとして、次の4点を挙げる。

- ①入学後から（特に春学期）スムーズに5クラスが同じ流れになるように運営できる。
- ②個々の教員の講義の内容を縛るものでもない。③テキスト、ノート、配付資料としても使用できる。④大学での学びの基本を一冊に集約できる。

以上の話が参考になるかどうか分からない。実際に入門ゼミノートを活用して、我々仏教学部の入門ゼミが成功しているのかどうかといった“評価”については、まだまだこれからの段階であり、試行錯誤を続けている状況であるが、各クラスの教員からは一定の評価を頂いている。

「歴史学部と私のこころみ」山崎 覚士 先生（歴史学部 准教授）

歴史学部からは学部全体で取り組んでいる事例と、それに加えて私自身の試みを簡単に

はあるが紹介する。まず、歴史学部としては、基本的に共通シラバスの1回目から15回目までの内容を、ある程度は踏襲する形で進めていくこととしている。また、仏教学部とよく似ているのだが、歴史学部では「歴史学部の歩き方」という冊子を作成しており、入門ゼミの第1回目に配付している。履修ガイダンスの時に配付すると他の様々な資料の中に埋没してしまうので、授業で教員が配付する形にした。

内容は、まず歴史学部のディプロマポリシーとカリキュラムポリシーがあり、どのような授業が展開されているかということが書かれている。これは、シラバスの第5回目が「学部学科の学びを知る」とあるので、その授業で使えるような配慮がなされている。

次の頁には図書館ポータルサイトやジャパンナレッジ等を使った図書・雑誌の検索方法が書かれている。また、図書館が今年度より運用している「BIRD」にも対応する予定である。

さらに、レポート作成のための方法を10のステップに分けて載せている。これは、歴史学部の井上浩一先生が実際に授業で使用されているものを転用している。

最後には歴史学部の学生として、1回生の間に読んでおきたい、或いは読んでおいてほしい本等を各教員に伺い、一覧として載せている。1回生の段階では、学生はまだ本というものが何かということを知らない。本を選んでくるように学生に言うと、京都の町案内やガイドブックを選んでくる状態であるから、こちら側からあらかじめ推薦する本の情報を提供するようにしている。

キャリア教育については、歴史学部の入門ゼミのシラバスでは第3回目・4回目に設定されており、将来の目標の設定、4年間の行動計画策定、自己分析といったことを行なっている。また、歴史学部では1回生に加えて2回生～3回生についても、ゼミを通してキャリア教育を行なっており、進路就職課や教職支援センターの協力を得ながら取り組んでいる。

一方で、教育推進課が実施している基礎学力調査では、基礎学力や社会人基礎力、批判的思考力といった能力の客観的な分析ができる他、自身が興味を持っている職業分野等についても把握することができる。さらに、調査結果報告書を活かしたセミナーを開催し、専門講師の話やワークを通じて、将来目標の設定や4年間の行動計画の策定等を行なっている。この基礎学力調査を上手に活用する方法を教育推進課と検討した結果、歴史学部の入門ゼミの授業の1コマの中で開催することとした。当日は、歴史学部全体およそ220人を常照ホールに集めて学籍番号順に座らせ、皆でワイワイしながら実施した。

情報検索に関しては、実際6回目、7回目で情報検索の授業をするということがシラバスに書かれているわけだが、本来はパソコンを使用して演習形式で実施することが望ましいが、全クラスが一斉に実施することは難しく、また、クラスごとに順番に実施することも現実的ではなかったことから、キャリア教育と同じく合同ゼミにして常照ホールに集まり、歴史学部の貝英幸先生による情報検索の講義を行なった。

グループ学習については、既に述べたキャリア教育や情報検索の学習の後に行なう。歴史学部の特質なのか、また最近の学生に共通することなのかかもしれないが、人間関係を上

手に構築できない学生が多いことが問題となっている。歴史学部には、一人で本を読むのが好きで、いわゆる歴史オタクのような子が入ってくることが多い。そのような学生が、最初からグループワークができるかというやはりできない。また、やりなさいと言ってもやろうともしない。途端に授業に来なくなってしまう、挙句の果てにはドロップアウトしてしまうという事例がでてきてしまう。そういう意味では、グループワークをどうするかということが歴史学部の抱える大きな問題である。そもそも、学問自体がグループワークに適していないことがあり、専門性を深めれば深めるほど個人の仕事になってくるので、逆に言えばグループワークから遠ざかってしまうという性質を持っている。文化人類学や民俗学のようにフィールドワークが伴う学問は、グループワークが必要な場面もあるが、歴史学科に関していえば、日本史や世界史は個人の活動によるところが大きい。

しかし、そんな彼らが歴史学を修めて卒業し社会に入ると、今度は社会の中でグループワークをしなければならない。学生達にとって、グループワークの経験が殆どない中で就職活動をしなければならない状況はいささか酷である。そういう意味で、キャリア教育やグループワーク等、社会人としてのスキルを養うための最初のステップとして位置づけられた科目が、この入門ゼミであるのではないかと考える。

ここからは、私自身が試みていることを述べさせていただく。

グループワークは、一般的には4人あるいは5人程度のグループを組ませるが、歴史学部の場合、グループに入ることができない学生が必ずでてくるので、先ずは入門ゼミの1～3回目の段階、特にキャリア教育の回においてペアワークを取り入れるようにしている。具体的には、自分自身のキャリアデザインを考えさせ、「過去にどういったことをしてきたか」、「高校生の時の自分はどうだったか」、「中学生の時の自分はどうだったか」といったことを書かせる授業で、教室のレイアウトを口の字型にして、隣近所の学生と話し合いをさせている。そうすると、次第に2人で1組、或いは3人で1組の小さなグループが形成されるので、その作業を繰り返して行って学生同士のコミュニケーションを促した。その後の授業では、キャンパス案内を行なうのだが、グルーピングの際には、それまでに作られた2人・3人の小さなグループを2つ合わせて、5人・6人の中グループを作るようにした。そのようにして段階的にグループの規模を大きくすることでコミュニケーションの停滞を防止した。キャンパス案内の授業では、単純にキャンパスを練り歩くだけでは、好き勝手に振る舞うことが目に見えているので、オリエンテーリングシートを作成し、紫野キャンパスにまつわるクイズを用意した。例えば、写真を貼って「ここはどこの写真でしょうか」とか「〇号館のウィンナーコーヒーはいくらでしょうか」とか「この法然の絵はどこにあるでしょうか」といった問題を設定し、それをグループに渡して学内を散策させる形を取った。それでも、そのまま放置すると、何もしない学生が必ずでてくるので、リーダーを1人、記録係を1人、リサーチャーを2人といった役割を持たせるようにして、また他のグループと競わせながら実施させると、ある程度必死になって取り組んでくれる。このようなことを大学の授業の中ですることについては議論の余地があるだろうが、こうした共

同作業によって友達関係が構築され、その後の学生生活においてもここで一緒に取り組んだ4人あるいは、5人が単位となって動くようになった。

グループワークにおいて、ある1つのことを複数の人間で取り組んだ場合、熱心な人とそうでない人がでてきてしまい、熱心な人がやる気を失くしてしなうことはよくある。その対策として、グループにおける研究テーマをやや広く設定したうえで、そのテーマに沿った内容の課題（小テーマ）を人数分設定させ、各個人がそれぞれ割り当てられた課題について調査を行なうこととした。そして、各個人が調べてきたことをグループで共有してブラッシュアップし、グループ発表とあわせて個人の調査結果も発表するようにした。

テーマについては、例えばグループで「京都の歴史と文化」という大きなテーマを設定したとすると、それに沿って各個人が「205系統でまわる京都の歴史」や「京都の通り名の歌をモチーフにしたテーマ」といった具体的な小テーマを設定した。気を付けていることは、必ず1人1つはテーマを持たせることである。このようにして、一人一人に役割を持たせることで、グループワークでのサボり防止に一定の効果が見込める。今のところドロップアウトする学生は幸いにもいないが、このやり方が今後も通用するかは分からないので、引き続き検証していきたいと考えている。

その他、歴史学部として取り組んだほうが良いと思うことは、日本語表現力やアカデミックライティングといったスキルを伸ばすことである。きちんとした日本語が書けない学生が多いので、ひとたびレポートを書かせるととんでもないものが提出されてきたりする。そのため、学期末に提出させたレポートに直接赤ペンで添削し、秋学期の授業（入門ゼミ2）の1回目にフィードバックしている。具体的な箇所を指示して注意することで、学生達は改善すべきところが分かる。こうした指導がレポートやレジュメの作成に生きてくるのではないか。

このように歴史学部は、学部としての大きな取組もありながら、実際の運営上は各先生におまかせしている部分もあるので、授業の計画を立て難い面がある。ただ、それが逆に良かったと言える点は、3回目・6回目といった中間期にキャリア教育や情報検索等の合同の講義を入れると、担当教員がシラバスと違うことをやろうとしても、なかなか手を加えられないので、そういう意味では各クラスとも比較的シラバス通りに進めることができているのではないかと考えることもできる。

最後に、歴史学部の初年次教育においてとりわけ目に付く問題は、大学の学び云々よりも、やはり友達を作れるかどうかということが彼らの抱えている重要な問題の1つである。その辺りを、グループワークを上手く使い、自然に友達を作れるようにサポートしてあげると良いのではないか。ただし、グループワークもいきなり直接的に行なうと、それで逆に人間関係が嫌になってしまう学生もいるので、その部分の調整・設計の難しさは、今後も課題として検討していかなければならないだろう。

「入門ゼミに期待されるものと学生の実態」井上 洋平 先生（社会福祉学部 准教授）

私はこの春に社会福祉学部に着任したので、今回は学部全体の取り組みであるとか、枠組みといった話題を提供するのではなく、1年目で色々苦労している所を発表してくれという意味で受け止めているので、そのような内容で進めていきたい。

まず、入門ゼミに期待されるものを簡単に考えてみた場合、次の2つのことが挙げられる。

1つ目は、高校生から大学生になるにあたり、それまでの環境から新しい環境、あるいは生活スタイルに変えるということである。前の環境からの切り替えがうまくできないと、不安やストレスを抱える原因となり、こういった問題に関する研究発表等もされている。

2つ目は、学生一人一人が居場所を見つけていくことである。既にご指摘があったように、入門ゼミは学生における大学生活の中での居場所の一つになるので、多くの学生にそう思ってもらいたい。一方で、入門ゼミで必ず居場所をみつけないといけないという程、肩ひじを張らなくてもどこかで、社会福祉学部の学生なら自然に見つけることができるのではないかという期待もある。

個人的に悩んでいることは、レベルの設定である。入門ゼミは大学の学びのスタート地点になるので、学生が「大学ってこんなもんなんだ」とか「これくらいでなんとかやっていけるもんなんだ」と感じるレベルで授業をしてはいけない。ただ、その一方で、「こんなにも大変なんだ」と感じるレベルは新入生にとっては苦しいだろう。楽しんで何とかなるレベルではなく、かといって負担感を与えるレベルでもない、その中間のいい塩梅を探ろうと考えている。

入門ゼミは、共通シラバスで運用しているが、着任時、授業の計画を立てる際にシラバスを拝見した時、どの学部でも統一して扱えるように抽象化されていたため、これまでの授業で何をされてきたのかが全く見えなかった。このような状況であったので、学部の先生に「入門ゼミでどんなことをしているのか」と聞いて回ったところ、学外授業を実施されている先生が多く、船岡山に行ったり、あぶり餅を食べたり、様々なことをされていた。そのようにして自分で探さないと各クラスの取り組みを把握できないところが、学部としての課題であると思う。

1・2回目の授業は、自己紹介や他己紹介等も交えながら授業をしたが、3回目に初めて受講した学生が言った言葉が印象に残っている。教室は口の字型のレイアウトで、2週間経って学生同士も授業に少しは慣れてきたという雰囲気であった。そんな中、3回目の授業で初めて教室に来た学生が、隣の学生に「毎回こんなんしてるの？最悪」とつぶやいた。この言葉が耳に入り、これは次回からどうにかしないといけないと思い、それ以降は学生同士の関係作りに重点を置いて授業をしたが、どうしても輪に入ることが苦手な学生もいるので、その対策について試行錯誤している。次の週はたまたま船岡山での学外授業だったので、グループではなく個人ベースの活動だったので、先程の学生も参加してくれた。

その後の活動についても、多少グループはありながらも基本的には個人ベースで活動できる授業を展開した。

図書館を活用する授業の時には、グループを作ったうえで、学生それぞれが関心を持っているテーマについて調べるということをさせた。反省点としては、学生には何かしら調べたい、あるいは知りたいと思うような関心事があるはずだ、という前提で授業を進めていたので、テーマ設定の際、学生の反応が鈍かった。仮にテーマが決まったとしても、参考とする文献や資料が、おそらくネットで検索して最初に出てきたものであるとか、誰でも手に入るようなものを引用し、それをそのまま発表するという事態が相次いだ。そんなこともあり、春学期は非常に悩んだ。

社会福祉学部の入門ゼミは、先輩に学ぶというテーマで、専門職として現場で働いておられる方をゲストスピーカーとして招聘し、話を聞く機会が設定されている。その話を聞いて各自設定したいテーマについて、最終的には学生に模造紙を使ってポスター発表をさせている。学生は「利き手」の問題であったり、「ユニークフェイス」のことであったり、「節電」や「ヒューマンエラー」といったテーマで色々調べて深めてくれたのだが、感想としては良い文献や良い情報があるのに上手く出会ってくれていないな、というもどかしい思いがあった。

丁寧に入門ゼミをされている先生の取り組みを配付資料にて紹介させていただいた。具体的には、学生が新聞記事等を読んで、関心のある話題や初めて知ったこと、学んだことがあればその部分にマーカーを引き、自分なりに整理をさせたうえで提出させる。それを担当教員が朱入れして学生に返却し、さらにグループで議論するといったことをされている。この事例もふまえて学んだことは、やはり集団で活動すると、どうしても何もしない学生がでてくるので、一人一人に責任を持たせるような工夫をしなければならない。先程の事例では、個人が提出した課題を集団で共有しつつフィードバックしていた。このような仕掛けが重要だと考える。

その他、春学期の取り組みとして、進路就職課ツアーと研究室紹介がある。授業の試行錯誤をする中で、進路就職課のツアーがあるという事を知り、お願いをすることとした。ただし、一度に担当可能な人数が10名だったので、2つに分けて一方を研究室紹介の授業にして、裏表にした。研究室紹介では、自分の研究室の本を見てもらう等した。そこで自分の興味のあるテーマについて少しでもまともな本に出会ってほしいと思って実施したが、授業の位置付けが曖昧だったのもあり、あまりうまくいかなかった。

次年度以降の検討課題としては、調べ学習において、学生が簡単に手に入る情報だけでまとめてきて報告するということは避けたいと思っている。社会福祉学部の学生としては、既存の福祉の概念というよりは、色々な視点から新しく物事を考える力をつけてほしい。それをどう実行するかで悩んでいるところではある。

それには、春学期の社会福祉学部FDでも話題になったが、やはり青年期に出会ってほしい良本をこちらが提示していくことが大事なのではないかと思っている。ただし、提示す

るだけでは読まないと思うので、提示したうえで一緒に読むなどといった仕掛けが必要であろう。

また、授業をしていて若干感じることは、データやグラフから大事な要素を取り出すことが苦手な学生が多く、データから何かを読み取るという授業になると、途端にモチベーションが下がる学生が少なくない。その辺りのフォローも課題としてあるだろう。

さらに、これは構造的な問題かもしれないが、秋学期、社会福祉学部の1回生は月曜日と火曜日の1講時目に授業がある学生がいるようで、その学生は水曜日にはあからさまに疲れている。睡眠研究では、青年期が一番朝が苦手という研究がある。また、入門ゼミの位置付けは居場所である。水曜日の1限という一番苦しい時間に、居場所になるべき授業があるという状況は、一考すべきではないか。前任の大学であるとか、自分自身が学生の時を振り返ってみると3講時であることが多かったので、調整は難しいと思われるが、検討しても良いのではないか。

もうひとつは、1対20の関係になると、教員が全ての学生をフォローすることは難しいので、何かしらの形で先輩がメンター、あるいはオリターとして入ってもらえると、もう少し学生同士の関係もスムーズに作られるだろうし、教員と学生との橋渡しの役割も担ってもらえるのではないか。

最後に、あまり上手くいかなかった春学期だが、判断材料や工夫するきっかけは得られたと思っているので、次年度以降頑張りたいと思っている。

4. 意見交換

岡崎先生 グループ分けや学習における工夫や悩みとかがあれば、もう少しお聞きしたい。

井上先生 グループ分けについては、この春学期はクジで決めた。構成は、4人1組のグループを5組とした。ただし、先述のとおり学生に任せてしまったので、頑張る学生と頑張らない学生がでてしまった。また、頑張らない学生が頑張ろうとしている学生の足を引っ張ってなかなかうまくいかなかった。秋学期は、その対策として統一の文献を設定し、個人個人が読むという宿題を課して、まとめさせた。少し負担にはなるが、それを次の週には必ずレジュメでフィードバックするようにしている。それもあってか、最近は朝の時間は静かな読書になった。一方で、朝一で大学に来れない学生も2人出てきたので、その辺りのフォローが課題であると感じている。

岡崎先生 山崎先生はどちらかというと、友達を作るというところに重点を置いているのか。

山崎先生 ランダム抽出でグループを作った場合、それこそ引っ込み思案で何も話さない学生と活発な学生が同じグループになると、学生同士の波長が合わないの、大体1人が

ドロップアウトしてしまう。そうならないようにするには、むしろ同じような波長の学生を集める方が良い。課題を誰かに任せるのではなく、共通テーマの中で個別に課題に取り組み、その後に全体で取り組むといったことを同じ毛色の学生同士で行なったので炎上はしなかったのかなと思う。

岡崎先生 やはりグループの編成の仕方に一工夫が必要ということか。

山崎先生 例えば、授業開始時は皆横並びに座っているが、教室のレイアウトをコの字型に変更して座らせている。最初はまだ友達が居ないので、隣に座った学生は基本的に面識のない学生ということになる。その段階でワークをやらせて隣近所で話し合いをさせると、うまくいけばその段階で友達同士になれる学生もいる。友達ができた学生は次回以降ある程度集まって席に座る。それを繰り返すことで自然に何度か話をしたことのある学生同士が集まって座るようになる。人間関係を1対1から、1対2、1対3に徐々に広げていくことで最終的にグループとか集団を作ることができたので、その点ではランダムにしなくて良かったと思う。

岡崎先生 グループワークにおいて学生の主体性を引き出すための方法はあるのか。

伊藤先生 5年程入門ゼミを担当した経験から言うと、同じ手法が翌年にも適応できるとは限らない部分がある。学生の気質は、学年あるいは学部学科によって異なるので、先程発表いただいた内容も良い方法だと思いつつも、自身の授業においてそれが最適かどうかは分からないというのが率直な意見である。例えば、入門ゼミを研究室で実施する等して学生と近い距離で授業をした場合、その学生たちが上回生になっても自分の研究室に気軽に来てくれることがある。予備ゼミや卒論ゼミの学生と相談したり一緒に勉強したりできたことは良い効果であったと思ったが、翌年に同じことを試みたところ全然上手くいかなかった。つまり、その時その時を見極めて、適切な方法を選択できるように、色々な引き出しを持っておかないといけないだろうと考えている。

岡崎先生 他に、本日参加されている先生方からも何か意見があれば伺いたい。

参加者 A 先生 新入生に配付されている日本語表現法というテキストは、非常によくできている。学生にも好評であるし、自分自身も参考になる部分があった。仏教学部で作成している入門ゼミノートや基礎仏教学についても、日本語表現法のテキストとの関わりを意識して作ると良いのではないか。

岡崎先生 日本語表現法は配付している学科としていない学科があるが、4年間通して使える内容にはなっている。もともとは入学前教育で使用していたテキストであった。それを入学後も使用しようということで、ガイダンスや入門ゼミ等で配付するようになった。是非ご活用いただきたい。

岡崎先生 先程ご指摘があった、年度によって学生の気質が異なることにより授業の運営が上手くいかないことについて、どう感じておられるか。

参加者 B 先生 私は入門ゼミを 2 年担当したが、ご指摘のように 1 年目に上手くいったことが、2 年目は通用しなかったことが実感としてある。ただし、山崎先生の発表にもあったように、歴史学部の学問上の特性もあるが、最終的に個人レベルの活動にしていくことよりも、グループでのコミュニケーションを促進させながら個人の活動も行ない、発表をさせることで個人あるいはグループの研究に寄与していくといったやり方が今は求められていると個人的に思う。

岡崎先生 他に 3 名の先生方に対してご質問があれば。

参加者 A 先生 グループ学習をしないという選択肢はあるか。

伊藤先生 色々な引き出しがあつてよいと思う。ある学年ではグループワークのほうが良いと感じたらグループワークを用いる。それが難しそうなら、無理にグループワークをしなくてもよいと思っている。

岡崎先生 福祉の学生はやり易いというか、やれる思考の学生が多いと思う。それでも、課題を感じておられる先生は多いが、井上先生はどのような点を課題として認識されているか。

井上先生 喋る学生は放っておいても喋る。課題としては、喋ったことから次の論点を引き出すことであったり、議論を深めるといったことが苦手であると思う。途中から論点関係なく話を続けるので、「論点を最後に発表してね」とその都度言わないといけないところが社会福祉学部の特徴だと思う。

岡崎先生 議論を意図的に進め、いくつかの結論を導き出す。それは、4 回生でも難しさを感じている。

岡崎先生 良書に出会うということは、初年次の学生にとって非常に大事なことだと思う。学びのスキル以前に本を読むという習慣がなく、そもそも本に出会う機会がない。このことについて、工夫していることや、逆に難しいと感じていることがあれば発表して頂きたい。

参加者 C 先生 歴史学部の入門ゼミは春学期から秋学期にかけてクラスが変わらないので、学生には春学期の最後に「歴史学部の歩き方」にて紹介されている本を、秋学期までに 3 冊読んでくるように言っている。

岡崎先生 それは実際にレポートとして提出させているのか。

参加者 C 先生 本を手にとらせて読むという習慣付けが目的なので、発表は重視していない。

岡崎先生 本と学生との関係はどうですか。

参加者 C 先生 情報を得る手段として、本が機能していないと感じる。

岡崎先生 本という種類が、我々が思っている本とは違っている可能性がある。国語教育

をご専門とされている D 先生はどうお考えですか。

参加者 D 先生 学生が本を読むことの必要性を実感していない。本を読むことの重要性を示す一方で、読まなくてもなんとかなる授業もある。こうしたことが同時期に起こってしまっているので、学生は学ぶことの意義を見いだせないでいる。同時に、人間関係を作ることが入門ゼミにおける 1 つの目的であるが故に、自分自身が担当するクラスでは少し緩い空気になってしまっている。本を読むということも含めて、できなくてもごまかせるという風潮が、学生のモチベーションを低下させているのではないかと。

参加者 C 先生 モチベーションに関して言えば、入門ゼミでは学会のようにメニューのようなものが用意されており、例えば、歴史学部では情報検索、キャリア教育、グループワーク、レジュメの作り方、レポートの書き方といったメニューが用意されている。学生達からすると個別のメニューだけを見せられて、連続性が意識しづらいのではないかと思っている。

岡崎先生 一つ一つこなしているだけという感覚になっていることか。

参加者 C 先生 情報検索のやり方は教えるが、何のために情報検索をするのかといったことが学生に認識されていない。その後のグループワークで必要に迫られる場面があり、そこで初めて情報検索の意義が認識されている。そこが学びの中心になると思う。

山崎先生 貝先生に情報検索の全体講義をして頂いた後、情報処理教室等を利用して学生達にグループのテーマや個人のテーマに関して検索をさせ、図書館に行って本を 1 冊借りてくるということを見せている。そして、グループワークで意見を交換しつつ借りてきた文献と自分自身が調べたことをふまえて発表に向けてレジュメを作成させる等して、今まで学んできたこととリンクさせるようにしている。

参加者 E 先生 果たして入門ゼミで全てを賄うことができるのかという問題もある。本の調べ方であったり検索の仕方を教えているが、入門ゼミの該当する回を受講しなかった学生に対してどう補うのか。現状、色々な授業で課題を出されたときの、調べ方や文章の書き方について相談する窓口がない。全てを入門ゼミで教えるのではなく、むしろいつでも学生が相談に来ることができる場所があり、必要があればそこで補えるという環境を作った方が望ましいのではないかと。

岡崎先生 それはラーニングコモンズのように学習を支援する環境やシステムを構築して、他の授業も含めてアシストできるようにするということか。

参加者 E 先生 社会学部の入門ゼミの場合、支援上回生が自主的にフォローしてくれる場合もあるが、学年共通のラーニングコモンズのようなものがあれば、いつでもフォローアップすることができるのではないかと。

参加者 B 先生 その点については、充実はしていないが学修支援室が自主学習ルーム等の仕組みを作っている。今あるものについてきちんと情報発信することも大事であろう。

岡崎先生 全学的な仕掛けと、学部単位で教諭が対応できるような仕掛けも必要か。

参加者 B 先生 学部単位の場合、教員の負担が懸念されるのでラーニングコモンズのように全学的な取り組みとして充実を図る方が良いのではないか。

参加者 E 先生 教員というよりも 2 回生、3 回生の学生がそこにおいて、ある程度のことを教えられるといった体制が良い。教員というのは学生からみるとハードルが高いように思えるので、先輩に相談できる環境を作ることが良いと考える。

伊藤先生 入門ゼミが水曜日の 1 講目に設定されている件について、以前自分が担当していた入門ゼミのクラスに、いつも気怠そうにして何も話してくれない女性がいたが、その女性が 3 回生になった時には、とても明るく接してくれた。その女性に 1 回生の入門ゼミのときのことを率直に聞くと、「私、朝はだめなんです」と答えてくれた。最初に述べたことと少し矛盾するかもしれないが、社会に出る準備段階として、1 講目の授業にきちんと出席し、時間を守ることは必要であると思うが、無理矢理に 1 講目にする必要はないのではないかと思っている。入門ゼミの性質を考えた場合、時限の変更について検討の余地があるのではないか。

岡崎先生 確かに学生によっては 1 講時から 5 講時まで詰まっている学生もいる。開講科目数を考えるとすぐに実行は難しいかもしれないが、検討すべき一つの課題である。

5. まとめ

発表していただいた 3 名の先生の報告はそれぞれタイプが違う。入門ゼミの運営として兎角教員任せになりそうなところを、「入門ゼミノート」や「歴史学部の歩き方」といった教材を作ることによって個々の教員のやり方や特性を活かしながら共通項を作っていくというやり方は秀逸であった。内容も非常に面白く、教員間で議論を重ねていることがよく分かるものだった。

グループワークについては様々議論があったが、研究が進めば進むほど個人での活動となり、反面、社会に出れば集団での活動が求められる等の問題も提起された。自分自身もグループワークやワークショップといった手法を授業外でも使うことが多いが、これが唯一の方法や手段ということではない。グループワークというのは、様々な人を包み込み、排除せずに何かを創りあげていくことがグループワークの本来の姿である。それを授業のツールとして使用し、点数を付けるとなると、どうしても学生のモチベーションに濃淡が生じてしまう。決して万能というわけではない。ただし、集団で活動する事が、学生同士のコミュニケーションを育んだり、あるいはそこに教員が入ってグループを観ることは、個人を観るきっかけにもなり得ると思っているので、万能とは思っていないが、上手く使っていく必要があると思う。

井上先生から発表いただいた内容では、学び方やスキル以前に、良い本に出会うということが強調されていた点が印象的であった。これは大学における重要な課題であると認識

している。恐らく我々が思っている以上に、学生は本というものを知らないと思うので、本の文化的な側面、知的な側面、憧れといったことをどう伝えていくかを我々は考えなければならぬ。

ただし、全てを入門ゼミに組み込んで担当教員がこなしていくという方向性はやはり無理があるので、入門ゼミだけでなく、それ以外の科目についても検討が必要であるし、学習支援の仕組みとかきっかけ作りも今後の課題である。

そういう意味では、本日頂いた意見も参考にしながら、今後カリキュラム改革を進める中で、入門ゼミをどうしていくのか、それから、基礎学力や日本語教育も含めて新しいカリキュラムの中にどう盛り込んでいくのか、議論していきたいと思っている。

第4回FD研究会「どうする入門ゼミ！？～実施事例報告会～」

平成27年11月11日(水)

仏教学部 伊藤真宏

事例発表① 『入門ゼミノート』の作成経緯と活用

1、先生方の苦勞

- 過去の事例—65歳以上の先生が感じる世代格差
- 1講目の講義に出席しない。or 遅刻
- 先生同士の情報不足
- 講義の形態が異なる

2、その状況をふまえて

- 「入門ゼミノート」作成
- ポイント制
- 合同講義
- 振替講義や見学研修の導入

3、「入門ゼミノート」

- 入学後～特に春学期にスムーズに、5クラスが概ね同じ流れになるように。
- 先生個々の講義の進みを縛るものではない。
- テキストとして用い、直接書き込め、個々の先生の準備する資料を貼付。
- 大学での学びの基本を一冊に集約。

第4回 FD 研究会

「入門ゼミに期待されるものと学生の実態」

2015年11月11日(水)

井上洋平(社会福祉学部)

1. 「入門ゼミに期待されるもの」を考える上で…

(1) 大学1回生の春から夏にかけて

- ・新しい環境での新しい生活スタイルをつくっていく時期
- ・学生一人ひとりが新たな環境での居場所を見つけていく時期

(2) 1回生の春にクラス指定され少人数で実施される授業

- ・英語, 入門ゼミ

2. 入門ゼミ(初年次小集団教育)に期待されるもの

(1) 大学の中での居場所(人間関係における)の一つ

- ・入門ゼミでなければならない理由はない(どこかで見つければいい)

(2) 大学での学びのスタート地点

- ・「こんなもんだ(これくらいいいんだ)」「こんなにもんだ(がんばらないと)」
- ・社会福祉学部としての共通シラバス

3. 着任1年目の取り組みと今後の課題

(1) 春学期の社会福祉入門ゼミで取り組んだこと^{※1}と学生の様子^{※2}

- ・他の先生方の取り組みの聞き取り(共通事項の確認・共有)^{※1}
- ・3回目で初めて出席した学生をつぶやき(「え, 毎回こんなんしてんの? 最悪…」)^{※2}
- ・親睦をかねたお出かけ(船岡山)^{※1※2}と図書館の利用へ
- ・先輩に学ぶ(療育, 介護, 医療の現場で働く先輩の話に触れる: 共通)
- ・学生自身の関心に基づく文献や資料の収集とその整理・発表^{※1※2}
- ・進路就職課ツアーと研究室紹介^{※1※2}
- ・学部FDでの入門ゼミ担当教員の事例紹介
→一人ひとりに責任をもたせる課題の出し方, 集団での共有の仕方, そしてレポートへ
(教員と学生一人ひとりの関係, 学生同士での責任と自覚がもてる関係)
- ・調べた内容のポスター発表^{※1※2}(利き手, ユニークフェイス, 節電, ヒューマンエラー, 等)

(2) 次年度以降の検討課題として頭にあること

- ・「調べ学習」を乗り越えること, well being の発展的な理解(多様な学生の包摂)
- ・良書(青年期に読んで欲しい本)との出会いを意図的に設定すること(特に春学期)
- ・根拠となるデータとの出会い, データの読み取り・読み込み(1回生に限らず)
- ・「入門ゼミ」の位置づけと時間割(水曜日1限)の関係
- ・先輩の存在(上回生によるサポート)

第5回FD研究会

「学生をもっともっと学ばせる授業設計と成績評価

～去年と同じじゃつまらない！ 授業を少しだけリニューアルしてみませんか～」

シリーズ企画①:学生の学びを促すシラバス設計の基本

開催日：2015年12月3日（木） 16:10 ～

会 場：佛教大学紫野キャンパス 1号館3階 1-309教室

発表者：佐藤 浩章（大阪大学教育学習支援センター 准教授）

参加者数：24名

学生をもっともっと学ばせる授業設計と成績評価

～ 去年と同じじゃつまらない！ 授業を少しだけリニューアルしてみませんか～

学生が主体的に学ぶ力を習得するには、体系的なカリキュラムがあり、それを構成する個々の授業において学生の主体的学修を促す必要があります。しかし、その大前提として、シラバスが学生の学修意欲を高める内容であり、その学修の評価が適切なものでなくてはなりません。

今回のFD研究会は、全2回のシリーズ企画とし、第1回は、「学生の学びを促すシラバス設計の基本」をテーマに、第2回では、「厳格な評価の必要性やその方法・ツール」について学びます。

1日のみの参加も可能ですので、多数のご来場お待ちしております。

開催概要

- シリーズ企画① -

テーマ **学生の学びを促すシラバス設計の基本**

日時 平成27年 **12月3日(木)**
16:10～17:40 (15:45より受付)

会場 1-309教室(紫野キャンパス1号館3階)

内容 学生の学修意欲を高め、主体的に授業に参加し、また授業時間外の学修も促すようなシラバスにするにはどのような工夫が必要なのか。目的、到達目標、成績評価基準の設定の方法について学びます。

定員 先着100名

- シリーズ企画② -

テーマ **厳格な評価の必要性やその方法・ツール**

日時 平成27年 **12月7日(月)**
16:10～17:40 (15:45より受付)

会場 1-309教室(紫野キャンパス1号館3階)

内容 評価を変えることで、学生の学習時間や方法を大きく変えることができます。今回のFD研究会では、成績評価の原則、公平性、評価方法について学びます。また、コピー＆ペースト対策や採点作業の効率化に使えるツールも紹介します。

定員 先着100名

講師



佐藤 浩章 先生

大阪大学
教育学習支援センター副センター長
全学教育推進機構・准教授

会場アクセス

<アクセス方法>

阪急四条大宮駅より、地下鉄北大路駅、JR二条駅より市バス乗車。千本北大路もしくは佛教大学前で下車すぐ。

<紫野キャンパスマップ>



※駐車場がございませんので、公共交通機関にてご来場ください。

申込

下記内容を記入のうえ、[fdoffice@bukkyo-u.ac.jp]までメールにてお申込みください。

12月1日(火) 〆

件名:FD研究会申込み

本文:氏名、所属、役職、緊急連絡先(携帯電話等)、
参加者のe-mailアドレス、参加希望の回

※ 申込みメールアドレス宛に事務連絡およびアンケートのご依頼をする場合がございます



佛教大学教育推進機構

〒603-8301京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL:075(491)2141(代表)
mail: fdoffice@bukkyo-u.ac.jp

2015年度 第5回佛教大学FD研究会

1. 開催概要

開催日：2015年12月3日（木） 16：10～17：40

テーマ：「学生をもっともっと学ばせる授業設計と成績評価

～去年と同じじゃつまらない！授業を少しだけリニューアルしてみませんか～」

シリーズ企画①：「学生の学びを促すシラバス設計の基本」

会場：佛教大学紫野キャンパス 1号館3階 1-309 教室

発表者：佐藤 浩章 先生

（大阪大学教育学習支援センター副センター長／全学教育推進機構・准教授）

参加者数：24名

2. 発表（要約）

目的

学生の学習を今よりも促進するために、効果的なシラバスを書けるようになる。

到達目標

1. シラバスの役割を説明することができる。
2. 目的を適切に記述できる。
3. 目標を適切に記述できる。
4. 効果的な学習を促すスケジュールをデザインできる。
5. 評価方法を適切に記述できる。

1. シラバスとは何か

北米圏においては、十何ページにわたって記述がある。日本では概ねA4用紙1枚に収まる程度となっており、シラバスと呼ぶには少し内容不足である。

10年程前に、京都大学とマサチューセッツ工科大学が単位交換協定を結ぼうとして実現しなかった話があったが、シラバスを見てもどのような授業をしているのか分からなかったためだと言われている。グローバル化であるとか単位交換を大学が目指すのであれば、究極的には、北米圏で用いられているようなシラバスを目指して頂きたい。いきなりは無理であるので、まずは基本的な内容を抑えて頂いて、徐々にここに近づけていく。

シラバスの役割

- ① 授業選択ガイドとして
- ② 契約書として
提出期限やルール、やってはいけないことなどが記載されている。教員自身もこれに従って授業をする。
- ③ 学習効果を高める文書として
教材、教科書とまではいかないが、非常に重要な参考書として用いる。毎回の授業で目的、目標を確認してから授業に入っていく。
- ④ 教員と学生の人間関係づくりのツールとして
- ⑤ 授業の雰囲気伝える文書として
シラバスによって授業の雰囲気を伝え、学生には覚悟をして授業に臨んでほしいということをしっかり伝える。シラバスによって 0 回目の授業が既に始まっているイメージ。
- ⑥ 授業全体をデザインする文書として
- ⑦ カリキュラム全体に一貫性をもたせる資料として
最近ではディプロマ・ポリシーとの関連付けが求められており、シラバス内容によっては大学全体の評価を落とすことになり得る。本日のようなテーマの研修は、参加必須として取り扱っている大学が多い。
- ⑧ 教員の教育業績のエビデンスとして
採用の際にシラバスの提出を求められるケースも増えている。

2. シラバスの項目例

大阪大学のシラバスフォーマット(教員入力箇所)

- | | |
|--------------|------------------|
| • 講義題目 | • 教科書・教材 |
| • 開講言語※ | • 参考文献 |
| • 授業の目的 | • 成績評価 |
| • 学習目標※ | • コメント |
| • 履修条件・受講条件 | • 特講記事※ |
| • 授業計画 | |
| • 授業外における学習※ | ※2015年度からの新規追加項目 |

開講言語はSGU（スーパーグローバル大学）の関係上、学習目標と授業外における学習については質保証の観点から追加となった。

3. 授業科目・キーワードの書き方

授業科目名(Name of Course)

- 学部、学科等のディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに沿うように書く
- 一般教育(共通教育)の場合は、多様な学生を想定し、わかりやすいタイトルの工夫を

例 「基礎生化学」→「生活の中の生化学」
「骨学入門」→「ヒトの骨『百物語』」

キーワード(Key Words)

- 学生が授業を概観できるように、授業で扱う主なトピックを抜き出す。
- 授業終了後には、キーワードについて説明できるようになっていることが望ましい。

4. 目的の書き方

目的とは書かずに、「授業概要」「授業概要・目的」と書く大学も多い。目的とは、この授業の存在意義(Course Purpose)と捉えていただきたい。授業の存在意義とは、例えるなら学生から「なぜこれを学ばなければならないのか」という問いに対する教員からの答えそのものである。職業直結型授業(国家試験や、医療系)を持っている先生は比較的説明がしやすい。職業とは直結しない授業(物理、数学)などは難しい。

学習の意味が伝わっていないと学びが定着せず、体系化した知識として伝わらない。断片的な知識としては覚えたことにはなるかもしれない。シラバスには、何のための学びなのかを明確に書くと良い。

- 「～するために」を入れると非常に分かりやすくなる。
- 学生を主語にする(Student-Centered)
×「〇〇について説明する。概説する。」←先生が主語になってしまっている。
○「××するために、〇〇について理解し、△△を的確に判断できるようになる。」
←学生にとってどういう意味があるのかクリアに伝わってくる。
- 総括的な動詞を用いて表現する(抽象度が高い動詞)
修得する、身につける、理解する、創造する、位置づける、価値を認める、知る、認識する、など

5. 目標の書き方

- 目標とは＝授業終了段階で学生に期待される行為 (Course goals, Course objectives, Learning outcomes)
- 学生を主語にする
- 観察可能な行動を示す動詞で表現する
- 授業の目的を具体化する
- 箇条書きで表現する(2単位の授業であれば数個から10数個)
- 領域に分けて記述する(知識／技能／態度)

教育目標の領域 (例)



授業の目標に使用する動詞

【知識領域】

列記(挙)する、述べる、推論する、記述する、説明する、分類する、比較する、対比する、類別する、弁(識)別する、関係づける、予測する、具体的に述べる、結論する、同(特)定する、公式化する、一般化する、指摘する、選択する、仕様する、応用する、適用する、など

(日本医学教育学会 2006)

「説明する」は、学生に説明できるようになってほしいということで、よく使われている。「理解する」は目標には適していないと言われている。前頁に書かれている様々な動詞は全て総称して「理解する」と言うことができるため、生徒間で「理解する」という解釈にズレが生じてくる。よって、具体的な動詞を使う必要がある。大学院生レベルになると応用する等といった難度の高い表現にする必要がある。

【技能領域】

測定する、実施する、模範する、熟練する、工夫する、触れる、行う、調べる、操作する、挿入する、準備する、手術する、視診する、聴診する、触診する、打診する、など

(日本医学教育学会 2006)

【態度領域】

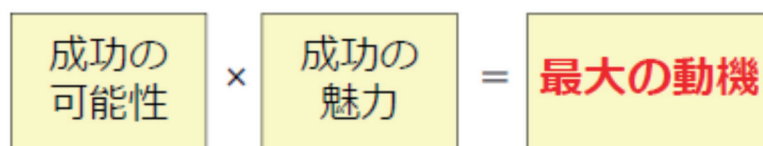
強調する、配慮する、参加する、コミュニケーションする、討議する、尋ねる、示す、見せる、助ける、感じる、行う、相談する、寄与する、反応する、応えるなど

(日本医学教育学会 2006)

関係ないという授業もあるかもしれないが、自身の授業においても学生の知識・技能・態度領域の能力を培うことができるかどうか、ということを考えて頂きたい。

- 1つの文章に1つの目標を書く
 - 複数の目標があると達成度測定が困難。評価し難い。
- 評価される条件を明示する
 - 例：「電卓を使って」「辞書を見ながら」
- 評価される基準を明示する
 - 例：「具体例を3つ以上説明できる」「1分以内で完成させることができる」
- 現実的かつ、チャレンジングなレベルに設定する（ジャンプすれば届く距離）
 - 高すぎると生徒は諦めてしまう。一方で低すぎると、モチベーションがあがらない。オンライン授業ではないので、我々が調整するというのが大事。

達成動機理論



強い動機は、この両者がともに高いときに生まれ、どんなに一方が高くても、他方が低い場合は強い動機は生まれない。

カリキュラムの目標(DP)と対応させる

レベル	目標の記述
全学レベル	学生は、多様な読者に対して、文章によって効果的にコミュニケーションをとることができる。
学部／学科／課程レベル	経営学専攻の学生は、専門家や一般の顧客に対して、一般的なビジネス書籍を使って効果的にコミュニケーションをとることができる。
科目レベル	この財政学の授業終了時には、～という書式のファイナンスレポートが書ける。

イギリスの多くの大学のシラバスは、教員が個人で到達目標を書かない。既に学科を通して記入されている。設定された到達目標を達成するために15回や30回の授業をどう展開するかは教員の責任で書くことになっている。

日本の場合、到達目標を自分で考えないといけないので、バラバラになってしまう。

練習問題

参加者が持参したシラバスの目標を見直して、問題点があれば書き直してみる。シラバスがない場合は、下記の3つの目標の問題点を指摘し、書き直しをしてみる。その後、グループで共有する。

- ① 哲学概論：哲学の基本概念並びに歴史的変換とそれに関わる代表的思想家について講義する。
- ② 情報科学基礎：図書館における情報検索方法について学ぶと同時に、情報リテラシーの基本を理解する

練習問題の解説 ※正解は1つではない

- ① 哲学概論：哲学の基本概念並びに歴史的変換とそれに関わる代表的思想家について講義する

《問題点》

- (1) 主語が教員
- (2) 「基本概念」が曖昧
- (3) 「基本概念」「歴史的変遷」「代表的思想家」というキーワードが並列しており、それぞれの関係が曖昧

《書き直し》

授業で説明した、哲学の13の基本概念のうち、任意の3つについて、その概念の歴史の変遷を代表的思想家を紹介しながら、説明できる。

上記の書き直しのように書くと、学生はテストに出題される項目を想起することが出来、しっかりと授業を聞くようになる。改善前の書き方だと、何も想起させない。目標は「評価」を意識して書くことがポイントである。

② 情報科学基礎：図書館における情報検索方法について学ぶと同時に、情報リテラシーの基本を理解する

《問題点》

- (1) 「学ぶ」「理解する」は目標には使用しない
- (2) 「図書館における情報検索方法」が曖昧
- (3) 「情報リテラシーの基本」が曖昧

《書き直し》

- ・ 自大学の図書館のシステムを使って、論文・レポートの作業にあたって必要な情報を検索し、入手することができる
- ・ 情報リテラシーを構成する3つの能力を具体例を添えて説明することができる。

書き直しに挙げた2点とも、学生が記述式の試験があることを想起させるものとなっている。

目標はそのまま成績評価項目になる。適切な目標を書けば学生の自学自習を促すことになるので、目標欄はシラバスにおいても“きも”になる。

6. 授業概要・スケジュールの書き方

- ・ 授業概要(Course Description)は、授業で扱う内容を大まかに記述する。
- ・ 授業スケジュール(Schedule/Course Plan)は、無理のない進捗でデザインする。
＝詰め込み過ぎない

特に知識提供型・職業直結型の授業は、確認テストにより学生の理解度を確認し、理解度が低かった場合に復習ができるよう予備日を設けておくとよい。

- ・ 複数回テストを設定することで内容をこまめに確認する。
- ・ 予備日を設ける。数回で区切りをつけるユニット制を採用する。
- ・ まとめや振り切りの回を作る。

学習順序を決める際の留意点（学習順序の原理）

① 目標を達成しやすいようにデザインする

目標が達成しやすいデザイン

- ・ 簡単 → 複雑 ・ 既知 → 未知 ・ 結論 → 理由 ・ 個別 → 一般
- ・ 具体的 → 抽象的 ・ 過去 → 現在 → 未来 ・ 全体 → 詳細 → 全体
- ・ 正常 → 異常 ・ 通例 → 異例 ・ 日常 → 非日常 ・ 自然 → 不自然

自分のシラバスにはどのような原理が貫かれているのか。単純に教えることを並べただけでは到達目標達成は困難。理解し難い順序、記憶に残り難い順序、身に付かない順序で教えてしまっている場合があるので、再度確認してほしい。

Ruleg(Rule) / Egrule(Example)



(Pike1989=2008:168)

大学はこれまで Ruleg のやり方を実践してきた。カリキュラムにおいても、まず概論があって、そこから実践・演習と繋がっている。最近では Egrule に移行してきており、最初に事例を教えてそれから原理・原則を教えることがトレンドになっている。

Experience,Awareness,Theory



(Pike1989=2008:168)

Experience (経験)、Awareness (意識)、Theory (理論) の授業をどのような順番で行うか。大学は長らく「TEA」を実践してきたが、これがうまくいっていない。学生は、経験値が非常に少ないので Theory を教えられてもピンとこない。社会人の学生は、Theory の話をした時に「そういうことだったのか」と自身の経験の再構成をしていくので、身に付き易い。経験の少ない学生は「ETA」や「EAT」のほうが上手いきやすい。

前任の愛媛大学の農学部森林学科では、カリキュラムの大改革を行った。当初は「TEA」の形で、2年生にで森林学概論の授業を行なっていたが、やはり知識はあるはずの学生が授業中に次々と脱落していった。カリキュラム改革後は、先ず学生を山に行かせて 2 週間程合宿をさせた。最初は、体験学習に学生達は喜んでしたが、だんだんと飽きてきたり、つまらないと感じるようになった。その後、技官から樹のことやキノコのことなどを説明を受けていくうちに、学生達の振り返りのレポート等から「知識を与えてください」との要望があがってくるようになった。知識がなく、体験ばかりしていても、何も学べないとの内省があり、その後で教員が教室に戻って授業をするという形にした。

これは中身を変えているのではなく、順番を変えるだけで学生のモチベーションが向上させるとともに知識の定着率を高めた事例である。どの順番でやるとモチベーションが上がって記憶に残り易くなるのか、改めて見直して頂きたい。

② 学習動機を高めるようデザインする

授業時間外の学習についても具体的に書く

日本の学生または大学生は、授業時間外学習を世界の中で最もしないとの話を先程したが、その理由の1つには教員の授業時間外の指導の仕方が曖昧という問題もある。

×「教科書を予習しておくこと」

○「教科書(第10章、(p120~145)を読み、リーディングガイドシートを埋めて提出すること(2時間)」

時間数に関しては、実際にゼミの学生に読ませる等して何時間かかったかを計算し出す等しており、非常に細かく指示を出す。

配付資料(産業改革論)のシラバスを見て頂くと、「スケジュールと各回の内容ダイジェスト」として、毎回どんなことをやるのかを映画の予告のような形で示している。これは、予告効果による学習意欲の向上を狙っている。何をやるのかが全く分からずに授業を受けるより、ある程度分かっておく方が、学生は動機付けし易いことである。

動機付けという点では、「初頭効果と週末効果」という用語がある。これは、動機というものは最初と最後が一番高まるということを行っている。授業を行なっていくう

えでは途中必ず中だるみが入ってくるので、途中で映像を視聴させたり、体験学習をさせる等して、授業の中間時期に流れを変えさせるものをいれて、飽きさせないようにしている。

授業時間外学習を促す戦略（ワーク）

どうしたら多くの学生が授業時間外学習をするようになるのか。以下の 20 のティップスのうち、すでに実践しているものには「レ」を付ける。今後、実践してみたいものには「◎」を付ける。

授業時間外学習を促す戦略（外発的動機づけ編）

1. 毎回課題をやってくるものにポイントを与える。
2. 課題を行う旨を書いた契約書にサインをさせる。
3. 課題を成績評価対象とする。
4. 課題とテストやレポートの関連性を強調する。
5. 次回授業で課題要約を学生がする（教員が要約しない）。
 - ポイントを黒板に書かせる。
 - 学生に発表させる（要点、発見、疑問を聞いて回る）。
 - 少グループで話し合わせる。
 - 10分程度で課題の要約を筆記させる。
6. 課題をやってこなかったものは退出させる。
7. eラーニングやループリックを活用しフィードバックを早く返す。

外発的動機づけは、「飴と鞭」。課題をやってきた学生には褒めて、やってこなかった学生には罰がある。これが良い悪いというわけではなく、使えるものは使うという発想で、学生を動かすパワフルなやり方の 1 つである。米国の資料をもとにしているので、日本に馴染みのない手法もある。

授業時間外学習を促す戦略（内発的動機づけ編）

8. すでに気になっている問いに対する答えやヒントになる課題、あるいは自らが興味を持っている課題が与えられた時、学生の課題理解力は高まる。
9. 関連づける。前回や次回の授業との関連性、授業全体との関連性が明確な課題をだす。
10. 課題を個人にとって興味あるものとする。学生の既有知、生活環境に関わる課題とする。
11. 面白いものとする。課題をやってくることで、世界の見方が変わったり、授業の内容が面白く感じられるものを選択する。教員は課題の内容が面白いことを授業中に

話すといふ。

12. 必要なものとする。テストやレポートのためだけでなく、人生のため、就職のため、身近な人間関係のため、教養ある人間になるためには必要であるというメッセージを伝える。

内発的動機づけ編では、時間外学習の課題に対するエネルギーを対面授業以上に高めようということを行っている。「これをやると、面白いよ」、「これをやると、役立つよ」「これは絶対テストに有利だよ」などを一言添えることはとても大事である。素材そのものを選ぶ時にも、授業外学習となると、教員はおらず、誘惑がたくさんあるのでコントロールが効かない、そのような中で課題をさせるのであるから、本来はモチベーションを上げるような課題を教員たちが提供しないといけないと思う。したがって、1番ワクワクするような課題を授業では扱わずに、逆に宿題にするというやり方もある。

学生に読書課題をさせるコツ

13. ヒントを与える。
難関用語は事前に、説明する。重要ポイントを示す。
14. 小テストをする。
時間の授業の冒頭で小テストを毎回課す。
15. リーディング・クエスチョンを与える。
読書をしながら学生が質問に回答していく。事前に教員が質問を用意する。回収することで評価もできる。
16. ディスカッション・クエスチョンの発表を課す。
読書をしながら学生が質問を書き出していく課題を課す。
例：もし～の場合は～なのか？、～の意味が理解できない。
17. 次回の授業の冒頭で要約させる課題を出す。
次回の授業の冒頭で読書課題の要約を課す。読んできていなければ課題を提出できない。
18. シラバスに書いておく。
読書課題の目的（何のためにやるのか）をシラバスに書いておく。（いきなり課さない）テスト対策のコツとあわせて書くと読んでもらえる。
19. 適切な量を設定する。
量が多すぎないか、学生に聞いてみる。「やらない」のではなく、「やれない」のかもしれない。
20. 課題をやってくるのが待ち遠しくなるような雰囲気を教室に作り出す。
理想はこれ！

20 番のような状況になるのが理想。とにかく、課題をやるのが待ち遠しい。そんな課題を我々が出すことはできないのだろうか。

7. 評価に関わる情報の書き方

評価欄には多くの方がレポート 30%、テスト 40%、受講態度 10%というような書き方をされている。それ自体は悪い事ではないが、学生はその情報だけではおそらく動かない。GPA の導入により評価欄への関心度は高まってきており、評価欄を見て曖昧な記述であったり、難易度が高い（ジャンプしても手が届かない）内容であった場合、選択科目だと履修登録しない。

配付資料の「産業教育論シラバス」では、それぞれの評価方法において 10p や 20p と配点が設定されており、到達目標との関連付けもしている（p.7 成績評価方法を参照）。また、確認テストについては当日出題するテストと同じものを事前に配付している。「そんなことしたら皆 100 点とるじゃないですか」という声が挙がってきそうだが、ここまでしても一部の学生は勉強してこない。

知識伝達系の授業の場合は、山勘で勉強してほしいので、このように事前に示すようにしている。そうすると、学生は何度も何度も繰り返し勉強する。結果的に勉強してくれたらよいので、暗記ものは事前に告知したほうがよい。ただし、思考力や判断力を問う場合は、その場で判断してもらうために、一部改編して出題する。

グループワークの評価

グループワークの評価方法については、グループ全員に同じ点数をつける。フリーライダーであるとか、ズルをする学生が少し減ってくる。時々、押し付け合いが起こることもあるが、今の学生はお互いのことを気にするので、周りに迷惑をかけたらいけないなという意識がでてくる。

更にグループワークに積極的に取り組んでもらうために、グループワークの相互評価で 5 ポイント与えている。いわゆる受講態度による評価でもあるが、具体的にどのような行動をとらないといけないかを相互評価シートに記載している。このように目標達成行動にかかわること、集団維持行動にかかわることを具体的に伝えてやらなければならない。これを教員が安易に授業態度としか記載しないので、学生に伝わらない。

次の評価方法の項目では、学生がとある企業の研修を企画するというグループ課題を 5 ポイントで設定している。ここでも評価シートを付けており、評価基準を具体的に記載している。このような表をループリックと呼ばれており、具体的に何が評価されるのかということを示すことで、学生の学習行動を促すことができる。

シャトルカード

シャトルカードコメントの記入（30 ポイント）について、以前はここに出席と書いていた。現在は、出席は評価項目にはいけないという大学が増えてきている。つまり、単位は学習の量に対して与えるものであるため、出席だけして寝ている学生（学習量が 0 の学生）には単位を与えてはいけないという意味である。シャトルカードは、出席の確認と同時に、学んでいるかどうかを確認できる。シャトルカードとは、学生・教員間で何回も往復するという意味でシャトルカードと名付けている。コメントペーパーが 15 枚連なったものとイメージしてほしい。

ボーナスポイント課題

全ての課題をこなすとポイントの合計は 90 ポイントになり、「修」という最高基準の成績が与えられる。それ以上ポイントを稼ぎたい学生は、ボーナスポイント課題にチャレンジできるようにしている。大学には 100 点満点で成績表を提出をしないといけないので、最終的には 100 という数字にしか記録されないが、本人と教員の間では 120 点や 130 点といった点数を取ることできる。特に優秀な学生はさらに上を目指すことが出来、不真面目な学生に対しても救済策になる。このように上と下をサポートする狙いでボーナスポイント課題を設定している。ボーナスポイント課題のレポートについても評価基準がルーブリックによって示されているので、レポートの質も上がり、採点作業も楽になる。

ポイントの管理

ポイント制度の導入当初、授業終わりに学生が毎回列を作って、何ポイントかを聞いてくるようになったので、ポイントチェックシートを作成し、学生本人にポイントの管理をさせることにした。スタンプカードのように利用するので、モチベーションアップの効果が見込める。また、授業の出席や受講態度についても全て自己責任なので自分で管理せよとのメッセージも含まれているので、授業を欠席した学生に怒るといったこともしない。学生も大人なので、そこは任せるようにしている。

産業教育論ポイントチェックシート

自分の学習を自分で管理しましょう。

✓シャトルカード 30p. 満点
欠席は1回につき、4p. 減点

回数	シャトル カード + 1p.	欠席 -4p.	累計
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			
① 合計			p.

✓第1+2部テスト 20p. 満点

② _____ p.

✓第3部テスト 15p. 満点

③ _____ p.

✓新人研修プログラム一式 10p. 満点

④ _____ p.

✓グループワークの相互評価 5p. 満点

⑤ _____ p.

✓全体研修企画・運営 5p. 満点

⑥ _____ p.

✓業務マニュアル 10p. 満点

⑦ _____ p.

✓ボーナスポイント合計

⑧ _____ p.

内訳 _____
内訳 _____
内訳 _____
内訳 _____
内訳 _____

①+②+③+④+⑤+⑥+⑦+⑧
= _____ p.

S : 100-90p.
A : 89-80p. B : 79-70p.
C : 69-60p. X : 59p. 以下

8. 履修条件の書き方

学生のニーズと授業内容とのミスマッチを防ぐため、事前や同時に必要な科目や能力を記載しておくこと。

9. 受講ルールの書き方

- 出席のルールは大学のルールに従って記載する。
 - アメリカの大学は、非常に細かく書かれている。大学そのものが高等学校の校則のようにルールを細かく設けている。
- 受講生の約束事、守れなかった場合の対応を事前に記載する。過去にトラブルがあった場合は、再度同じことが生じないように、この項目に記載しておく。

11. 学習上の助言の書き方

- 各種障害への対応状況
 - 「各種障害のため受講にあたって配慮を求める学生は、まず学生支援センターに申し出ること」といったことを記載しておく方がよい。
- 参考となる情報や施設等、学習の助けになる情報も書いておく。

12. 教材に関する情報の書き方

- 教科書 (Required text) を使用するかどうか。
 - 教科書は買わないといけないものなので、使用する場合は、書名、著者、出版社、出版年、価格に関する正確な情報を記入しておき、絶版等入手困難になっていないかどうかを確認しておくこと。
- 授業中に直接使用しない場合は、どのように使うのかを明示する。明示できない場合は、参考書(Recommended text)扱いとする。
- 教科書を買わせるだけ買って使わないことは、学生からクレームが寄せられることになるので絶対にしない。

13. オフィスアワー・連絡先の書き方

- オフィスアワーについては、具体的な時間を指定し、休み時間を含めた時間帯にすると学生にも喜ばれる。
- 学生がコンタクトを取り易い様、連絡先が記載されているほうがよい。個人情報情報は公開したくないという教員が多いが、大学のメールアドレスは個人情報ではなく、機関情報である。

まとめ

シラバスをしっかりと書くことによって、目の前の学生がもっと学ぶことができるようになるのであれば、どんなことができるか、そういう観点でシラバスを考えてきた。

シラバスの役割は、やはり履修選択のガイド以上のものである必要がある。学生をもっと学ばせるため、シラバスを見直してみるのもいいのではないだろうか。それには、授業の目的・学ぶ意義については、おおいに熱く語って頂きたいが、目標はクールに淡々と書いて頂きたい。授業のスケジュールについても、目標をいかに達成させるか、どの順番でやれば目標に達成できるかが一番重要である。そして、目標がしっかりと書けていれば、それがダイレクトに評価項目に反転してくる。

シラバスは、個人の問題というよりは、大学のフォーマットの問題も大きい。例えば、項目が煩雑であったり、必要なものが抜けていたり、大学によっては経費削減のためにA4の1枚のみとしている場合もある。こののような制約がある中で、どうするのかという問題はあるが、そこを変えるには難しい立場の方もたくさんおられると思うので、そういう場合は、公開用のシラバスと配付用のシラバスを分ける方法がある。

とりあえずは大学のフォーマットに従って書いておく。しかし、実際の授業の冒頭で真のシラバスを配付して、学生に説明すれば良いのではないだろうか。

学生の学びを促す シラバス設計の基本



佐藤 浩章
(大阪大学教育学習支援センター)

内容

1. シラバスとは何か？
2. シラバスの項目例
3. 授業科目名・キーワードの書き方
4. 目的の書き方
5. 目標の書き方
6. 授業概要・スケジュールの書き方
7. 評価に関わる情報の書き方
8. 履修条件の書き方
9. 受講のルールの書き方
10. 学習上の助言の書き方
11. 教材に関わる情報の書き方
12. オフィスアワー・連絡先の書き方

©Hiroaki SATO

目的と到達目標

目的

学生の学習を今よりも促進するために、効果的なシラバスを書けるようになる。

到達目標

1. シラバスの役割を説明することができる。
2. 目的を適切に記述できる。
3. 目標を適切に記述できる。
4. 効果的な学習を促すスケジュールをデザインできる。
5. 評価方法を適切に記述できる。

©Hiroaki SATO

1. シラバスとは何か？



©Hiroaki SATO

1. シラバスとは何か？

(1) 定義

「教師が、コースの初めに学生に配布する授業計画のことです。そこには、各回の授業のテーマや、そのために予習しておくべきことから、課題、評価の方法と基準などを盛り込みます。」

(池田ら2001 : p.59)

©Hiroaki SATO

1. シラバスとは何か？

あなたの知っているシラバスは、
本物のシラバスですか？

参考資料のシラバスをご覧ください。



©Hiroaki SATO

1. シラバスとは何か？

授業概要 (Course Catalog, Bulletin)



年度毎に全学レベルで開講されている授業科目の一覧。科目選択時に使用する。学生は大学書籍部等で購入する。

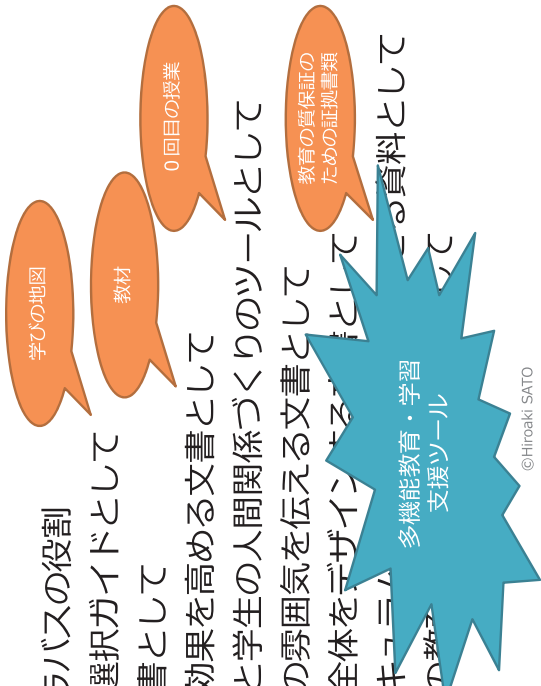
ACCTG 152 Introductory Financial Accounting II (3) Accounting for partnerships, corporations, cash flows, certain liabilities and assets, and the analysis of financial statements.
Effective: Summer 1995
Prerequisite: ACCTG 151

©Hiroaki SATO

1. シラバスとは何か？

(2) シラバスの役割

- ① 授業選択ガイドとして
- ② 契約書として
- ③ 学習効果を高める文書として
- ④ 教員と学生の間関係づくりのツールとして
- ⑤ 授業の雰囲気伝える文書として
- ⑥ 授業全体をデザインするツールとして
- ⑦ カリキュラムの多機能教育・学習支援ツール
- ⑧ 教員の教育支援ツール



©Hiroaki SATO

2. シラバスの項目例

大阪大学のシラバスフォーマット (教員入力箇所)

- ・講義題目
- ・開講言語
- ・授業の目的
- ・学習目標
- ・履修条件・受講条件
- ・授業計画
- ・教科書・教材
- ・参考文献
- ・成績評価
- ・コメント
- ・特記事項
- ・授業外における学習

赤字は2015年度からの新規追加項目

©Hiroaki SATO



©Hiroaki SATO

2. シラバスの項目例

2. シラバスの項目例

米国の大学において推奨されているシラバス項目

General course information:

1. Name of course and course identifying information
2. Term/quarter/semester
3. Location
4. Units/time dedicated per week
5. Prerequisites/corequisites

Instructor information:

1. Instructors' names
2. Office hours and contact information
3. Additional instructor information

Purpose of the course:

1. Course purpose
2. Course goals
3. Course objectives
4. Additional course information

The learning environment:

1. Facilities and teaching methods
2. Required texts
3. Required materials and attire
4. Provided materials
5. Recommended texts

Time schedule/course plan:

1. Schedule/course plan
2. Lecture and/or lab topics
3. Landmark events, assessments, and due dates

How learning will be assessed:

1. Grading procedure
2. Grading scale and method
3. Missed assessments
4. Grade posting
5. Results of a failing grade

Additional student support information

Technical, classroom, and college policy

information:

1. Syllabus amendments
2. Special needs
3. Last course revision date
4. Student conduct and class/college policies

Additional information:

©Hiroaki SATO

3. 授業科目名・キーワードの書き方

©Hiroaki SATO

3. 授業科目名・キーワードの書き方

- 1) 授業科目名 (Name of Course)
 - 学部・学科等のディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに沿うように書く
 - 一般教育 (共通教育) の場合は、多様な学生を想定し、わかりやすいタイトルの工夫を
例 「基礎生化学」 → 「生活の中の生化学」
「骨学入門」 → 「ヒトの骨『百物語』」

©Hiroaki SATO

3. 授業科目名・キーワードの書き方

- 2) キーワード (Key words)
 - 学生が授業を概観できるように、授業で扱う主なトピックを抜きだす。
 - 授業終了後には、そのキーワードについて説明できるようになっていいることが望ましい。

©Hiroaki SATO

4. 目的の書き方

4. 目的の書き方

- 目的とは? = この授業の**存在意義** (Course Purpose)
- 学生からの「なぜこれを学ばなければならないのか?」という問いに対する、教員からの答え。
- 「～するために」を入れるとよい。

©Hiroaki SATO

©Hiroaki SATO

4. 目的の書き方

- 学生を主語にする (Student-Centered)
 - × 「○○について説明する。概説する。」
(I will explain .../ ... will be explained in this course.)
 - 「××するために、○○について理解し、△△を的確に判断できるようにする。」
(This course will help you (to) understand... and assess...)」

©Hiroaki SATO

4. 目的の書き方

- 総括的な動詞を用いて表現する

授業の目的に使用する動詞

修得する 身につける 理解する 創造する
位置づける 価値を認める 知る 認識するなど

(日本医学教育学会2006)

©Hiroaki SATO

5. 目標の書き方

- 目標とは? = 授業終了段階で学生に期待される行為 (Course goals, Course objectives, Learning outcomes)
- 学生を主語にする
- 観察可能な行動を示す動詞で表現する
- 授業の目的を具体化する
- 箇条書きで表現する (2単位の授業であれば数個から10数個)
- 領域に分けて記述する (知識/技能/態度)

©Hiroaki SATO

©Hiroaki SATO

Communicating in the 21st century

After taking this course, you will be able to:

- Explain the difference between communication and communications
- Discuss the strengths and weakness of various communication models
- Explain why communication breaks down and why it succeeds
- ...

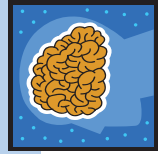
教育目標の領域



5. 目標の書き方

授業の目標に使用する動詞 (知識領域)

列記 (挙) する 述べる 推論する 記述する
 説明する 分類する 比較する 対比する 類別する
 弁 (識) 別する 関係づける 予測する 公
 式的に述べる 結論する 同 (特) 定する 使
 用する 応用する 指摘する 選択する 使
 用する 応用する 適用する など



(日本医学教育学会2006)

©Hiroaki SATO

5. 目標の書き方

授業の目標に使用する動詞 (技能領域)

測定する 実施する 模倣する 熟練する 工夫する
 触れる 行う 調べる 操作する 挿入する
 準備する 手術する 視診する 聴診する
 触診する 打診する など



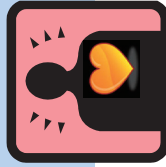
(日本医学教育学会2006)

©Hiroaki SATO

5. 目標の書き方

授業の目標に使用する動詞（態度領域）

協調する 配慮する 参加する コミュニケート
 する 討議する 尋ねる 示す 見せる 助ける
 感じる 行う 相談する 寄与する 反応する
 応える など



(日本医学教育学会2006)

©Hiroaki SATO

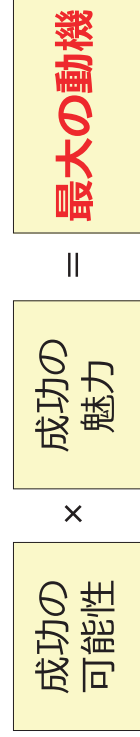
©Hiroaki SATO

5. 目標の書き方

- 一つの文章に一つの目標を書く
複数の目標があると達成度測定が困難
- 評価される条件を明示する
例 「電卓を使って」「辞書を見ながら」
- 評価される基準を明示する
例 「具体例を3つ以上説明できる」「1分以内で完成させることができる」
- 現実的かつ、チャレンジングなレベルに設定する
(ジャンプすれば届く距離)

5. 目標の書き方

達成動機理論



※ 強い動機は、この両者がともに高いときに生まれ、どんなに一方が高くても、他方が低い場合は強い動機は生まれない（アトキンソン）。

(Walvoord2010=2013:20)

©Hiroaki SATO

5. 目標の書き方

■古代ギリシア哲学史

アリストテレスによれば哲学は紀元前6世紀初頭のタレスに始まる。哲学の原型としてのギリシア哲学の展開を、最近の研究動向も考慮しながら講述し、そこで論じられている様々な哲学の基本的問題を検討することによって、その特質を考察する。

■魚類生態学

栽培漁業にとつての群集生態学的視点の重要性を理解できるレベル。即ち、調査対象魚種の生態のみを研究したのでは、栽培漁業学的にはほとんど意味がないことを理解する。

■経済原論

この授業ではお金の儲け方がうまくなくなるとか、あるいは公務員試験に合格するための知識やノウハウが得られるといった、多分に実利的なことは目標にしていませんし、お約束も出来ません。むしろそれよりも、この授業では私たちが今日生活しているこの複雑きわまりない資本主義経済を理解するために必要な、経済学的なものの方や考え方を身につけて頂くことを目標にしています。

目標に関する練習問題

次の3つの目標の問題点を指摘し、書き直しをしてみてください。正解は一つではありません。



©Hiroaki SATO

哲学概論：哲学の基本概念並びに歴史の変遷とそれに関わる代表的思想家について講義する。

★問題点

★書き直し

©Hiroaki SATO

情報科学基礎：図書館における情報検索方法について学ぶと同時に、情報リテラシーの基本を理解する

★問題点

★書き直し

©Hiroaki SATO

コミュニケーション基礎演習：傾聴力のトレーニングを通して、思いやりのある人間になる。

★問題点

★書き直し

©Hiroaki SATO

5. 目標の書き方

行動目標の3類型

- ①**達成目標**…特定の具体的な知識や能力を完全に身につけることが要求されるといった目標
- ②**向上目標**…ある方向へ向かっての向上や深まりが要求されるといった目標
- ③**体験目標**…学習者側における何らかの変容を直接的なねらいとするものではなく、特定の体験の生起自体をねらいとするような目標
(梶田1992)

©Hiroaki SATO

5. 目標の書き方

観点別教育目標分類体系（梶田、1978）

目標類型 目標領域	達成目標	向上目標	体験目標
認知的領域	知識・理解等 (知識・理解)	論理的思考力・ 創造性等(志 向・判断)	発見等
情意的領域	興味・関心等 (興味・関心)	態度・価値観等 (態度)	触れあい・感動 等
精神運動的領域	技能・技術等 (技能・表現)	練達等	技術的達成等

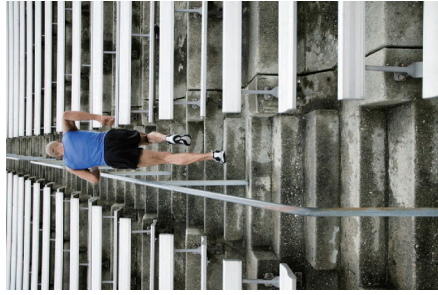
©Hiroaki SATO

5. 目標の書き方

ブルームの教育目標の分類学（梶田、1978）

6.0	評価	価値
5.0	総合	個性化 自然化
4.0	分析	組織化 分節化
3.0	応用	価値づけ 精密化
2.0	理解	反応 巧妙化
1.0	知識	受け入れ 模倣
	認知的領域	情意的領域 精神運動的領域

©Hiroaki SATO



目標はそのまま**成績評価**項目になる。
適切な目標は学生の**自学自習**を促す。

©Hiroaki SATO

目的・目標に関するワーク（6分）

1. シラバスの目的・目標を相手に伝えて下さい。
2. 必要に応じて修正してください。

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方



©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

- 授業概要（Course Description）は、授業で扱う内容を大まかに記述する。
- 授業スケジュール（Schedule/ Course Plan）は、無理のない進度でデザインする＝**詰め込み過ぎない**。
- 複数回テストを設定することで内容をこまめに確認する。
- 予備日を設ける。数回で区切りをつける**ユニット制**を採用する。
- まとめや振り返りの回を作る。

©Hiroaki SATO

スケジュール例

回数	開催日	内容	サブテーマ	授業方法	備考
1回	4月12日	ガイダンス			
2回	4月19日	大学の歴史			
3回	4月26日	戦後の教育① (60年代～75年)			
4回	5月10日	戦後の教育② (75年～80年代)			
5回	5月17日	戦後の教育③ (80年代～)			
6回	5月24日	2人数字編成			
7回	5月31日	2人数字編成			
8回	6月7日	2人数字編成			
9回	6月14日	2人数字編成			
10回	6月21日	2人数字編成			
11回	6月28日	2人数字編成			
12回	7月5日	2人数字編成			
13回	7月12日	2人数字編成			
14回	7月19日	2人数字編成			
15回	7月26日	2人数字編成			

6. 授業概要・スケジュールの書き方

学習順序を決める際の留意点
(学習順序の原理)

- ① 目標を達成しやすいようにデザインする
- ② 学習動機を高めるようデザインする

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

あなたが採用している学習順序の原理は何ですか？

基礎 → 応用

6. 授業概要・スケジュールの書き方

- ① 目標を達成しやすいようにデザインする
 - Bad Design : 理解しにくい、記憶に残りにくい順序、身につかない順序 etc...
 - ☑ Good Design : 理解しやすい、記憶に残りやすい順序、身につけやすい順序 etc...

簡単 → 複雑 既知 → 未知 結論 → 理由
個別 → 一般 具体的 → 抽象的
過去 → 現在 → 未来 全体 → 詳細 → 全体

(内田2005 : 78)

正常 → 異常 通例 → 異例
日常 → 非日常 自然 → 不自然

(杉森・舟島2012 : 137)

©Hiroaki SATO

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

Ruleg / Egrule (Rule, Example)

Ruleg	Egrule
原理・原則 ↓ 事例	事例 ↓ 原理・原則

(Pike1989=2008:168)

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

Experience, Awareness, Theory

ETA	EAT	TEA
実習・体験 ↓ 知識・理論 ↓ 内省・気づき	実習・体験 ↓ 内省・気づき ↓ 知識・理論	知識・理論 ↓ 実習・体験 ↓ 内省・気づき

(Pike1989=2008:168)

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

②学習動機を高めるようにデザインする

- Bad Design : 学習動機が高まらない順序
- Good Design : 学習動機が高まる順序

AIDMA (アイドマ) の法則

Attention
Interest
Desire
Memory
Action

1920年代にアメリカ合衆国の販売・広告の実務書の著者であったサミュエル・ローランド・ホールが著作中で示した、広告宣伝に対する消費者の心理のプロセスを示した略語である。

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

- 計画的な学習を習慣づけるため、**毎回の授業で扱う内容**を具体的に書く(予告効果は動機を高める)。詳細な記述は、教員にとっても次回担当時の負荷が減る。
- **授業時間外の学習**についても具体的に書く。
 - × 「教科書を予習しておくこと」
 - 「教科書(第10章, p.120-145)を読み、リーディングガイドシートを埋めて提出すること(2時間)」
- 授業時間外学習の設定にあたっては、実際にどのくらいの時間がかかるのかを推測し、想定時間数も記載する(知合いの学生にどのくらいかかるのかを聞いてみるのもよい。)
- シラバスを変更する際は、学生に変更の理由を説明する。新たなシラバスを配布する。ただし原則はシラバスどおりに進めることが望ましい。

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

スケジュールに関するワーク（6分）

1. スケジュールを相手に伝えて下さい。
2. 必要に応じて修正して下さい。

©Hiroaki SATO

どうやったら多くの学生が授業時間外学習をするようになるでしょうか？

以下の20のタイプのうち、既に、実践しているものには✓を今後、実践してみたいものには◎をつけてみましょう。

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

(1) 授業時間外学習を促す戦略（外発的動機づけ編）

1. 毎回課題をやってくるものに**ポイント**を与える。
2. 課題を行う旨を書いた**契約書**にサインをさせる。
3. 課題を**成績評価対象**とする。
4. 課題とレポートやレポートの**関連性を強調**する。
5. 次回授業で**課題要約**を学生がする（教員が要約しない）。
 - ・ ポイントを黒板に書かせる。
 - ・ 学生に発表させる（要点、発見、疑問を聞いて回る）。
 - ・ 小グループで話し合わせる。
 - ・ 10分程度で課題の要約を筆記させる。
6. 課題をやった者には**早退**をさせる。
7. **eラーニング**や**ルーブリック**を活用し**フィードバック**を早く返す。

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

(2) 授業時間外学習を促す戦略（内発的動機づけ編）

8. **すでに気になっている問い**に対する答えやヒントになる課題、あるいは自らが興味を持っている課題を与えられた時、学生の課題理解力は高まる。
9. **関連づけ**。前回や今回の授業との関連性、授業全体との関連性が明確な課題を出す。
10. **課題を個人にとって意味あるものとする**。学生の既知、生活環境に関わる課題とする。
11. **面白いものとする**。課題をやってくことで、世界の見方が変わった、授業の内容が面白く感じられるものを選択する。教員は課題の内容が面白いことを授業中に話すことよ。
12. **必要なものとする**。テストやレポートのためだけではなく、人生のため、就職のため、身近な人間関係のため、教養ある人間になるためには必要であるというメッセージを伝える。

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

(3) 学生に読書課題をさせるコツ (Norton,2003)

13. **ヒント**を与える
難解用語は事前に説明する。重要ポイントを示す。
14. **小テスト**をする
次回の授業の冒頭で小テストを毎回課す
15. **リーディング・クエスチョン**を与える
読書をしながら学生が質問に回答していく。事前に教員が質問を用意する。回収することで評価もできる。
16. **ディスカッション・クエスチョン**の発表を課す
読書をしながら学生が質問を書き出していく課題を課す。例：もし～の場合は～なのか？、～の意味が理解できない。

©Hiroaki SATO

6. 授業概要・スケジュールの書き方

(3) 学生に授業外で読書をさせるコツ (Norton,2003)

17. 次回の授業の冒頭で**要約**をさせる課題を出す
次回の授業の冒頭で読書課題の要約を課す。読んできていなければ課題を提出できない。
18. **シラバス**に書いておく
読書課題の目的（何のためにやるのか）をシラバスに書いておく（いきなり課さない）。テスト対策のコツとあわせて書くと読んでもらえる。
19. **適切な量**を設定する
量がすぎないか、学生に聞いてみる。「やらない」のではなく「やれない」のかもしれない。
20. 課題をやってくるのが**待ち遠しくなるような雰囲気**を教室に作り出す
理想はこれ！

©Hiroaki SATO

7. 評価に関わる情報の書き方



7. 評価に関わる情報の書き方

- 評価情報 (Assessment, Grading) は何よりも学生の注目を集める。GPA導入でその根拠を明確にしておく必要がある。高まっている。
- テストやレポートの内容・評価の観点、提出期限、時期を**具体的に**することで、学生の学習を促すことができる（**評価情報が学習を制御する！**）。
- 目標と対応させる。教えていないものは評価対象としない。
- 複数の領域の目標を評価する際は、複数の評価方法を使用する。その際、評価の重みづけをパーセントで示す。
- **出席は評価点にしない**。出席＝学習ではない。学習しているかどうか確認できないものは評価しない。ミニレポート等の提出により学習の質を測定する。
- **受講態度**は具体的に記載する（留学生在に理解できない）。
- 成績評価基準は測定可能なものにする。

©Hiroaki SATO

7. 評価に関わる情報の書き方

到達目標と評価方法の対応例

到達目標		対応する到達目標
評価方法		
① 職場における自己啓発の重要性とその手順を説明できるようになる。	第1部+第2部テスト 15p.	①③
② 職場におけるOJTのコツを説明できるようになる。	第3部テスト 10p.	②
③ 職場における新人研修プログラムが作れるようになる。	新人研修プログラム式 15p.	③
④ 職場で使えるマニュアルが作れるようになる。	グループワークの相互評価 5p.	⑤
⑤ 職場で求められるコミュニケーション能力を現状よりも向上させる。	マニュアル 15p.	④
	チャットカードコメント記入 30p. (1p.×30回)	⑤

評価に関するワーク (6分)

1. 評価を相手に伝えて下さい。
2. 必要に応じて修正してください。

©Hiroaki SATO

8. 履修条件の書き方

- 学生のニーズと授業内容とのミスマッチを防ぐため、事前や同時に履修が必要な科目 (Prerequisites/corequisites) や能力を記載する。
例 「高校で学習する日本史の知識を必要とする」
「英語 I を履修していることが望ましい」
「国際関係論を履修していることが履修要件」

©Hiroaki SATO

- 8. 履修条件の書き方
- 9. 受講のルールの書き方
- 10. 学習上の助言の書き方
- 11. 教材に関する情報の書き方
- 12. オフィスアワー・連絡先の書き方

9. 受講のルールの書き方

- 受講のルール (Student Conduct & Course Policies) には、受講生との約束事、守られなかった場合の対応を事前に記載する。過去にトラブルがあった場合は、再度同じことが生じないように、この項目に記載していく。
- 出席のルールは、大学のルールに従って記載する。
- 資料配布方法、課題提出のルール
- 「資料の予備は保管しない。学生間でコピーすること。」
- 「締切日に課題提出ができない場合は事前に受けつける。」
- 「いかなる理由であれ、課題の遅れは認めない。」
- 受講のマナー
- 「受講中の飲食は禁止する。」
- 学問的不誠実 (カンニング、コピー&ペースト、ダウンロード等) への対応

©Hiroaki SATO

10. 学習上の助言の書き方

- 各種障害への対応状況 (Services for students with special needs)
「各種障害のため受講にあたって配慮を求める学生は、まず学生支援センターに申し出ること。」
- 効果的な学習のための助言 (Student Support Information)
「○○新聞の△△欄は、授業に関係の深い記事が掲載されるので、目を通しておくとういでしょう。」
「市の○○センターには関連する最新情報が掲示されています。」
「○月○日には、シンポジウムが開催されます。参加をしましょう。」
「図書館のスタディ・ヘルプ・デスクでは、本授業に関する質問を受け付けています。気軽に利用して下さい。」

©Hiroaki SATO

11. 教材に関する情報の書き方

- 教科書 (Required text) を使用するかどうか。する場合は、書名、著者、出版社、出版年、価格に関する**正確な情報**を記入する。絶版等入手困難になっていないかどうかを確認する。
- 授業中に直接使用しない場合は、**どのよう**に使うのかを**明示**する。明示できない場合は、参考書 (Recommended text) 扱いとする。
- 学問への誘い、自学自習のガイドという意味があるので丁寧に記述する。

©Hiroaki SATO

12. オフィスアワー・連絡先の書き方

- オフィスアワー (Office Hours) については、具体的な時間の指定をする。
 - × 「いつでも構わない」
 - 「水曜日 12~14時」
- 授業が重なっている学生がいることを配慮して、休み時間を含めた時間帯にするのが望ましい。
- 学生にとって研究室訪問は勇気のいること。研究室への訪問を課題とすることで垣根を低くすることができる。
- 教員個人情報 (Instructor Information) については、電話番号、メールアドレス、研究室の場所等、学生が連絡を取りたい場合に必要なが情報を記載する。これらの情報は個人情報ではなく、機関情報である。

©Hiroaki SATO

目的と到達目標

目的

学生の学習を今よりも促進するために、効果的なシラバスを書けるようになる。

到達目標

1. シラバスの役割を説明することができる。
2. 目的を適切に記述できる。
3. 目標を適切に記述できる。
4. 効果的な学習を促すスケジュールをデザインできる。
5. 評価方法を適切に記述できる。

©Hiroaki SATO

参考文献

- 池田輝政・戸山和久・近田政博・中井俊樹 (2000) 『成長するティップス先生』 (玉川大学出版部)
- 内田実 (2005) 『実践インストラクショナルデザイン』 (電機大出版局)
- 佐藤浩章編 (2010) 『大学教員のための授業デザインと方法』 (玉川大学出版部)
- 杉森みどり・舟島なをみ (2012) 『看護教育』 第5版 (医学書院)
- 榎田徹一 (1992) 『教育評価 第2版』 (有斐閣双書)
- 鈴木克明 (2002) 『教材設計マニュアル』 (北大路書房)
- 徳島大学大学教育委員会 (2002) 『FD推進ハンドブック』
- 日本医学教育学会 (2006) 「第33回医学教育者のためのワークショップ (富士研WS) 配布資料」
- 北海道大学高等教育機能開発総合センター (2000) 「北海道大学FDマニュアル」 『高等教育ジャーナル』 第7号

©Hiroaki SATO

振り返りのワーク (10分間)

1. 今日の最大の学びは何でしたか？
2. 変えなければならぬと思った点はどこですか (ご自身のシラバス、大学のシラバスフオーマット) ？

©Hiroaki SATO

参考文献

- Grunert, Judith (1997) *The Course Syllabus*. Bolton, MA: Anker Publishing Company
- Nikson, B.Linda (2007) *The Graphic Syllabus and the Outcomes Map: Communicating your course*, San Francisco, Jossey-Bass
- Norton, Don (2003) *Getting Students to read before coming to class*, Focus on Faculty, BYU Faculty Center
- Walvoord, E., Barbara (2010) *Assessment Clear and Simple: A Practical Guide for Institutions, Departments, and General Education, Second edition*, John Wiley & Sons, Inc. = 山崎めぐみ・安野舞子・関田一彦訳 (2013) 『大学教育アセスメント入門—学習成果を評価するための実践ガイド—』 ナカニシヤ出版
- Teaching Tips for TAs: When Students Haven't Done the Reading <http://www.oic.id.ucsb.edu/TA/tips/read.html>
- Motivating Students to Read Actively http://web.princeton.edu/sites/mcgraw/Scholar_as_Teacher_Motivating_Student_t_o_Read_Actively
- M level PGCE: Tips on how to encourage students to read, <http://escalate.ac.uk/3175>

©Hiroaki SATO

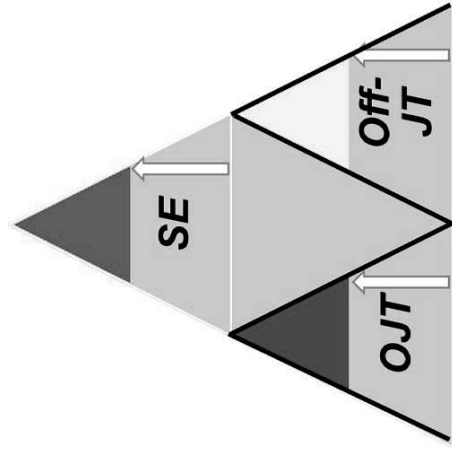
産業教育論

～職場における人材育成入門～

Industrial Education

: Introduction to Workplace Learning

シラバス



(2013年版)

✓産業教育論とは何か？

産業教育とは、学校教育、公共職業訓練機関、職場において実施される、産業・職業に関わる教育のことである。特定の職業において働くために必要な専門的知識・技能・態度のみならず、働くこと一般に関わる幅広い知識・技能・態度を含む教育内容を扱う。産業教育論とはこれらについて探究する学問である。本授業では「職場における人材育成」に焦点を絞り、入門的な内容を学習する。本授業で皆さんと共有したい、探求すべき問い（コース・クエスチョン）は、「職場における人材育成において、どのようにしたら、効果的、効率的で、深い学び（Effective, Efficient and Deep Learning）をもたらし、どのようなことができるのか。その学びを通して、どのようにしたら、個人の自己実現と組織の目的達成を同時に達成することができるのか」というものである。

✓授業の目的

職場における教育担当者として、効果的、効率的に、深い学びを学習者に提供するために必要となる能力を身につける。

✓授業の到達目標

- 目標① 職場における自己啓発の進め方を説明できる。
- 目標② 職場におけるOff-JTの進め方を説明できる。
- 目標③ 職場における新人研修プログラムを作ることができる。
- 目標④ 職場におけるOJTの進め方を説明できる。
- 目標⑤ 職場で使いやすい業務マニュアルを作ることができる。
- 目標⑥ 職場で求められるコミュニケーション能力を現状よりも向上させる。
- 目標⑦ モチベーションに関する特（自）論を説明できる。



✓教育方法

- ・ 皆さんは、松山大学の学生であると同時に、外食産業大手のサトウ・フーズワークス株式会社の人事研修課員として、人材育成に関する知識とスキルを学習します（シミュレーション法）。9月入社の新人研修を担当することを想定し、これから7月まで人事部長の下で必要事項を学びます。
- ・ 最終的に提出しなければならぬものは、9月に開店予定の新店舗における新人研修プログラムと業務マニュアルです（プロジェクト法）。これらの作成にあたって必要な知識は講義を通して伝えただけで、2回のテストで確認をします。
- ・ 各回の研修は、講義法、グループワーク、ゲストスピーカー等、職場内研修で実際に使用されている種々の各種技法を組み合わせて行われます。
- ・ 現在、職場で最も求められているコミュニケーション能力を向上させるために、4～5名でチームを組織し、受講生同士のコミュニケーションを盛り込んだ協同学習の形態をとります。期間中数回チーム替えを行います。
- ・ 自分で選択して提出することができるボーンズ課題にチャレンジすることで、自分の能力をさらに伸ばしたり、欠席等で失ったポイントを回復することもできます。具体的には、レポート、クイズ、ブレゼンなどが用意されています。
- ✓受講が推奨される人
 - ・ 将来、職場で人材育成や能力開発に関わる業務に就きたい人。人材育成業界で働きたい人。
 - ・ 現在もしくは将来、ゼミ・研究室、サークル、スポーツ、アルバイト先・職場において、人に教える立場にあり、より効果的に指導をしたいと考えている人。
 - ・ 就職活動中の人。就職活動をこれから始めようと思っている人。
 - ・ 人に教えることが得意だったり、好きな人。人を教える力をさらに伸ばすことができます。
 - ・ 人に教えることが不得意だったり、面倒に感じている人。人を教える力を伸ばすことができます。

日 時	内 容	手 法	授 業 外 学 習
★ オリエンテーション			
第1回 4/17前	【授業概要説明/事前テスト/アセスブレイク】 授業の概要を学び、学習マップを理解する。授業を通して探 究するコース・エクステンションを理解する。人間関係構築のた めのアセスブレイクの手法を学ぶ。	講義法 グループワーク	
第2回 4/17後	【職場内教育の3類型/事例研究：接客サービスの差】 2つの企業内教育の事例を分析して、様々な職場内教育があ ることを理解する。職場内教育の3類型を学習する。(事例： 東京デザインズ・インターナショナル、JR西日本)	講義法 グループワーク	
★ 第一部 自己啓発			
第3回 4/24前	【自己啓発の進め方①】 自己啓発のステップのうち、理念設定・現実把握・目標設定 までを学習する。ツールを使いながらの作業（ウィッシュユリ スト、自分史バイオリズム、人間関係マップ）を行う。	講義法 個人ワーク グループワーク	自己啓発ブラ ン作成（希望 者のみ）
第4回 4/24後	【自己啓発の進め方②】 SP トランプを使用した自己分析（ニーゼン分析）を行う。	講義法 グループワーク	
第5回 5/1前	【自己啓発の進め方③】 自己啓発のステップのうち、目標設定、戦略立案、実施・評 価までを学習する。先週立てた目標が達成されたかどうかを 振り返る。ツールを使いながらの作業（未来年表）を行う。	講義法 個人ワーク グループワーク	自己啓発ブラ ン作成（希望 者のみ）
第6回 5/1後	【自己啓発の進め方④】 自己啓発のステップのうち、若年キャリア支援の担当者を招へ いし、キャリア形成にあたっての自己啓発の意義について学 習する。	ゲストスピーカー —	ゲストスピー カーへの御礼 作成（希望者 のみ）
第7回 5/8前	【自己啓発の進め方⑤】 希望者による自己啓発プランの発表を行う。また、その評価 の仕方について、実際に評価をしながら学習する。自己啓発 を職場として支援するいくつかの方法を学習する。(事例：4 社の自己啓発支援)。	学生プレゼンテ ーション 講義法 グループワーク	ゲストスピー カーへの御礼 状作成（希望 者のみ）
第8回 5/8後	【自己啓発の進め方⑥】 ゲストスピーカーとして元アスリートを招へいし、アスリー トの自己啓発事例について学習する。	ゲストスピーカー —	
★ 第二部 Off-JT (Off- the Job Training)			
第9回 5/15前	【Off-JTの進め方①】 若者を対象にした新入社員研修プログラムの事例を見なが ら、効果的なプログラム立案方法を考える。新しいグルーブ に分かれて作業を開始する。(事例：餃子の王将)	講義法 グループワーク	テスト予習
第10回 5/15後	【Off-JTの進め方②】 実際に行われている Off-JT プログラムを体験する。最も一 般的なコミュニケーション研修を受講する。	教育ゲーム法	
第11回 5/22前	【Off-JTの進め方③】 Off-JT のステップのうち、理念設定・現実把握・目標設定 までを講義によって学習する。	講義法 グループワーク	プログラム作 成
第12回 5/22後	【Off-JTの進め方④】 実際に行われている Off-JT プログラムを体験する。チーム ワークと議論における合意形成をトレーニングする。プロ ラムを受講する。	教育ゲーム法	テスト予習

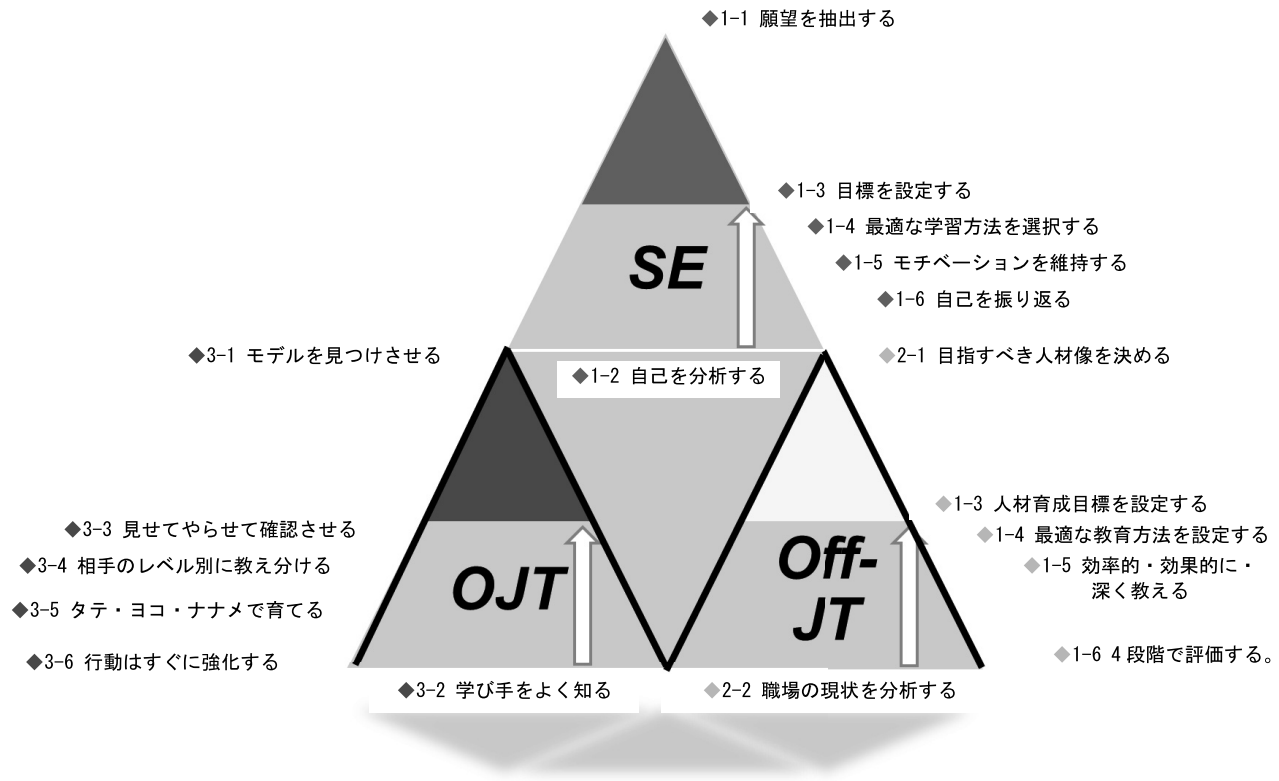
(3)

第13回 5/29前	【Off-JTの進め方⑤】 Off-JT のステップのうち、計画立案・実施までを学習する。 グループワークを通して、プログラムを実際に行わせる。	講義法 グループワーク	プログラム 式提出
第14回 5/29後	【Off-JTの進め方⑥】 グループワークを通して、プログラムを完成させる。	グループワーク	テスト予習
第15回 6/5前	【Off-JTの進め方⑦】 前半は、グループ毎にプログラムをポスターセッション形式 で発表する。いくつかの事例について全体で詳細な分析を行 う。Off-JT のステップのうち評価について学習する。後半 は、研修講師をつとめるにあたって、必要なプレゼンテー ションの基本的スキルについて学習する。	ポスターセッシ ョン 講義法 グループワーク	テスト予習
第16回 6/5後	【Off-JTの進め方⑧】 外食産業のトップクラスのサービスの誇る企業の職場内教 育について、映像を通して学ぶ。	映像視聴	
★ 中間の振り返り			全体研修企画
第17回 6/12前	【第1・2部確認テスト/中間の振り返り】 第1・2部で学習した内容に関するテストを受け、記憶に定 着させる。テストの内容は、第9回目に配布される。ノ前半 部分の授業を振り返り、良い点と改善点を記述する。	テスト	
第18回 6/12後	【受講生が企画する全体研修企画①】 第1部・2部で学習した内容を踏まえて、グループ毎に全体 研修を企画する。後半でプレゼンを行う企画を選ぶ。	グループワーク	
第19回 6/19前	【受講生が企画する全体研修企画②】 第1部・2部で学習した内容を踏まえて、受講生が企画する 全体研修を行う。また、その評価の仕方について、実際に評 価をしながら学習する。	体験学習法	全体研修評価
第20回 6/19後	【受講生が企画する全体研修企画③】 第1部・2部で学習した内容を踏まえて、受講生が企画する 全体研修を行う。また、その評価の仕方について、実際に評 価をしながら学習する。	体験学習法	
★ 第三部 OJT (On the Job Training)			
第21回 6/26前	【OJTの進め方①】 OJT のステップのうち、理念設定・現実把握・目標設定まで を学習する。困った新入社員を事例にどのように後輩指導を してあげればよいかを考える。(教育事例：サトウ・フーズ ワークス本部)	講義法 グループワーク	テスト予習
第22回 6/26後	【OJTの進め方②】 OJT のステップのうち、理念設定・現実把握・目標設定まで を学習する。困った新入社員を事例にどのように後輩指導を してあげればよいかを考える。(教育事例：サトウ・フーズ ワークス本部、トヨタ社)	講義法 グループワーク	
第23回 7/3前	【OJTの進め方③】 OJT のステップのうち、戦略立案・実施・評価までを学習す る。行動科学に基づいた指導方法を学習する。	講義法 グループワーク	テスト予習
第24回 7/3後	【OJTの進め方④】 後輩・部下のやる気を高めるために、経営学や心理学で扱わ れる動機づけ（モチベーション）理論を学習する。	講義法 グループワーク	

(4)

第25回 7/10前	【0JTの進め方⑤】 0JTの実施場で有効なコーチングの基礎的知識を学ぶ。スキルを身につけるために、グループワーク（フィッシュボーン）を行い、技術を定着させる。	講義法 グループワーク フィッシュボーン	テスト予習
第26回 7/10後	【0JTの進め方⑥】 再度グループワーク（フィッシュボーン）を行い、コーチングの技術を定着させる。0JTの実施場で有効な叱り方のコツを学ぶ。スキルを身につけるために、ロールプレイを行い、技術を定着させる。	講義法 グループワーク フィッシュボーン ロールプレイ	
第27回 7/17前	【第3部確認テスト】 第3部の内容に関するテストを受け、記憶に定着させる。テストの内容は、第21回目に配布される。（事例：サトウ・フーズワークス本部）	テスト	マニュアル作成の練習
第28回 7/17後	【0JTの進め方⑦】 0JTを進める際に便利なチェックリストとマニュアルの作成手順について学習し、実際に作成してみる。	講義法 グループワーク	
★ まとめと最終の振り返り			
第29回 7/24前	【授業のまとめと最終の振り返り/授業評価アンケート】 これまでの授業全体を要約し、振り返り、記憶に定着させる。本授業の評価を行う。	講義法 グループワーク	
第30回 7/24後	【業務マニュアル作成】 第28回目で学習した業務マニュアル作成法を使って、実際にマニュアルを完成させる。	個人ワーク	

産業教育論 学習マップ



(6)

✓成績評価方法

以下の6つの項目での評点合計が60ポイント以上の学生を評価対象とします（下記項目で満点を得ると、95ポイントを獲得できます）。

1. 第1部+第2部確認テスト 20p. (個人課題) (授業の到達目標①、②に対応)

2. 第3部確認テスト 15p. (個人課題) (授業の到達目標④に対応)

各部で扱った内容の中から、重要なキーワードの説明、応用問題が出題されます。9回目、21回目においてテストが配布されるので内容を事前に予習すること。

3. 新人研修プログラム一式 10p. (グループ課題) (授業の到達目標③に対応)

第2部の授業を通して、グループ毎に、新人研修プログラムに関する資料一式(実施要領、研修スケジュール)を提出して下さい。新人研修プログラムは、グループ課題であり、同グループメンバーには同評価がつけられます。

4. グループワークの相互評価 5p. (個人課題) (授業の到達目標⑥に対応)

第2部、3部のグループワークに積極的に取り組んだかどうかを最終日に受講生同士で評価します。相互に評価する際の指標は下記である。

グループワークの相互評価シート (5ポイント満点)

項目		被評価者氏名			
目標達成行動	真剣	1. 課題(やるべきこと)に真剣に取り組んでいた			
	的確	2. 課題(やるべきこと)をしっかり理解していた			
	主張	3. 自分の意見を積極的に主張していた			
	役割	4. 与えられた役割をしっかり果たそうとしていた			
	本題	5. 話題がそれたとき本題に戻そうとしていた			
	納得	6. 妥協ではない納得した結論を出そうと努力していた			
集団維持行動	傾聴	7. 相手の意見をしっかり聴き、理解しようとしていた			
	仲間	8. グループにとけこもうとしていた			
	笑顔	9. つまらなそうな表情ではなく、笑顔で皆と接していた			
	援助	10. 消極的なメンバーに声をかけていた			
	同意	11. 優れた意見に共感・同意・賛成を表明していた			
	鼓舞	12. 話し合いが楽しくなるように場を盛り上げていた			

(7)

5. マニュアル 10p. (個人課題) (授業の到達目標⑤に対応)
 第 28 回目で学習する業務マニュアルの作成方法に従って、第 30 回目に作成します。

6. 研修企画・運営「サトウ・フーズワークス人事課全体研修」評価シート 5p. (グループ課題) (授業の到達目標③⑥に対応)
 第 19 回、20 回に開催されるサトウ・フーズワークス人事課全体研修 (40 分) の企画・運営を行う。目的は課員同士のコミュニケーションを高めることにある。評価シートの基準で評価される。

「サトウ・フーズワークス人事課全体研修」評価シート

	素晴らしい! (2ポイント)	もう少し! (1ポイント)	残念 (0ポイント)
①目的との対応	企画は目的に合致したものであった	企画は目的に一部合致していたが、合致していないものもあった	企画は目的に合致していなかった
②内 容	企画はよく考えられ、準備されたものであった	企画は部分的に詰めが甘く、準備不足だと思わせる部分があった	企画はほとんど考えられたものではなく、準備不足が明らかであった
③満足度	学習者はほぼ全員満足した	学習者の約 7 割程度が満足した	学習者の約半数程度しか満足していなかった
④目標達成度	学習者はほぼ全員目標を達成した	学習者の約 7 割程度が目標を達成できた	学習者の約半数程度しか目標を達成できなかった
⑤行動変容度	学習者の多くは授業終了後に行動が変容しているように観察できた。	学習者の一部は授業終了後に行動が変容しているように観察できた	学習者は授業終了後に行動が変容しているようには観察できなかった

7. シャトルカードコメント記入 30p. (1p. × 30 回) (個人課題)
 毎回授業終了後に学びの振り返りを行う時間をとります。振り返った内容をシャトルカードに記入して提出してもらいます。

- ・ 評定合計を右記基準で判断する。(S:90-100p. A:80-89p. B:70-79p. C:60-69p. X:59p.以下)
- ・ 適宜ボーナスポイント課題が提示されるので、欠席した場合や、もっと能力を高めたい場合は活用すること (クラブ活動、就職活動、体調等が理由で、欠席が予想される場合は特に推奨する)。

✓受講のルール

- ・ 授業中に、携帯電話・メールは使用しないで下さい。マナーモードにして下さい。卓上にも置かず、バッグ等に閉まって下さい。理由は、学習に集中してもらうためです。授業中の課題を遂行するために必要な場合、各種障害の補助のために使用を希望する場合は申し出て下さい。
- ・ バッグ等は膝の上に抱えず、床に置かず、机や椅子にかけて下さい。
- ・ 許可された場合以外に、授業中の食事はしないで下さい。飲料は飲んでも構いません。
- ・ 欠席者分の配布資料は保管しません。欠席時は、クラスメートにコピーさせてもらってください。

ボーナスポイント課題一覧

下記ボーナスポイント課題のうちAからDは2つまで選択できます。ただしEとFはこれには含まれません。

BP 課題A.【レポート】「自己分析：自分の強みと弱み」(10ポイント満点) (授業の到達目標①に対応)
自己啓発において、自己分析は重要なステップである。授業で置ったツール(もしくはそれに類するもの)を1つを使って、①自己分析を行い、その結果として、②自分の強みと弱みをまとめなさい。その際、それらを裏付ける具体的なエピソードを必ず添えること。また③強みを伸ばし、弱みを補強するためにはどのような自己啓発が今後必要となるかについても記述すること。(1,600字程度、メールで提出すること。締切り：6月19日23時59分)

BP 課題B.【レポート】「組織内教育の提案」(10ポイント満点) (目標②に対応)

あなたが所属している組織(バイト先、サークル、ゼミ等)において、①どのような問題点があり、②その問題点を解決するために、どのような研修(Off-JT)を行ったらよいか(目標、手法、評価方法)について提案しなさい。(1,600字程度、メールで提出すること。締切り：6月19日23時59分)

BP 課題C.【レポート】「職場内教育の優良事例分析」(15ポイント満点) (目標②に対応)

国内外の職場内教育の優良事例の中から、1事例を選択し、どのような特徴があるのか紹介しなさい。参考文献を3点以上必ず引用すること(そのうち1点以上は書籍を使用すること。インターネットのみの情報は認めない)。事例は、トヨタ、リクルート、東京ディズニーリゾート、マクドナルド、リッツカールトンから選択すること。それ以外の事例の場合は事前に相談すること。(1,600字程度、メールで提出すること。締切り：6月19日23時59分)

BP 課題D.【レポート】「ゲストスピーカーカーへの御礼状」(5ポイント満点) (目標①⑥に対応)

第6,8回目でご招へいするゲストスピーカーへの御礼状を作成します。(400字程度、メールで提出すること。締め切り：それぞれゲストスピーカーによる講演が終了した日から数えて3日後の23時59分)

BP 課題E.【プレゼンテーション】「自己啓発プラン」(3-9ポイント満点) (目標⑤)

3分以内であなたの自己啓発プランをプレゼンしなさい。パワーポイント等は使わずに、口頭のみで発表すること。内容には、下記の4点を含めること。審査員(人事部長、人事課員)が支援割合を決定する。その割合に応じて、ポイントが加算される。(エントリー締切り：第6回目)

①願望(ウィッシュ) (例:将来、企業して自分の会社を持ちたい)

②目標 (例:2018年までに米国の大学院でMBAを取得する)

③支援してほしい事柄 (例:留学費用の100万円)

④自己支援の成果がいかにわが社に還元されるのか (例:MBA取得で培った知識と技術により、将来独立する能力を身につけると同時に、わが社の経営を全面的に効果的に見直すための能力が身につく)

ポイント数 (0%支援…3ポイント、50%支援…6ポイント、100%支援…9ポイント)

BP 課題F.【プレゼンテーション】「分プレゼン」(2ポイント満点) (目標⑤)

1分間以上でプレゼンテーションを行う。内容は、自分の好きなもの・こと、職場・サークル、自分自身何でも構わない。2回までチャレンジできる。(17回目以降随時、29回目の授業まで。実施の前週のリフレクションシートでエントリーする。)

BP 課題G.【グループワークリーダー】(4ポイント満点) (目標⑥)

第2,3部のグループワークリーダーをつとめることで、ポイントがつく。ただし最終日のグループワークの振り返り時に、メンバーから不満が出た場合、そのポイント数が減点される可能性がある。(エントリー締め切り：第8回目)

(10)

- ✓欠席のルール
- ・ 授業を欠席すると4ポイント減点です(公文であったも減点になります)。
- ・ 公文は右記の理由のみです。①急引き(2親等以内) ②教育実習等 ③健康文化科目等の授業等 ④就職試験 ⑤自治会活動 ⑥感染症 ⑦自然災害等
- ・ 公文以外の理由で11回以上の欠席の場合は単位を出せません。いかなる理由であれ16回以上の欠席の場合は単位を出せません。
- ・ ベア・グループワークに参加しない者(睡眠、討論をしない等)は欠席とみなします。対面でのコミュニケーション能力の向上を到達目標としているからです。
- ・ 授業開始直後に名前を読み上げて、出席確認をします。その場にいなければ欠席扱いとなり、減点となります。本授業において「遅刻」は存在しません。
- ・ 公文で、テストが受講できないことが事前にわかっている場合は連絡すること。代替措置があります。

✓教科書と学習道具

購入する必要はないが、シラバスを毎回持参すること。また、毎回、授業開始時に資料を配布するので、A4サイズのバインダー等、資料を整理するための文具を用意することよ。また板書することがあるため、ノートカールズリーフを用意しておくこと。三色ボールペンや蛍光マーカーがあると効果的にノートを整理することができる。

✓参考書

『きほんからわかるモチベーション理論』池田光編/イースト・プレス/1,333円
理論をわかりやすく説明した良書。実践家によって書かれたため、平易な記述であるが、基本となる11のモチベーション理論はよく出てくるものであり、これが頭に入っていれば実践家としては十分。

『社内インストラクター入門』日本能率協会マネジメーター/2,000円

社内インストラクターを目指すものであれば手元に置いておくべき良書。役割、心構えから、話し方、レッスンプランの作成、評価までひととおり必要なものが無駄なく書かれている。

『働くひなのモチベーション論』金井壽宏/NTT出版/1,800円

経営者によって書かれたモチベーション論。いつでも自分の「意欲」をコントロールできるようになるための、モチベーションに関する「持論」を持つことを目標に書かれた本。

『企業内人材育成入門』中原淳編/ダイヤモンド社/2,800円

人材育成に関わる場合に知っておくべき、最先端の学術的理論について学べる。自らの実践を整理したい、授業で学習した内容をより根拠をもって学びたい場合にも有効。研究者によって書かれており、ノウハウ本ではないので、読むのは大変かもしれないが、チャレンジする価値はある。

✓授業担当者自己紹介

- ・ 担当学生 佐藤 浩章 (Hiroaki SATO)
札幌市生まれ。北海道教育学部卒業、北海道大学院教育学部修士課程修了、同博士課程単位取得退学。教育学修士。現在、愛媛大学教育・学生支援機構准教授、教育企画室副室長。オレゴン州立ポートランド大学客員研究員、名古屋大学客員准教授、北海道大学客員准教授、大学評価・学位授与機構客員研究員、国立教育政策研究所調査協力者、キングス・カレッジ・ロンドン客員研究フェローを歴任。2005年度より松山大学で産業教育論を担当。詳細は「佐藤浩章」でGoogle検索。
- ・ 研究領域
- ・ 教育学 (高等教育開発、職業教育学)
- ・ 好きなもの・こと
- ・ 尺八演奏 (愛媛大邦楽部顧問をやっています) /美味しい料理とお酒 (お酒に合う料理を作ります)

✓コンタクト方法

- ・ オフィスアワーは水曜日のお昼休みです。基本的には教室にいます。質問・相談を受け付けます。毎回のチャットカードを活用して下さい。
- ・ 各種連絡はメールで。メールアドレス: sato.hiroaki.mk@ehime-u.ac.jp

✓メッセージ

産業教育論へようこそ!
この授業は、「人を育てる人」を育てる授業です。楽しく学びながらも、力がしっかりとつく授業を目指していただきます。今までの授業観が変わるような授業にしたいと思えます。最後までリタイアせず継続してください。達成感と成長感を持って授業を終えることを約束します。

(9)

B P課題A レポート「自己分析：自分の強みと弱み」評価シート（10ポイント満点）

自己啓発において、自己分析は重要なステップである。授業で習ったツール（もしくはそれに類するもの）のうちから1つを使って、①自己分析を行い、その結果として、②自分の強みと弱みをまとめなさい。その際、それらを裏付ける具体的なエピソードを必ず添えること。また③強みを伸ばし、弱みを補強するためにはどのような自己啓発が今後必要となるかについても記述すること。（1,600字程度、メールで提出すること。締切り：6月19日23時59分）

	素晴らしい！（2ポイント）	もう少し！（1ポイント）	残念（0ポイント）
①現状分析	自らの強みと弱みについて、授業で紹介したツールもしくはそれに類するものを使った分析がなされている。	自らの強みと弱みについて、個人の主観による分析がなされている。	求められている内容が理解できていない。
②証拠のある記述	強みと弱みを裏付ける複数のエピソードは、過去の出来事、他者からのコメント、データに基づいており説得力がある。	強みと弱みを裏付けるエピソードは、主観的なものが多く、客観性にやや欠ける。	具体的なエピソードが記述されていない。
③目標の明示	今後必要となる自己啓発について、具体的に、測定可能な目標が設定されている。	今後必要となる自己啓発について、曖昧な目標が設定されている。	今後必要となる自己啓発について、目標が設定されていない。
④手法の選択	今後必要となる自己啓発について、具体的に、適切な手法が記載されている。	今後必要となる自己啓発について、手法が記載されているが、具体的にないか、適切でない。	今後必要となる自己啓発について、手法が記載されていない。
⑤文章構成（×1/2）	文章は論理的な順序で記述され、読者は内容を容易に理解することができる。	文章は論理的な順序で記述されていないところがあり、内容を理解するのは不可能ではないにせよ、読みにくい。	論理的な順序で組み立てられた文章ではないので、読者はその内容を理解できない。
⑥日本語（×1/2）	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りがない。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは5個以内である。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは5個以上ある。

あなたの取得ポイント数（_____）

11

B P課題B レポート「組織内研修の提案」評価シート（10ポイント満点）

あなたが所属している組織（バイト先、サークル、ゼミ等）において、①どのような問題点があり、②その問題点を解決するために、どのような研修（Off-JT）を行ったらよいか（目標、手法、評価方法）について提案しなさい。（1,600字程度、メールで提出すること。締切り：6月19日23時59分）

	素晴らしい！（2ポイント）	もう少し！（1ポイント）	残念（0ポイント）
①証拠のある記述	組織の現状分析は、よく観察された客観的なデータ・記述に基づいている。	組織の現状分析は、主観的で感情的なエピソードに基づいている。	組織の現状分析は証拠に基づいていない。
②目標の明示	問題解決をするための組織内研修について、具体的に、測定可能な目標が設定されている。	問題解決をするための組織内研修について、目標が設定されているが、曖昧である。	問題解決をするための組織内研修について、目標が設定されていない。
③手法の選択	問題解決をするための組織内研修について、具体的に、適切な手法が記載されている。	問題解決をするための組織内研修について、手法が記載されているが、具体的にないか、適切でない。	問題解決をするための組織内研修について、手法が記載されていない。
④評価法の選択	目標が達成されたかどうかを測定するための適切な評価方法が記載されている。	目標が達成されたかどうかを測定するための評価方法は記載されているものの、適切な評価方法ではない。	目標が達成されたかどうかを測定するための評価方法が記載されていない。
⑤文章構成（×1/2）	文章は論理的な順序で記述され、読者は内容を容易に理解することができる。	文章は論理的な順序で記述されていないところがあり、内容を理解するのは不可能ではないにせよ、読みにくい。	論理的な順序で組み立てられた文章ではないので、読者はその内容を理解できない。
⑥日本語（×1/2）	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りがない。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは5個以内である。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは5個以上ある。

あなたの取得ポイント数（_____）

12

B P 課題 C レポート「職場内教育の優良事例分析」評価シート (15 ポイント満点)

国内外の職場内教育の優良事例の中から、1 事例を選択し、どのような特徴があるのか紹介しなさい。参考文献を 3 点以上必ず引用すること（そのうち 1 点以上は書籍を使うこと。インターネットのみの情報は認めない）。その特徴に対するあなたの評価もあわせて書きなさい。事例は、トヨタ、リクルート、東京ディズニーリゾート、マクドナルド、リッツカールトンから選択すること。それ以外の事例の場合は事前に相談すること。(1,600 字程度、メールで提出すること。締切り：6 月 19 日 23 時 59 分)

	素晴らしい！ (3 ポイント)	もう少し！ (2 ポイント)	残念 (0 ポイント)
①参考文献	関連する 3 点以上の参考文献を適切に引用している。	関連する 1 点以上の参考文献を適切に引用している。	参考文献を引用していない。
②要 約	職場内教育事例の特徴が明確に要約されている。	職場内教育事例の特徴が記述されているが、うまく要約されていない。	当該職場内教育の特徴の記述は、要点を欠いている。
③意 見	職場内教育事例の特徴に対して、良い点を的確に指摘していると同時に、批判的に事例を分析することもできている。	職場内教育事例の特徴に対して、良い点を的確に指摘しているが、批判的に事例を分析することができていない。	職場内教育事例の特徴に対して、自分なりの分析をし、意見を述べることができず、集めた情報をまとめただけである。
④文章構成/ 文のつながり	文章は論理的な順序で記述され、読者は内容を容易に理解することができる。文献から集めた情報を、完璧に円滑につなぐことができている。	文章は論理的な順序で記述されていないところがあり、内容を理解するのは不可能ではないにせよ、読みにくい。文献から集めた情報を円滑につないでいるが、一部うまくつながっていない箇所がある。	論理的な順序で組み立てられた文章ではないので、その内容を理解するのに苦勞する。文献から集めた情報を羅列しているだけであり、それぞれがつながっていない。
⑤日本語	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りがない。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは 5 個以内である。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは 5 個以上ある。

あなたの取得ポイント数 (_____)

人事異動通知書

(氏名)

(現職) 営業部営業第一課 課員

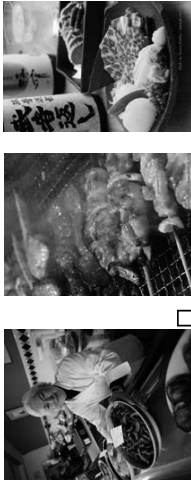
(異動内容) 人事部研修課 課員に配置換える

平成 25 年 4 月 17 日

サトウ・フーズワークス株式会社
代表取締役兼執行役員社長
佐藤 道隆

サトウ・フーズワークス株式会社

会社概要



会社名	サトウ・フーズワークス株式会社
設立	平成元年 4 月 9 日
資本金	55 億 9,245 万円
売上高	327 億 9500 万円(平成 22 年 3 月期実績)
代表者	代表取締役兼執行役員社長 佐藤道隆
従業員数	従業員 821 名、パート・アルバイト 9,368 名
事業内容	牛丼店「野吉屋」、ハンバーグ専門店「どっきりボンキョー」、イタリアン専門店「ハバサーレ」、中華レストラン「ヤーマン」、あつたか家庭料理「ふるさと」、全国 250 店を全店直営で展開、食品の輸入・製造・販売
株式	大阪証券取引所第一部上場
ミッション	私たちは、安全・安心で、かつ喜びのある食を提供し、顧客と地域社会に貢献します。
ビジョン	10 年後に、日本の飲食業界売上ナンバー3になる。

産業教育論ポイントチェックシート

自分の学習を自分で管理しましょう。

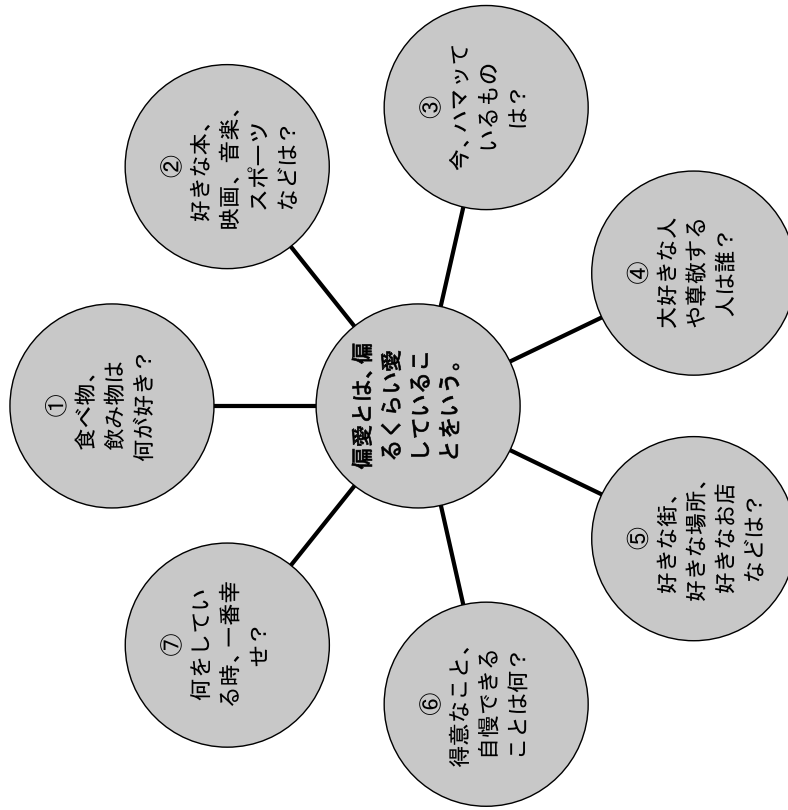
回数	シャトルカード カード + 1 p.	欠席 - 4p.	累計
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			
① 合計			p.

✓ 第 1+2 部テスト	20p. 満点
②	p.
✓ 第 3 部テスト	15p. 満点
③	p.
✓ 新人研修プログラム一式	10p. 満点
④	p.
✓ グループワークの相互評価	5p. 満点
⑤	p.
✓ 全体研修企画・運営	5p. 満点
⑥	p.
✓ 業務マニュアル	10p. 満点
⑦	p.
✓ ボーナスポイント合計	
⑧	p.
内訳	
内訳	
内訳	
内訳	
内訳	
①+②+③+④+⑤+⑥+⑦+⑧	
=	p.

S : 100-90p.
A : 89-80p. B : 79-70p.
C : 69-60p. X : 59p. 以下

偏愛マップ

自分が大好きなことをしている時、人は情熱的になります。実はみんなこだわりがあるものです。下記の①～⑦の〇の周りに、自由に思いつくままに書き出してみてください。キーワードだけでOKです。「アイドルが好き」ではなく「NHKの朝ドラに出てくる海女さん姿の能年玲奈が好き」のように、マニアックに書くのがコツです。



Syllabus

Welcome to Physics 11b, the second part of a one-year introductory course in physics. As the instructor for this course, I look forward to helping you gain knowledge and develop habits of mind that will be useful in your career. My goals for this course are to engender the reasoning and problem solving skills, confidence, knowledge, and technical expertise that will help you become a leader in your profession. In particular, I hope to help you learn how to use scientific reasoning to reach informed decisions in real-world situations.

I take my teaching duties very seriously and will work very hard to attain these goals. I will make myself as accessible as possible — I do want to interact with all of you. I encourage you to stop by my office or call me; the number below is my cell phone. Call anytime.

This document is meant to help you make the most of this course. It is divided into three parts: organization and philosophy, logistics, and policies.

I look forward to working with you this semester!

Eric Mazur

Instructor

Eric Mazur
eric.p11b@gmail.com
http://mazur.harvard.edu
+1 617 440-4691



eric_mazur

Course Web Site

<http://www.physics11.net>



Expectations

What you can expect of me (and the rest of the teaching staff)

1. I will work very hard to make this course useful for you (but I cannot do the work and learn the material for you).
2. I will personally read as much of your reading assignment feedback as possible, respond to some of it before class, and address other parts of it during class.
3. I will closely follow the class schedule as outlined on the course web site.
4. I will begin and end each class on time.
5. I will be available for assistance throughout the semester and look forward to meeting you in person.
6. I will do my best to promptly return your phone calls and answer your emails.
7. I will make sure assignments and examinations are returned to you in a timely manner.
8. I will make sure the examinations are fair; our grading standards will likewise be fair and open.
9. I will listen to constructive comments about my teaching and be open to suggestions.

What I expect of you

1. You have made a conscious, informed choice to join this class. This means you have read this syllabus, understand the required workload, and meet the prerequisites.
2. You are coming to this class ready to learn, not just to earn a certain grade or meet a requirement.
3. You understand that you must accept responsibility for your own learning and take an active role in the learning process. You will therefore come to class prepared, having read the assigned course notes for understanding (but not necessarily understanding everything), and provide written feedback on what you need help with.
4. You will attend classes regularly, come to class on time and not get up and leave before class ends.
5. You will participate fully in the classroom discussions.
6. You will effectively and clearly communicate your understanding on assignments and examinations. To this end you should always show your work and explain your reasoning.
7. You will ask questions if something is unclear — in class, during office hours, by telephone, e-mail or online. Don't wait until the end when there is little time left to address any problems.
8. You understand the benefits of collaboration and the strictly non-competitive nature of this course, and are willing to work with others in the classroom, in sections and laboratories, and on your homework assignments.
9. You will bring a positive attitude and share your personality, knowledge and skills with the rest of us throughout the semester.

Course goals

After successful completion of this course, you will be able to...

Apply principles of electromagnetism, electrical circuits, and optics (the "subject area") to:

- analyze the behavior of systems that include conductors, dielectrics, magnetic, electrical, and optical components, such as batteries, generators, motors, electronic components, radios, microscopes, telescopes, optical fibers, etc.
- solve both calculus-based and conceptual problems involving such systems, including problems you have not seen before
- take measurements and analyze and interpret data obtained in laboratory experiments involving such systems

Organize your content knowledge in the subject area by

- articulating the big ideas from each section, chapter, and/or unit
- making connections between different concepts
- recognizing that the various laws/equations are part of a coherent framework of electromagnetic theory
- building on knowledge acquired in previous courses
- synthesizing concepts in the subject area with ideas from other branches of physics, including mechanics, waves, thermodynamics, and relativity
- recognizing the universality of physical laws across subjects, fields, and disciplines

Use multiple representations to solve problems in the subject area, including

- visualizing problems by making simplified sketches that permit you to determine the important aspects of a particular problem
- translating a physical description to a mathematical representation
- interpreting graphical representations of variables and explaining their physical meaning
- explaining the physical meaning of mathematical formulations and solutions

Draw from an array of techniques to solve problems in the subject area by

- choosing, justifying, and then applying problem-solving techniques or procedures that are appropriate to a particular problem (and using these approaches in new contexts — that is, to approach problems you may have not encountered before)
- using a range of skills, including making estimations, approximations, series expansions, recognizing and exploiting spatial symmetries, using calculus, superposition, and vector analysis
- applying conservation principles

Collaborate and communicate clearly, in particular

- justify your thinking by clearly articulating the principles that apply in a given system
- explain your solution method, either written or orally to peers and instructors

In addition to these overarching course goals, there are more specific learning goals for each topical unit in the course. These learning goals will be distributed at the beginning of each unit. The course and learning goals will form the basis for assessment in this course.

ORGANIZATION AND PHILOSOPHY

Materials

There is no formal textbook for this course. The course notes for this course are available online. For the sections you will need a copy of *Tutorials in Introductory Physics* by L.C. McDermott (2 books shrink-wrapped together; Prentice Hall, 2002) available at the Coop. If you took Physics 11a during the Fall of 2010, you can use the same books. Any additional handouts will be made available via the course Web site.

Subject area

Physics 11b covers the subjects of electrostatics and magnetostatics, changing electric and magnetic fields, circuits and optics and meets the premedical requirements. The material is divided into nine units, separated into four groups with three cumulative midterms and one cumulative final examination:

Unit 1: Charge

Unit 2: Gauss's Law

Midterm examination on units 1–2

Unit 3: Work and energy in electrostatics

Unit 4: Charge separation and storage

Midterm examination on units 1–4

Unit 5: Magnetic interactions

Unit 6: Changing magnetic fields

Midterm examination on units 1–6

Unit 7: Changing electric fields

Unit 8: Electric circuits

Unit 9: Optics

Final examination on units 1–9

Because the units build on each other, it is important that you master each unit before moving to the next one. The structure of the course has been designed to help you accomplish that.

Course structure

Different people learn different ways. Therefore this course offers a learning environment with a diversified set of options. You can select from these options the method that works best for you given your individual learning style and strengths. There are pre-class reading assignments, class meetings, sections comprising tutorials and problem solving activi-

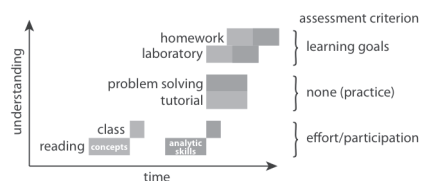


Figure 1 How the various components of the course fit together and help build conceptual understanding and analytic skills for each of the 9 units. Not all units have a laboratory component.

ties, laboratories, homework, an array of self-assessment options, and many ways to get additional support (see Course logistics for details). Not everything is required; some activities are for credit while others are designed to offer you a range of ways to get additional assistance. It is probably not even feasible to make use of all the options we offer. You should therefore use this document to help you plan your approach and see what works best for you.

Active learning

Learning physics is not simply the acquisition of correct information. Learning requires integrating new information with your own knowledge and experiences, and delivery of information by itself doesn't help you develop your own understanding of the material. What this means is that I cannot simply 'transmit' knowledge to you — you will have to take an active role in the learning process.

I have written down all the information for the course in the course notes of which are available online. For me to present all that information again in class would be a poor use of your time. If you prepare for class by reading the course notes and letting me know what part you found most difficult, then we can use class time to work together to develop a deeper understanding of the material.

One unsatisfying alternative to building a solid understanding is rote memorization and recall, which invariably leads to boredom and frustration and which has little, if any, lasting value. I don't want you to worry about having to "remember" lots of information in this course — you are free to consult your notes or book during all work for the course, *including all examinations*.

Problem solving

Learning to develop problem-solving strategies is a central goal for this course. Unlike many textbook problems, real problems, such as those you are likely to encounter in life, have no prescribed solution (else there wouldn't be a problem!). The path to a solution for such problems is likely to involve mistakes and wrong turns, which can be disconcerting at first. It is therefore important to recognize that mistakes are valuable in finding the path to a solution, to learn to recover from such mistakes, and to persist in working to a solution even when you don't necessarily see a clear path to a solution when you begin. Good problem-solving practices include:

- articulating your expectations for the solution to a problem before diving into the details
- breaking down longer problems into smaller, more manageable pieces
- checking your solution by justifying the reasonableness of your solution, checking the symmetry of your solution, evaluating limiting or special cases, relating your solution to situations with known solutions, checking units, dimensional analysis, and/or checking the order of magnitude of the answer.

You may want to reread Section 1.8 of the course notes for Physics 11a for additional information on problem solving.

Strategy for success

Physics 11b is not an easy class. Part of the reason for the difficulty of this class is that the concepts in electricity and magnetism are much more abstract than those in mechanics. Another reason is that the material requires calculus and vector mathematics. In addition, my approach to this course and my expectations of you are different from those in most science courses. Our goal will be to develop a solid

5

COURSE LOGISTICS

Prerequisites

Physics 11a and Mathematics 1b (or equivalent) are prerequisites for this course. A solid background in mechanics and in the following math areas is essential: algebra, trigonometry, calculus (differentiation and integration), and vector mathematics. If you take this course without the required prerequisites, you seriously jeopardize your ability to do well. If you are uncertain about your preparation, consult me.

Enrolling

To enroll in Physics 11b you need to register on the course Web site:

1. Point your browser to <http://www.physics11.net>.
2. Click on "Sign in" and then on the "Not enrolled?" link.
3. Complete the form and select a section and bi-weekly laboratory section (first-come, first served!).

I also request that you complete two background questionnaires at your earliest convenience. Each should take about half an hour. Your sincere effort in responding to these questionnaires will allow us to adjust the course to best suit your needs. Your answers will not affect your grade in any way, but are a requirement for enrolling and holding your spot in the section and laboratory.

Clickers

We will be using a new system for audience participation — developed here at Harvard — that is different from what you have used in Physics 11a and other courses. Using this new system (called EARS for Extensible Audience Response System), you will be engaged in different types of questions during lecture (not just multiple-choice), and you will be able to use the system both inside and outside class to gauge how you are doing. Because this system is more powerful than other response systems, you will not be able to use the clicker from last semester; instead, we ask that you bring one of the following devices to class:

- a laptop with wifi
- an iPhone, iPod Touch, or iPad
- another mobile device with wifi and a web browser

The first time you use the system, you need to sign up for an EARS account: point your browser to <http://ears.seas.harvard.edu>, click "Student sign up," and complete the resulting form. Be sure that your device has enough charge to last the entire 90-minute class — the lecture hall does not have very many electrical outlets. If you are not able to bring one of these devices to class, please contact us immediately so that we can make alternate arrangements.

Reading assignments

Each class meeting is preceded by a reading assignment, which is due by midnight the day before coming to class. Late submissions are not accepted. Because the class meetings are not standard "lectures" —

7

understanding of the underlying concepts — not to simply plug numbers into a bunch of formulas that may have no underlying meaning to you (and that will probably play little or no role in your future career). For all these reasons advance reading, consistent active participation throughout the term, collaboration, and timely completion of assignments are key to success. If you work regularly and allocate enough time each week to keep up with the course, you will get the most out of the course both intellectually and grade-wise.

Confusion

Confusion is part of learning. You cannot learn new concepts without ever being confused. (You *can* memorize information without trying to understand how that information fits into the big picture and not experience any confusion, but that doesn't constitute learning.) At the same time, the feeling of being confused can be very disconcerting, especially when you are under pressure to perform. In lecture I will challenge you to think and build your own understanding of the material. I will elicit confusion and help you resolve that confusion. By learning to master confusion, you will build confidence. So, if you feel unsure about something or don't understand a new concept right away don't panic: remind yourself it takes time to fully understand new material. Even after teaching introductory physics for many years, I occasionally get confused and develop new insights as I work with you on the material and answer your questions! Think of confusion as an opportunity to learn, not as a failure or an obstacle to understanding. Most importantly, simply trying to "remember" something that confuses you or that goes against your "gut feeling" makes no sense: if you feel unsure about something and you have given yourself some time to try to understand on your own, seek help by discussing it with others or with the staff.

Counterproductive practices

Two strategies that generally don't pay off are memorization (the exams are open-book anyway) and cramming to catch up just before the examinations (it will be impossible to assimilate all the material). Compulsively solving countless problems in hopes of learning by example is not very effective either: this approach is very time-consuming (and awfully boring) and prevents you from putting the effort into understanding the underlying concepts.

6

that is to say, they are not simply a presentation of the material printed in the course notes — these reading assignments are very important.

To complete each assignment you must read some sections from the course notes (typically half a chapter) and then answer three short questions on the course Web site. The notes are available electronically using a collaborative pdf annotation tool ("NB") developed at MIT. With NB, you can electronically annotate the text, allowing you to interact directly with the text and subject matter. You can keep your annotations to yourself or share them with others so you can get feedback. Once you have enrolled on the course web site, you will receive an email with a link to your personalized NB web-based desktop. Your first stop should be the Tutorial. As long as you don't delete your cookies, all links to the reading materials should bring you back to your NB desktop. I encourage you to contribute often through questions, comments, or feedback to your peers. In turn, the course staff and I will respond to as many of your comments as we can.

If you are not comfortable reading the notes online and you don't think you'll benefit from the collaborative annotations, you can always download the notes in pdf format and print them.

What to expect: Reading the assigned course notes for understanding is a very important part of the work you will be doing. More importantly, pre-class reading provides experience in an area that you are likely to encounter often in your future career — reading scientific text for understanding and often commenting on that text and discussing it with others. Typically you should set aside 2 hours to complete each reading assignment. I do not expect you to fully understand everything before coming to class, and you may have to reread some passages to build your understanding. The goal of the reading assignments is not to learn everything in one pass, but to prepare for class, to familiarize yourself with new terminology and definitions, and to determine which part of the subject needs more attention (you'll convey that to me in your answers to the online questions). Just skimming the text or quickly reading the text one time through won't enable you to answer the online questions in a satisfactory manner and earn credit for your work. These questions are graded on a two-point scale (2 = demonstrates reading; 1 = room for improvement; 0 = unsatisfactory) and points accumulated on these assignments are worth 10% of the final grade. Whether or not your answers are correct is irrelevant for these assignments and won't affect the grade; *what counts is convincing us that you have read the text for understanding* and are beginning to synthesize the information in a coherent manner.

Class meetings

Physics 11b meets on Tuesdays and Thursdays from 9:30 a.m. to 11:00 a.m. in Science Center B. Each class period will be in the form of an interactive discussion of the feedback obtained from the reading assignments. Specifically, the class meetings will focus around a number of *ConceptTests* — questions that focus on the more difficult concepts. You will be able to answer these questions using a web-enabled device. Your answers on the *ConceptTests* are not graded, but regular and consistent participation in the *ConceptTests* can reduce the weight of your final exam (see grading standards for details). Each class period is filmed and made available online, but because of the interactive nature, you will, unfortunately, not derive much benefit from watching online.

What to expect: *ConceptTests* are meant to challenge you (without worrying about your grade other than your participation in them). In addition to providing you a form of continuous self-assessment, they also give me important feedback. The ensuing discussions will often help clarify conceptual difficulties. To be effective these questions must be challenging enough to stimulate discussion, so the answer to many of the questions may seem counter-intuitive and perhaps even confusing at first. The goal is to build intuition and confidence and to overcome any confusion. Analysis of past years' data shows that on average people get about 50% of the questions correct before discussion; even the top students answer 25% of the questions incorrectly. After discussion, the percentage of correct responses (and the

8

corresponding understanding of the material) goes up significantly. Students who participate consistently in the discussions tend to obtain significantly higher grades in the class.

After each class I will be available in Science Center 111 to answer questions and provide additional help. All of the ConcepTests will be available for review online immediately after each class.

Sections

Each week, starting on January 31, we will hold two-hour sections in Science Center 306. During the first hour of the section, you will work in groups of four on a tutorial worksheet. These worksheets are specially prepared to deal with some of the more important topics and concepts in the course. The second half of the section is devoted to problem solving and homework. Attendance is not mandatory, but highly recommended.

In the week before each section, we will issue very short (15 minute max) online pretests corresponding to the tutorial worksheet. This pretest will help prepare you for the tutorial and will be graded based on effort. The pretest will be available through the course website (under the assignments tab). It will be posted after class on Tuesday each week and must be completed by 9:30am on the Thursday the week before each tutorial.

You can select a convenient section when enrolling online; please go to the section you registered for or reschedule your assignment online. In case you cannot schedule a convenient section, e-mail kelly.p11b@gmail.com

What to expect: Like the ConcepTests, the tutorials are meant to elicit common misunderstandings and then resolve those in a group discussion. The role of the teaching staff is to facilitate discussion and to make sure that your worksheet contains the correct information at the end of the section. After a brief example problem done under guidance of the teachings staff, your group can use the second hour of the section to get started on the homework assignment. You should form a group of people with whom you can meet regularly to work together and address difficulties.

If you find that you do not benefit from working with your group, join (or form) a different group. It is of utmost importance that you find the right people to work with throughout the semester.

Laboratories

There are five laboratory sessions during the semester. The labs will be held every other week and will last three hours. At the end of each lab, you will hand in a lab report to receive credit for the lab. In general, lab reports must contain a description of the experiments you performed, the results you obtained, the conclusions you draw from those results, and address any questions posed in the lab handout. The laboratories are mandatory and are worth 10% of the grade.

You can select a laboratory section when enrolling online. Please go to the lab you registered for or reschedule your assignment online. In case you cannot schedule a convenient lab, e-mail kelly.p11b@gmail.com.

9

Homework

Weekly homework consists of a set of challenging quantitative problems and a worksheet following up on the tutorial given during the preceding section. The homework assignments will be made available on the course Web site about one week in advance of their due date. Solutions will be posted shortly after the due date.

1. Your work should be neat and orderly; make large, understandable, and clearly labeled diagrams. Formulas and numbers alone won't do; you must show your work and explain your reasoning to earn full credit on a problem.
2. Hand in your work on 8.5 × 11" sheets, stapled together, with your problems in numerical order as assigned.
3. On the top left corner, put your name, the names of people you collaborated with, the assignment number, and your section number.
4. Place homework in locked boxes on the wall near Science Center 110.

Graded homework is returned during your section. Please keep your graded homework as proof of completion of work. The homework assignments are worth 20% of the final grade.

Toward the end of the semester we will administer one or two online assignments. The main purpose of these assignments is to assist you in identifying conceptual difficulties with the material in preparation for the final examination. These online assignments are graded for participation only and any points earned are added to your homework points.

Examinations

Three in-class examinations will be given during the regularly scheduled class periods on February 17, March 10 and April 7. The course concludes with the usual three-hour final examination; the date of the final examination is determined by the Registrar's Office and will be announced later. All exams are "open-book"; that is, you may bring your notes, a copy of the course notes and any textbook you choose.

The in-class examination with the lowest score is dropped from the final grade calculation and the final examination allows you to gain back any points not realized on the two remaining in-class examinations.

What to expect: The questions on the exams are a combination of quantitative problems and conceptual questions resembling the ConcepTests and the type of questions on the tutorial worksheets.

The examinations cover all the material in the course notes that has been assigned as reading (even if the subject was never discussed in class or in the sections or included in a previous assignment).

Support resources

There are many ways to get assistance with the material in this course. Be sure to use these support resources as soon as you feel unsure about anything.

Forums. In addition to providing course information, announcements, assignments, lecture videos, handouts, review material, and grade information, the course Web site has a series of discussion forums where you can post any questions. *The forum should always be your first recourse for seeking answers to your questions.*

10

Office Hours. I will always be available for about an hour after each class period in Science Center 111. In addition, the entire teaching staff will hold regular weekly office hours. Times and locations will be posted on the course website.

E-mail. The e-mail addresses for the entire teaching staff are available on the course Web site. Please note that a class of the size of Physics 11 can easily generate an overwhelming number of e-mail messages. So, if you need help or advice, please consider as a first option posting your query on the NB system. This way, duplication of commonly asked questions is avoided and others in the class benefit from your question too. If you prefer to reach a specific individual you may use e-mail. Questions of a general nature that are not suitable for posting (sectioning problems, etc.) should be e-mailed to kelly.p11b@gmail.com.

Phone & instant messaging. Feel free to contact members of the teaching staff via phone for any urgent questions. A staff telephone directory is available on the course Web site. For home telephone numbers, please respect earliest and latest calling times. Some members of the staff can also be reached via instant messaging. (Eric Mazur's AIM account, for example, is eric_mazur@me.com).

Other resources. The University offers many other resources for help, including tutoring and reserve materials.

Time commitment

Physics 11b is a demanding course and you will need to allocate sufficient time during the semester to do well in the course. You should allocate between 12 and 15 hours per week for all activities, more if you need to catch up on your knowledge of the prerequisites (mechanics, calculus, vectors). If you do not have this time available, you should seriously reconsider taking this course. In a typical week, you will need the following time allocation:

Reading/Studying	4–5 hrs/week
Lectures	3 hrs/week
Homework	3–4 hrs/week
Sections	1–2 hrs/week
Laboratories	1.5 hrs/week

During weeks where in-class examinations are given there will be no homework, reduced reading, and the sections will be devoted to review.

During Reading Period we will offer an entirely optional, complete review of the entire course. As you will have done most of the work during the course of the semester, you will find that you do not need to spend a disproportionate amount of time preparing for the final.

If you find you are spending significantly more time than 15 hours per week, you should contact someone on the teaching staff to develop a different study strategy.

11

COURSE POLICIES

Collaboration

I strongly encourage collaboration in class, during sections and laboratories, and on homework assignments. Because the course is graded on an absolute scale, you will never reduce your grade by helping others — on the contrary, by doing so you will reinforce your own knowledge and improve your performance. Before working together or consulting others on any assignments, however, it pays to give yourself an opportunity to work on it alone.

When handing in work on which you worked together with others, you must always 1) state the names of the people you collaborated with and 2) submit individual and original solutions. When you sit down to write up your answers for submission, you should do this without consulting notes copied from someone else. Work that closely matches someone else's is unacceptable.

Activities for which collaboration is *not* permitted are: reading assignments, in-class pretests, Web-based tests, and examinations.

Grading standards

The final grade is calculated on an absolute scale and is based on a point total of 100 of which 20 points are for the homework, 10 points for the reading assignments, 10 points for the laboratories and 60 points for the examinations. Bonus points worth up to 5 points can be accumulated from the pretests. These points are weighted by your classroom participation and reduce the weight of the final exam. The lowest in-class examination score is not counted; the remaining two count for 15 points each. The final examination allows you to gain back points not realized on the in-class examinations: it is worth 60 points, minus the two highest scores for the in-class examinations, minus any bonus points. A worksheet with letter grade cut-offs will be handed out early in the course.

Please keep in mind that simply keeping on top of the work lets you accumulate a considerable number of points. Class participation, reading assignments, tutorial pretests, problem sets, and laboratories add up to 45% of the final grade. The in-class examinations allow you to further reduce the weight of the final to as little as 25% of the final grade. You can therefore assure yourself of a good grade by working consistently throughout the term. Finally, the scores of your in-class examinations can be made up on the final exam.

Regrades

Requests for correction of grading mistakes on exams must be made within a week of issuance of the assigned grade and you must not have added anything to the original writing on the assignments. (Please note that we copy all examinations and some of the homework before it is graded.) Clerical errors (e.g., addition errors) will be corrected immediately. We never reevaluate credit for a single problem: a regrade request of a single problem triggers a regrading of the entire assignment or examination and grades can move up or down. Only if the grade changes by 5% or more of the maximum point total for each examination (10% on homework assignments) will the new grade replace the old one.

12

Missed or late assignments and examinations

In case of extenuating circumstances, such as major religious holidays, illness, injury or other personal emergency, you can request an extension for assignments. Any such requests must be made in advance of the due date; requests made after the due date will not be considered. You can get half credit for up to one late homework assignment without prior extension, provided you hand in your work in person to your assigned TF within one week of the due date. Your submission must still be original — copies (handwritten or otherwise) of solutions are not acceptable.

At the end of the term we will offer an opportunity to make up one missed laboratory assignment.

There are no make-up in-class examinations; if you miss an in-class examination for an officially excused reason (major religious holiday, documented illness or family emergency, or official university business) we will replace your missed examination score with the appropriately scaled score on the portion of the final exam that covers same the material as the missed in-class examination. Make-up final examinations are granted and administered by the Registrar's Office.

第 6 回 FD 研究会

「学生をもっともっと学ばせる授業設計と成績評価

～去年と同じじゃつまらない！ 授業を少しだけリニューアルしてみませんか～」

シリーズ企画②: 厳格な評価の必要性やその方法・ツール

開催日：2015 年 12 月 7 日（月） 16：10 ～

会 場：佛教大学紫野キャンパス 1 号館 3 階 1-309 教室

発表者：佐藤 浩章（大阪大学教育学習支援センター 准教授）

参加者数：24 名

2015年度 第6回佛教大学FD研究会

1. 開催概要

開催日：2015年12月7日（月） 16：10～17：40

テーマ：「学生をもっともっと学ばせる授業設計と成績評価

～去年と同じじゃつまらない！ 授業を少しだけリニューアルしてみませんか～」

シリーズ企画②「厳格な評価の必要性やその方法・ツール」

会場：佛教大学紫野キャンパス 1号館3階 1-309 教室

発表者：佐藤 浩章 先生

（大阪大学教育学習支援センター副センター長／全学教育推進機構・准教授）

参加者数：24名

2. 発表（要約）

本日の学習内容

1. 学習評価の目的
2. 学習評価の原則
3. 学習評価の方法
4. 良い評価とは？
5. 様々な学習評価
6. 成績点と合否判定
7. 試験の管理

到達目標

1. 学習評価の意義を説明できる。
2. 学習評価に関わる基本用語（形式的評価・総括的评价、絶対評価・相対評価、客観評価・主観評価、直接評価・間接評価）を説明できる。
3. 到達目標にあった適切な評価方法を選択できる。
4. 公正で厳密な評価をするために必要な試験の管理方法を説明できる。

1. 学習評価の目的

何故私たちは学習の評価をするのか、目的・意義をグループで話し合う。

（各グループからの意見）

- 到達目標の達成度を図るため

- 授業の理解度を確認するため
- ステークホルダーに対する説明責任

(佐藤先生より)

- 学生の注目を集める
 - 評価を使うことによって学生は注目する
- 学生の学習時間を制御する
 - 評価を使って学習時間をコントロールすることができる
- 学生自身が復習をし、授業で学んだことを整理する
- 学生が自分の理解度を確認する
- 学生がさらに学びたいという動機を獲得する（学生の学習を励ます）
 - 評価によって学習意欲を高めることができる（逆パターンもある）
- 当該学問分野で求められる文化、言語に関するスタンダードを学習する
 - 授業のエッセンス（基盤）を伝えることができる
- 最終的な成績を評価する
- 当該授業の質の保証（外部評価等への対応）
 - 非常に重要な指標（特に職業直結の学部学科の場合）

成績評価は、概ね上記のとおりのものであり、教員だけでなく学生や学外にも影響があることが分かる。成績評価の作業は教員にとって大変な手間（負荷）であるが、それがステークホルダーにとって意味のあるものであれば、必要な負荷であると言える。

配布資料の、日本とフランスの入学試験問題のサンプルを見て何を感じただろうか。左のサンプル（日本の試験問題）では記憶と再生の能力を測っており、右のサンプル（フランスの試験問題）はそれに加えて思考力・判断力・ロジカルシンキング・ライティングの能力も測ることができる。当然ながら、採点作業は右（フランスの試験問題）の方が困難である。左（日本の試験問題）はコンピューターが全て行なうことができる。コンピューターで読み取ったものを瞬時に採点して二次試験に繋げることができるシステムが開発され、日本においても長年採用されてきている。

センター試験については、京都大学の益川先生が一貫してマークシート型の試験を改めた方がよいと主張されている。また、桜美林大学の芳沢先生についても本質的な欠陥、プロセスの軽視であるとの指摘をされている。このような批判があるなか、京都大学では2016年度入試より制度改革を行ない、数学の解答時間を2時間半から4時間に延ばし4問を課すものとする等して、入試問題を先述のフランスの試験問題のように思考力や判断力を問うものとした。さらに、「特色入試」として、高校時代の幅広い活動、入学後の研究計画について記す「学びの設計書」、筆記試験に加えて論文、面接といった評価を経て合格者を決める仕組みも導入する。これは、評価に重点を置きたいという世の中の流れに対応したものと思われる。

このような入試制度改革が行なわれている背景の一つには、従来のマークシート型の試

験により学生の画一化がすすみ、創造力を持ったイノベーション人材が輩出されないことが懸念されたためと考えられる。このように従来のマークシート型の入学試験が抱える問題が顕在化し、周知のとおり大学入試センター試験が廃止される流れとなった。これは大きな、国際的な動きである。

「もしあなたが学生の学習を変えたいと思うなら、評価の方法を変えなさい。」(Brown,1997,p7)という言葉がある。また、「学習に最も強い影響を与えるのは評価方法であろう。試験の質問項目やレポートの課題に何を選ぶのかということが、学生の学習に強い影響を与える。」(Entwistle,1996,p.97)という言葉もある。評価とは、①教育の学習・教育観を最も濃密な形態で学生に伝えること。②教員と学生の双方が最もエネルギーを注ぐ、コミュニケーションの場である。

近年は多くの教員の学習・教育観が変わってきていることに対して評価方法はあまり変わってきていない印象を受ける。本来、教員の学習・教育観によって評価方法は変わるものである。知識習熟度のみを測るのであればマークシートで良いがそういうわけにはいかない。評価を変えて、学習そのものを変えていただきたい。

2. 学習評価の原則

(1) 何を評価するのか

評価は授業の到達目標に応じて行なわれ、①知識・理解、②思考・判断、③技能・表現、④意欲・関心、⑤態度のどこに重点を置くかによって評価方法は変わってくる。複数の要素がある場合は当然、評価方法も複数になってくる。

(2) どのような順番で評価するのか

授業の目標がクリアになっていないと評価方法を設定することができないため、まずは到達目標の設定を行ない、評価基準の設定をしたうえで評価方法の設定を行なうという流れになる。

(3) いつ評価するのか

①総括的評価（いわゆる期末試験）②形成的評価（中間テスト等）③診断的評価（事前課題等）がある。学生の理解度を測った授業の進度の調整をする場合、形成的評価を用いる。形成的評価により学生の学習を促進させることができるが教員の負荷も高い。

効果的な形成的評価におけるフィードバック

- できるだけ速やかに
- ポジティブで励ますようなコメントで
- 学習到達目標と関連づけて
- 評価基準とも関連づけて
- 自分の勉強に対する振り返りを促すように

- インフォーマルで、会話調の言葉を使って
- あなた自身の言葉で説明を

(4) どのように評価するのか

- 客観評価 例：多肢選択問題、心理テスト
- 主観評価 例：観察評価、レポート評価
- 直接評価 例：標準テスト、客観テスト
- 間接評価 例：能力の自己診断
- 量的評価 例：多肢選択問題
- 質的評価 例：レポート評価

上記のようにカテゴライズできるが、グレーゾーンが広いので注意。


3. 学習評価の方法

「授業でどのような成績評価方法を使用しているか」、「それらの評価方法でどのような能力を測定しようとしているか」を表 1 に記入し、グループで共有する。その後、記入した内容について表 2 を参考にしながら確認・整理しておく。

表 1

3. 学習評価の方法					
評価方法	診/形 /総	主/客	直/間	量/質	どの能力を測定し たい？

表 2



3. 学習評価の方法

目標に対応した評価方法


認知的領域 (知識)	精神運動的領域 (スキル)	情意的領域 (態度)
【知識・理解】 客観試験、論述試験 【思考・判断】 □頭試験、論文、レポート	【運動技能・操作技能】 実地試験、シミュレーション、観察試験 【コミュニケーション】 □頭試験、観察試験、相互評価 【情報収集能力】 論文、レポート	【態度】 実地試験、シミュレーション、観察評価 【意欲・関心】 レポート、ポートフォリオ、相互評価、心理テスト

20

表 2 によると、レポート試験は様々な能力の測定に対応しており、非常に便利な方法であることが分かる。ただし、一方で学生にしてみれば何の能力が問われているのか分からないという側面もある。レポート試験をする場合においては、測定する能力を事前に示すことで、学生の学習行動も変わってくると思われる。評価方法と測定すべき能力について、明確に伝えられているか、点検していただきたい。

評価情報の例

表 3



評価情報の例

Q どこをさらに改善できますか？

到達目標

- ①職場における自己啓発の重要性とその手順を説明できるようになる。
- ②職場におけるOJTのコツを説明できるようになる。
- ③職場における新人研修プログラムが作れるようになる。
- ④職場で使えるマニュアルが作れるようになる。

評価情報

- ①第1部+第2部テスト：25%（○月△日実施）
- ②第3部テスト：20%（△月×日実施）
- ③新人研修プログラム一式：15%（×月□日提出）
- ④マニュアル：15%（□月△日提出）
- ⑤受講態度：5%
- ⑥出席点：20%

表 3 の場合、次のように改善できる。まず、評価情報がどの到達目標とリンクしているかをしっかりと明示する。また、出席点は削除し、受講態度は漠然としており学生に伝わらないケースが想定されるので、グループワークの相互評価としている。

到達目標

- ①職場における自己啓発の重要性とその手順を説明できるようになる。
- ②職場における OJT のコツを説明できるようになる。
- ③職場における新人研修プログラムが作れるようになる。
- ④職場で使えるマニュアルが作れるようになる。
- ⑤職場で求められるコミュニケーション能力を現状よりも向上させる。

評価情報

- ①第 1 部＋第 2 部テスト：25%（○月△日実施）→目標①③に対応
- ②第 3 部テスト：20%（△月×日実施）→目標②に対応
- ③新人研修プログラム一式：15%（×月□日提出）→目標③に対応
- ④マニュアル：15%（□月△日提出）→目標④に対応
- ⑤グループワークの相互評価：5%（参考資料あり）→目標⑤に対応
- ⑥ミニコメントシート（毎回提出）：20%→目標⑤に対応

4. 良い評価とは

1) 良い評価の条件

- 妥当性…学習の到達度を測るのにその問題は適切か？
- 信頼性…同じ集団に対して同じ試験をくり返し行っても同じ結果が得られるか？
- 客観性…誰が測っても一定の結果が計測できるか？
- 効率性…評価が容易で、経済的にも時間的にも実用的であるか？

良い評価の条件は、教員が行なう調査とほぼ同じである。ただし、効率性については、調査とは異なり実用的なものが求められる。

修正イーベル法

必要度 \ 難易度	平易	中等	困難
必須	0. 8 0	0. 7 0	—
重要	0. 7 0	0. 6 0	0. 5 0
疑問	0. 5 0	0. 4 0	0. 3 0

修正イーベル法は、難易度設定の際によく使われるので参考にさせていただきたい。これによると、必要度が高く、難易度が高い問題は設定しないとされている。また、必要度が必須で、難易度が易しい問題は正答率が概ね 80%になるような問題が適切であり、重要度が低く（疑問）、難易度が高い問題は、正答率約 3 割が適切であるとしている。

2) 評価を実施する際の条件

- 評価する内容を事前に学生に伝える
 - 何を評価するかも伝える

3) 学生の自主学習を促すための工夫

- 過去問の事前配布
 - 特に知識理解を測る問題については効果がある。ヤマ勘を防止する効果もある。
- 自分で作成した手書き A4 版用紙一枚のみ持込を許可する
- 予想問題の作成を宿題に課し、全員に配付する
- 学生同士で教えあい、学び合う試験のための予習時間をとる

これは授業で行なうべきことではないという声もあるかもしれないが、結果的には学生が勉強するかどうかの方が大事である。成績評価は良くも悪くも学生の注目を集めるものであるから、その効能を最大限に活かして仕組み作りをすることが肝要ではないか。

ルーブリック評価

ルーブリックは、採点の厳密性を確保しながらも作業の効率化が図れるツールである。これは事前に配付しなければ意味がない。事前に配付することで、やる気のある学生はより良い評価を目指して必死に勉強し、提出されてくるレポートの質も向上する。ただし、やる気のない学生は一定数いるので、とんでもないレポートがなくなるというわけではない。

5. 様々な評価方法

各グループでそれぞれの評価方法のメリット・デメリットについて意見交換をする。

ピア評価（学生同士で行なう評価）

メリット

- 学生が学生に刺激を受け学習意識を高めることができる（ライバル・サポーター・モデル）

- 教員の負荷軽減

デメリット

- 学生が評価すること自体に慣れていない
 - 評価についてレクチャーを行なうか、一度評価したものについて再度議論する等してフィードバックを行なうと良い
- お互いをかばってしまう

自己評価

メリット

- 自分自身の振り返りができる
- 教員評価とのズレ解消

デメリット

- 自己評価を低く見積もる
- 客観的評価ができない

自分で考える力、メタ認知、メタ学習の能力が問われている。

e ラーニング評価

メリット

- 結果が画面上に即時反映される
- 繰り返し実施できる

デメリット

- 断片的な知識の習得
- 本人認証の問題

6. 成績点と合否判定

絶対評価

目標の達成度を基準に評価する。合格点の範囲内で得点分布を調整せず、得点そのままの辺りを成績の評点とする。

相対評価

集団の中での位置付けを基準に評価する。得点の頻度分布をとり、生じた分布により成績を段階に分ける。

絶対評価と相対評価のどちらを用いるのが良いかという議論は続いているが、どちらが良いか悪いかではなく、評価方法を明確に説明できるかどうかである。

ある大学の工学部と理学部では、ある共通科目の成績（秀・優・良・可）の分布におい

て、秀の割合が 15%、優の割合が 30%で推移している。これは、相対評価とまではいれないが、秀と優の割合を一定に保つための何らかの意図が働いていると思われる。一方で、教育学部では秀の割合が 20%以上、優の割合も 40%近くある。これは、おそらく採点が甘いことからこのような分布になったと考えられる。学部ごとに成績分布が異なると、海外留学や奨学金の推薦者を GPA を使って選出する場合、学部によって有利不利が発生してしまう。この問題への対策として、学部学科の成績分布を公開し、是正を促すという動きが各大学で見られる。

7. 試験の管理

1) 成績の開示

- 成績点の公開
 - 個人情報の保護に留意する
- 答案の返却
 - 2週間以内の返却が望ましい
- 成績判定資料の保管
 - 5年間の保存
- 学生から成績評価への申し立てへの対応
 - 答案用紙を見ながら採点基準を説明する

2) 不正の防止

学生の不正行為は発見することに重きを置くよりも、不正を行なわないようにすることの方が大切。

3) 剽窃の防止

レポートの剽窃の手口はコピー問題からダウンロード問題に移ってきている。

「ハッピーキャンパス」というサイトでは様々なレポートが販売されている（剽窃がばれた時の謝罪文まで販売している）。大学側もコピー防止のソフトウェア等で対策をするがすぐに新たな手口が開発されてしまい、イタチごっこである。

剽窃防止のための対策

- 授業中にレポートを書かせる（反転授業）。
 - 知識の伝達は事前のビデオ学習等で行なう。
- 発表・討論、記述試験、面接試験に切り替える。
- 幅広いテーマのレポート課題を課さない。
- 本人しか書けないような内容（自己に関すること）をテーマとする。
- 授業に参加していないと書けないような内容をテーマとする。
- レポートの書き方（とりわけ問いのたて方、引用の仕方）を教える（カリキュラム改

革が必要かもしれない)。

- ルーブリックを作成する。
 - どうやってレポートを書いていいか分からない状況が、レポートの剽窃に繋がるので、ルーブリックで評価基準を示すことも対策の一つ。
- 学問的誠実性について教える (教員が見本を示す)。



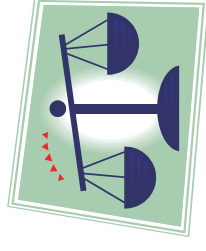
厳格な評価 ～その必要性・その方法・ツール～

佐藤 浩章
(大阪大学教育学習支援センター)



学習内容

1. 学習評価の目的
2. 学習評価の原則
3. 学習評価の方法
4. 良い評価とは？
5. 様々な学習評価
6. 成績点と合否判定
7. 試験の管理



2

到達目標



1. 学習評価の意義を説明できる。
2. 学習評価に関わる基本用語（形成的評価・総括的評価、絶対評価・相対評価、客観評価・主観評価、直接評価・間接評価）を説明できる。
3. 到達目標にあった適切な評価方法を選択できる。
4. 公正で厳密な評価をするために必要な試験の管理方法を説明できる。

3

1. 学習評価の目的



なぜ私たちは学習の評価をするのでしょうか？
(学習評価の目的・意義とは？)

1. 学習評価の目的

日本大学入試センター試験（倫理）問題（2014）
解答時間60分（多肢選択式）

（37問中の11問）下線部③に関連して、公正としての正義に関するロールズの思想内容の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 部分的正義には、罪を犯した人には罰を与え、罰を均等に与えるように、人々の利害損失を均等に調整する正義（矯正的正義）があるとした。
- ② 幸福の計算において、各人を等しく一人として数えるという基準から、諸個人の利害を等しく計算することが正義にかなうと説いた。
- ③ 誰もが欲するであろう基本的な財の配分の正義を問題にし、基本的自由に対する平等の権利と、格差の是正のための原理を提示した。
- ④ 生命・自由・財産所有などの各人が生まれながらにしてもつ自然権を守ることが正義とし、その保障を政府の役割であるととした。

フランス大学入学資格試験（ヒカローア）
（哲学・文学系）問題（2012）
解答時間4時間（記述式）

- ① 働くことで何を得るのか？
- ② あらゆる信仰は理性に対立するか？
- ③ スピノザ『神学・政治論』の一説の説明

（坂本,2012）



1. 学習評価の目的

益川 敏英

ノーベル物理学賞受賞者。名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構長・特別教授、京都大学名誉教授。

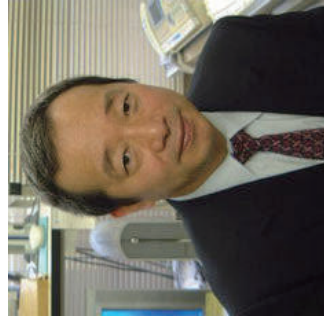
「教育システムを変えて、生徒に考えさせるべきだ。マークシートを使った現在の試験は改めた方がよい」

（2008.10.11産経新聞）

1. 学習評価の目的

芳沢 光雄

桜美林大学リベラルアーツ学
群教授



「（マークシート問題は）正しく推論しなくとも正解を見つけれられる方法がいくつもあるという本質的な欠陥から、ものごとのプロセスを軽視して「答えさえ正しく当たっていいばよい」といった風潮が、広く浸透している感がある。」

（2008.12.24 朝日新聞）



1. 学習評価の目的



「もしあなたが学生の学習を変えたいと思うなら、評価の方法を変えなさい。」

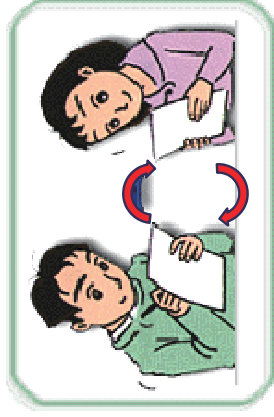
（Brown,1997,p7）

1. 学習評価の目的



「学習に最も強い影響を与えるのは評価方法である。試験の質問項目やレポートの課題に何を選ぶのかということが、学生の学習に強い影響を与える」
(Entwistle, 1996, p.97)

1. 学習評価の目的



評価とは

- ・教員の学習・教育観を最も濃密な形態で学生に伝えること。
- ・教員と学生の双方が最もエネルギーを注ぐ、コミュニケーションの場。

1. 学習評価の目的



評価を変えて、
学生の学習を変えてみませんか。

2. 学習評価の原則



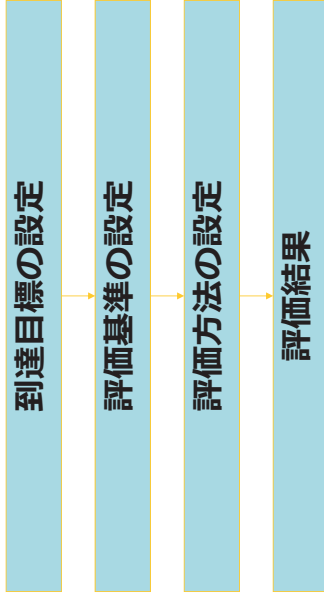
1) 何を評価するのか？

- ・評価は授業の到達目標に応じて行われる。
- ・成績評価の項目と学生の到達目標を対応させると、学習を促進させることができる。
- ・それぞれの目標を測定するのに適した方法を用いる（後述）。

2. 学習評価の原則



2) どのような順番で評価するのか？

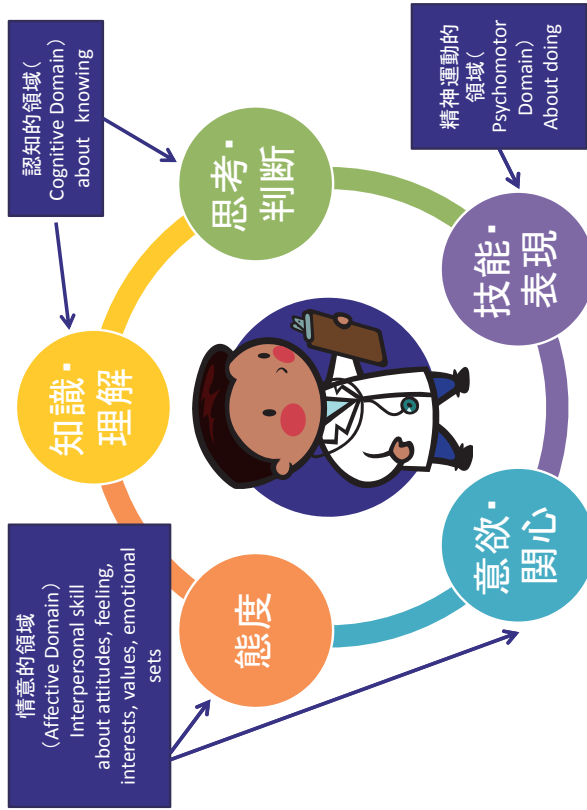


2. 学習評価の原則



● 効果的な形成的評価におけるフィードバック

- できるだけ速やかに
- ポジティブで、励ますようなコメントで
- 学習到達目標と関連づけて
- 評価基準とも関連づけて
- 自分の勉強に対する振り返りを促すように
- インフォームラールで、会話調の言葉を使って
- あなた自身の言葉で説明を



2. 学習評価の原則



3) いくつか評価するのか？

- 診断的評価 (Diagnostic Assessment)
学習の前に、既に持っている知識を調べる評価。
- 形成的評価 (Formative Assessment)
学習の途中で、学習状況の移り変わりを調べる小テストなどを繰り返して、学習の質的な管理を行う評価。学生と教員の双方向の評価。
- 総括的評価 (Summative Assessment)
学習の後に、学習内容をどこまで習得したのかを最終確認する評価。



3. 学習評価の方法



- 皆さんは授業でどのような成績評価方法を使用していますか？
- それらの評価方法でどのような能力を測定しようとしていますか？



2. 学習評価の原則

4) どのように評価するのか？

- 客観評価 例：多肢選択問題、心理テスト
- 主観評価 例：観察評価、レポート評価
- 直接評価 例：標準テスト、客観テスト
- 間接評価 例：能力の自己診断
- 量的評価 例：多肢選択問題
- 質的評価 例：レポート評価



3. 学習評価の方法

目標に対応した評価方法

認知的領域 (知識)	精神運動的領域 (スキル)	情意的領域 (態度)
【知識・理解】 客観試験、論述試験	【運動技能・操作技能】 実地試験、シミュレーション、観察試験	【態度】 実地試験、シミュレーション、観察評価
【思考・判断】 口頭試験、論文、レポート	【コミュニケーション】 口頭試験、観察試験、相互評価	【意欲・関心】 レポート、ポートフォリオ、相互評価、心理テスト
	【情報収集能力】 論文、レポート	



3. 学習評価の方法

評価方法	診/形/総	主/客	直/間	量/質	どの能力を測定したい？



3. 学習評価の方法

到達目標の深さによって評価方法も変わる



6.0 評価	Evaluation	個性化	Characterization	自然化	Naturalization
5.0 統合	Synthesis	組織化	Organization	分節化	Articulation
4.0 分析	Analysis	価値づけ	Valuing	精密化	Precision
3.0 応用	Application	反応	Responding	巧妙化	Manipulation
2.0 理解	Comprehension	受け入れ	Receiving	模倣	Imitation
1.0 知識	Knowledge				
	認知的領域		情意的領域		精神運動的領域※

ブルームの教育目標分類学

(原題は、表3-1：教育目標のタキソノミーの全体的構成)

※ブルームの弟子のダーベが1971年夏スウェーデンで開催された「カリキュラム改革に関する国際セミナー」においてわれわれに示したものの。出典：梶田毅一（1983）「教育評価」有斐閣、表3-1、p112（英語は同書などから加筆）



評価情報の例

Q どこをさらに改善できますか？

到達目標

- ① 職場における自己啓発の重要性とその手順を説明できるようになる。
- ② 職場におけるOJTのコツを説明できるようになる。
- ③ 職場における新人研修プログラムが作れるようになる。
- ④ 職場で使えるマニュアルが作れるようになる。

評価情報

- ① 第1部 + 第2部テスト：25%（○月△日実施）
- ② 第3部テスト：20%（△月×日実施）
- ③ 新人研修プログラム一式：15%（×月□日提出）
- ④ マニュアル：15%（□月△日提出）
- ⑤ 受講態度：5%
- ⑥ 出席点：20%



4. 良い評価とは？



1) 良い評価の条件

- ・ 妥当性・・・学習の到達度を測るのにその問題は適切か？
- ・ 信頼性・・・同じ集団に対して同じ試験をくり返し行っても同じ結果が得られるか？
- ・ 客観性・・・誰が測っても一定の結果が計測できるか？
- ・ 効率性・・・評価が容易で、経済的にも時間的にも実用的であるか？



4. 良い評価とは？

● 修正イーベル法

	難易度	平易	中等	困難
必要度				
必須		0.80	0.70	—
重要		0.70	0.60	0.50
疑問		0.50	0.40	0.30



4. 良い評価とは？

2) 評価を実施する際の条件

- 評価する内容を事前に学生に伝える。
- 学習した範囲全体をカバーするように問題を作る。
- 授業の目標としたレベルを中心に、難易度の異なるレベルの問題を出す。
- 試験をしながら学習内容の復習ができるように配置する。



4. 良い評価とは？

3) 学生の自主学習を促すための工夫

- 次のような行為は学生の自主学習を促します。
- 過去あるいは実施予定の試験問題を配布する
 - 学生が自分で手書き作成したA 4版メモ1枚の持ち込みを許可する
 - 予想問題の作成を宿題に課し、全員に配布する
 - 学生同士で教えあい、学びあう試験のための予習時間をとる



5. 様々な評価法

ルーブリック評価

- いくつかの評価項目について、各グレードの典型となる言葉を評価基準として記述し、学習者の行動を評価する。
- 通常、表の形で示され、グレードの判定結果を評価項目ごとに記入する。
- 学習プロセスの中の場面を切り出し、それぞれに評価項目を立てる。

レポート「組織内研修の提案」評価シート(10ポイント満点)

あなたが所属している組織(バイト先、サークル、ゼミ等)において、①どのような問題点があり、②その問題点を解決するために、どのような研修(Off-JT)を行ったらいいか(目標、手法、評価方法)について提案しなさい。(1,600字程度、メールで提出すること。締切り:6月19日23時59分)

	素晴らしい！(2ポイント)	もう少し！(1ポイント)	残念(0ポイント)
①証拠のある記述	組織の現状分析は、よく観察され、密着したデータ・証拠に基づいている。	組織の現状分析は、主観的で感情的なエピソードに基づいている。	組織の現状分析は証拠に基づいていない。
②目標の明示	問題解決を促すための組織内研修について、具体的な目標が設定されている。	問題点を促すための組織内研修について、目標が設定されているが、具体的である。	問題解決を促すための組織内研修について、目標が設定されていない。
③手法の選択	問題解決を促すための組織内研修について、具体的な手法が選択されている。	問題解決を促すための組織内研修について、手法が記載されているが、具体的でないか、適切でない。	問題解決を促すための組織内研修について、手法が記載されていない。
④評価法の選択	目標が達成されたかどうかを測定するための適切な評価方法が記載されている。	目標が達成されたかどうかを測定するための評価方法は記載されているが、適切な評価方法ではない。	目標が達成されたかどうかを測定するための評価方法が記載されていない。
⑤文章構成 (×1/2)	文章は論理的な順序で記述され、読者は内容を容易に理解することができる。	文章は論理的な順序で記述されているが、読者は内容を容易に理解することができない。	論理的な順序で組み立てられた文章ではないので、読者はその内容を理解できない。
⑥日本語 (×1/2)	漢字や文法上(改行の仕方など)の誤りはない。	漢字や文法上(改行の仕方など)の誤りは5個以内である。	漢字や文法上(改行の仕方など)の誤りは5個以上ある。



ルーブリック評価のメリット

1. 学生自身が、どの程度まで努力すればどのような評価がもらえるのか、行動指針が明確になっている。
2. 学生が自らの学習活動を評価できる。
3. 結果だけではなく、プロセスも評価できる。
4. 評価がぶれない。
5. 異なる人が評価しても同じ結果が得られる。
6. 教員による評価と学生による評価が比較検討できる。
7. 採点時間を短縮できる一方で、詳細なフィードバックが可能。



Introduction to RUBRICS
An Assessment Tool to Save Grading Time,
Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning
Danielle D. Stevens and Antonia J. Levi

大学教員のための ルーブリック評価入門

ダニエル・スティーヴンス・アン・リアビ
佐藤浩章 監訳
井上敬彦・長野秀典 訳

五訂増補版



(佐藤浩章監訳
『大学教員のため
のルーブリック
評価入門』五
川大学出版部
、2014年3月)



5. 様々な評価法

ピア評価

- 学生同士で行う評価
- どのようなメリット、デメリットがあるのでしょうか？



相互評価指標の例

項目		被評価者氏名
目標達成行動	1. 課題（やるべきこと）に真剣に取り組んでいた	
	2. 課題（やるべきこと）をしっかりと理解していた	
	3. 自分の意見を積極的に主張していた	
	4. 与えられた役割をしっかりと果たそうとしていた	
	5. 話題がそれたとき本題に戻そうとしていた	
	6. 妥協ではない納得した結論を出そうと努力していた	
	7. 相手の意見をしっかりと聞き、理解しようとしていた	
	8. グループにとけこもうとしていた	
	9. つまらなそうな表情ではなく、笑顔で皆と接していた	
	10. 消極的なメンバーに声をかけていた	
集団維持行動	11. 優れた意見に共感・同意・賛成を表明していた	
	12. 話し合いが楽しくなるように場を盛り上げていた	



5. 様々な評価法

自己評価

- 学生自身で行う評価（自己採点、自己の学びの振り返り）
- どのようなメリット、デメリットがあるでしょうか？



5. 様々な評価法

eラーニング評価

- オンライン上で行う評価（例 オンラインでクイズに答え、その合否がすぐにわかる教材など）
- どのようなメリット、デメリットがあるでしょうか？

テスト・復習問題・受験1

復習問題・受験1

ページ: 1 2 3 4 5 (次へ)

「多肢選択問題」のサンプルです。

室町時代の出来事ではかまの巻ひなは、

- 1つの答えを選択してください。
- a 加賀の一向一揆
 - b 蜂起の伝承
 - c キリシタ衆の伝承
 - d 扇仁の乱
 - e 正中の変

選択肢1のフードロック

この問題に回答を入力

正解

この解答の人数: 2023 前のペナルティは100%に問題ありません。

すべての回答を入力 | 答えを保存する | 提出しない | 答えを提出し、テストを終了する

ページ: 1 2 3 4 5 (次へ)

あるいは SANO Hiroaki としてログインしてください。

35

受験1のレビュー

開始日時: 2010年10月16日(金曜日) 00:24

完了日時: 2010年10月16日(金曜日) 00:26

所要時間: 1分17秒

得点状況: 58/100 (58%)

評点: 58/100

ページ: 1 2 3 4 5 (次へ)

すべての問題をこのページに表示する。

「多肢選択問題」のサンプルです。

室町時代の出来事ではかまの巻ひなは、

- 1つの答えを選択してください。
- a 加賀の一向一揆
 - b 蜂起の伝承
 - c キリシタ衆の伝承
 - d 扇仁の乱
 - e 正中の変

選択肢1のフードロック

正解

この解答の人数: 2023 前のペナルティは100%に問題ありません。

解答履歴

#	作問	IDの乱	開始	終了	得点状況	評点
1	作問	IDの乱	180718 02:25:05	0	0	0
2	作問	正中の変	180718 02:25:09	20	20	18
3	問題の解答	正中の変	180718 02:25:09	20	20	18

ページ: 1 2 3 4 5 (次へ)

30

6. 成績点と合否判定

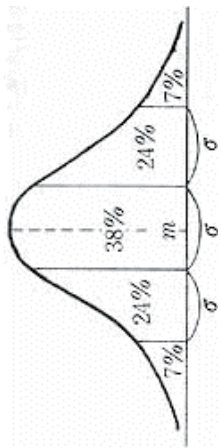


●絶対評価

目標の達成度を基準に評価する。合格点の範囲内で得点分布を調整せず、得点そのままの値を成績の評点とする。

●相対評価

集団中での位置づけを基準に評価する。得点の頻度分布をとり、生じた分布により成績を段階に分ける。



6. 成績点と合否判定



1. 皆さんは、絶対評価をしていますか、それとも相対評価をしていますか？
2. なぜ、その評価方法を選択したのですか？
3. 所属組織には成績評価基準はありますか？

7. 試験の管理



- 1) 成績の開示
 - 成績点の公開
 - 個人情報保護の保護に留意する
 - 答案の返却
 - 2週間以内の返却が望ましい
 - 成績判定資料の保管
 - 5年間の保存
 - 学生からの成績評価への申し立てへの対応
 - 答案用紙を見ながら採点基準を説明する

7. 試験の管理



- 2) 不正の防止
 - 学生の不正行為は発見することに重きを置くよりも、不正を行わないようにすることの方が大切で

【試験監督の際の留意点】

- 試験のアナウンスとともに、カンニングが本人にもたらず結果について話し、カンニングをしないように伝える。
- 試験のあいだ受験生の机の間を歩かなくして監督者が見ていることを知らせる。
- カンニングと疑われるような行為をしている学生が現れたら、その学生の横にしばらく立って見る。
- カンニングは現行犯なので後日の呼び出しは効力がない。



7. 試験の管理

3) 剽窃の防止

レポート課題においては、下記のような剽窃防止について対策をとる必要があります。

- ・ 他人のレポートを写し取る。
- ・ 論文や本をそのまま書き写す。
- ・ インターネット上のテキストをコピーして貼り付ける (コピペ)
- ・ インターネット上のレポートをダウンロードする。



7. 試験の管理

レポートは

コピー&ペースト (コピペ) だけではなく、
ネットで売買される時代です。

教員はどうしたらよいでしょうか？



7. 試験の管理

○ コピペ防止ソフトの開発

- ・ 米国の大学では全学的に導入しているのが当たり前。
- ・ 日本では、金沢工大知的財産科学研究センター長の杉光一成教授が「コピペルナー」を開発。2008年2月に特許申請。
- ・ 学生のレポートを翻訳ソフトの技術で文節や単語に分解し、ネット検索で類似した文章があれば、そのURLを表示する仕組み。学生間のコピペも検出可能。(株式会社アングウェアウェブサイトより)



<http://www.ank.co.jp/works/products/copypehna/>



7. 試験の管理

○ 剽窃防止のための対策

- ・ 授業中にレポートを書かせる (反転授業)。
- ・ 発表・討論、記述試験、面接試験に切り替える。
- ・ 幅広いテーマのレポート課題を課さない。
- ・ 本人しか書けないような内容 (自己に関すること) をテーマとする。
- ・ 授業に参加していないと書けないような内容をテーマとする。
- ・ レポートの書き方 (とりわけ問いの立て方、引用の仕方を教える (カリキュラム改革が必要かもしれない))。
- ・ ルーブリックを作成する。
- ・ 学問的誠実性について教える (教員が見本を示す)。



到達目標

1. 学習評価の意義を説明できる。
2. 学習評価に関わる基本用語（形成的評価・総括的評価、絶対評価・相対評価、客観評価・主観評価、直接評価・間接評価）を説明できる。
3. 到達目標にあった適切な評価方法を選択できる。
4. 公正で厳密な評価をするために必要な試験の管理方法を説明できる。

45



評価方法を変えて、
学生の学習を変えてみませんか。



参考文献

- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹（2000）『成長するティップス先生』（玉川大学出版部）
- 坂本尚志（2012）「バカロレア哲学試験は何を評価しているか？ - 受験対策参考書からの考察 -」『京都大学高等教育研究』第18号, p.53-63.
- 佐藤浩草編（2010）『大学教員のための授業方法とデザイン』（玉川大学出版部）
- 徳島大学教育委員会（2002）『FD推進ハンドブック』
- Mariyn H. Oermann, Kathileen B. Gaberson 著、舟島なをみ監訳（2001）『看護学教育における講義・演習・実習の評価』（医学書院）
- Deborah L. Ulrich, Kellie J. Glendon 著、高島尚美訳（2002）『看護教育におけるグループ学習のすすめ方』（医学書院）

47

課題A レポート「自己分析：自分の強みと弱み」ルーブリック（12ポイント満点）

自己啓発において、自己分析は重要なステップである。授業で習ったツール（もしくはそれに類するもの）を1つを使って、①自己分析を行い、その結果として、②自分の強みと弱みをまとめなさい。その際、それらを裏付ける具体的なエピソードを必ず添えること。また③強みを伸ばし、弱みを補強するためにはどのような自己啓発が今後必要となるかについても記述すること。（1,600字程度、A4用紙。メールもしくは紙で提出すること。紙で提出する場合はこのルーブリックを最後につけてホチキスでとめること。締切り：メール→6月15日23時59分、紙→6月15日授業終了時）

	素晴らしい！（2ポイント）	もう少し！（1ポイント）	残念（0ポイント）
①現状分析	自らの強みと弱みについて、授業で紹介したツールもしくはそれに類するものを使った分析がなされている。	自らの強みと弱みについて、個人の主観による分析がなされている。	求められている内容が理解できていない。
②証拠のある記述	強みと弱みを裏付ける複数のエピソードは、過去の出来事、他者からのコメント、データに基づいており説得力がある。	強みと弱みを裏付けるエピソードは、主観的なものが多く、客観性にやや欠ける。	具体的なエピソードが記述されていない。
③目標の明示	今後必要となる自己啓発について、具体的に、測定可能な目標が設定されている。	今後必要となる自己啓発について、曖昧な目標が設定されている。	今後必要となる自己啓発について、目標が設定されていない。
④手法の選択	今後必要となる自己啓発について、具体的に、適切な手法が記載されている。	今後必要となる自己啓発について、手法が記載されているが、具体的にないか、適切でない。	今後必要となる自己啓発について、手法が記載されていない。
⑤文章構成	文章は論理的な順序で記述され、読者は内容を容易に理解することができる。	文章は論理的な順序で記述されていないところがあり、内容を理解するのは不可能ではないにせよ、読みにくい。	論理的な順序で組み立てられた文章ではないので、読者はその内容を理解できない。
⑥日本語	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りがない。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは4個以下である。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは5個以上ある。

（12点満点中 _____点）

1

課題B レポート「組織内教育の提案」ルーブリック（12ポイント満点）

あなたが所属している組織（バイト先、サークル、ゼミ等）を一つ選び、①どのような問題点があり、②その問題点を解決するために、どのような組織内教育を行ったらよいか（目標、手法、評価方法）について提案しなさい。（1,600字程度、A4用紙。メールもしくは紙で提出すること。紙で提出する場合はこのルーブリックを最後につけてホチキスでとめること。締切り：メール→6月15日23時59分、紙→6月15日授業終了時）

	素晴らしい！（2ポイント）	もう少し！（1ポイント）	残念（0ポイント）
①証拠のある記述	組織の現状分析は、よく観察された客観的なデータ・記述に基づいている。	組織の現状分析は、主観的で感情的なエピソードに基づいている。	組織の現状分析は証拠に基づいていない。
②目標の明示	問題解決をするための組織内教育について、具体的に、測定可能な目標が設定されている。	問題解決をするための組織内教育について、目標が設定されているが、曖昧である。	問題解決をするための組織内教育について、目標が設定されていない。
③手法の選択	問題解決をするための組織内教育について、具体的に、適切な手法が記載されている。	問題解決をするための組織内教育について、手法が記載されているが、具体的にないか、適切でない。	問題解決をするための組織内教育について、手法が記載されていない。
④評価法の選択	目標が達成されたかどうかを測定するための適切な評価方法が記載されている。	目標が達成されたかどうかを測定するための評価方法は記載されているものの、適切な評価方法ではない。	目標が達成されたかどうかを測定するための評価方法が記載されていない。
⑤文章構成	文章は論理的な順序で記述され、読者は内容を容易に理解することができる。	文章は論理的な順序で記述されていないところがあり、内容を理解するのは不可能ではないにせよ、読みにくい。	論理的な順序で組み立てられた文章ではないので、読者はその内容を理解できない。
⑥日本語	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りがない。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは4個以下である。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは5個以上ある。

（12点満点中 _____点）

2

課題C レポート「職場内教育の優良事例分析」ルーブリック（16ポイント満点）

国内外の職場内教育の優良事例の中から、1事例を選択し、どのような特徴があるのか紹介しなさい。参考文献を3点以上必ず引用すること（そのうち1点以上は書籍を使うこと。インターネットのみの情報は認めない）。事例は、トヨタ、リクルート、東京ディズニーリゾート、マクドナルド、リッツカールトンから選択すること。それ以外の事例の場合は事前に相談すること。（1,600字程度、A4用紙。メールもしくは紙で提出すること。紙で提出する場合はこのルーブリックを最後につけてホチキスでとめること。締切り：メール→6月15日23時59分、紙→6月15日授業終了時）

	素晴らしい！（4ポイント）	もう少し！（2ポイント）	残念（0ポイント）
①参考文献	3点以上の参考文献を引用している。	1点以上の参考文献を引用している。	参考文献を引用していない。
②要約	当該職場内教育の特徴が明確に整理されている。	当該職場内教育の特徴が記述されているが、あまり整理されていない。	当該職場内教育の特徴の記述は、要点を欠いている。
③文章構成	文章は論理的な順序で記述され、読者は内容を容易に理解することができる。	文章は論理的な順序で記述されていないところがあり、内容を理解するのは不可能ではないにせよ、読みにくい。	論理的な順序で組み立てられた文章ではないので、その内容を理解するのに苦労する。
④日本語	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りがない。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは4個以下である。	漢字や文法上（改行の仕方など）の誤りは5個以上ある。

（16点満点中 _____点）

2015 年度 FD 関連研究会
参加支援 報告書

2015年度学外FD関連研修会参加支援一覧

開催日時	企画名称	テーマ	主催	参加者所属
2015年5月30日	成城大学キャリアセンター設立記念フォーラム	大学におけるキャリア教育の考察と成城大学の取組について	成城大学キャリアセンター	英米学科
2015年7月11日	第10回メディア教育シンポジウム	授業支援システムの明日を考える	メディア教育・情報システム委員会	現代社会学科
2015年8月26日	「活用型授業を考える」報告会	「活用型授業を考える」報告会	高大接続教育研究会 京都府高等学校数学研究会	教育学科
2015年9月19日	2015年大学教員FD/SD 英語教育スキルアップ研修	Active Learning in the Classroom	大学コンソーシアム京都	看護学科
2015年10月13日	大阪大学 FDセミナー	『導入に使える・コミュニケーションゲームのアラカルト』	大阪大学 教育学習支援センター	教職支援センター
2015年10月24日	第29回教育サロンin関東	偏差値39と向き合う「イグナイト教育」の8年間～体系的・継続的なアクティブラーニング	教育サロン事務局	教職支援センター2名
2015年11月21日	教師教育実践交流ワークショップ	「教職実践演習」の評価と質保証	東京学芸大学	教育学科
2015年12月5日	FD関連公開研究会	レポート課題において何を問うべきか	京都光華女子大学	教育学科
2016年1月23日	大学教育再生加速プログラム(AP)フォーラム	地域連携教育における「経験」と「学修」	北九州市立大学 AP推進室	教育学科
2016年2月11日	教師の専門職化フォーラム	アクティブ・ラーニングに向けたプロフェッショナルな教員養成	上智教育大学	教育学科
2016年2月13日	平成27年度京都ギャップイヤー事業合同成果報告会	京都ギャップイヤー事業から考えるアクティブラーニングの可能性	京都府	現代社会学科
2016年3月9日	教養教育高度化シンポジウム	教養教育とアクティブラーニング	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構	教職支援センター
2016年3月5日・6日	第21回FDフォーラム	大学教育を再考する ～イマドキから見えるカタチ～	大学コンソーシアム京都	現代社会学科

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	成城大学キャリアセンター
企画名称・テーマ	成城大学キャリアセンター設立記念フォーラム 「成城大学キャリアセンターの取り組み」等
開催日<会場>	平成 27 年 5 月 30 日(土) <成城大学>
参加者所属	文学部 英米学科

参加報告

【研修会の趣旨】

成城大学キャリアセンターの取り組みの紹介および外部評価報告、さらに今後のキャリア教育の在り方について議論することが本フォーラムの趣旨。

【研修会の概要】

成城大学では平成 19 年度に「就職部」を「キャリア支援部」に改組し、さらに平成 27 年度 4 月より「キャリアセンター」へと改組した。このキャリアセンター設立を記念してフォーラムが開催された。キャリアセンターの取り組みを紹介するとともに、渡辺三枝子筑波大学名誉教授による基調講演「これまでのキャリア教育、これからのキャリア教育」、外部評価委員会による成城大学就業力育成・認定プログラムの評価報告、パネルディスカッション「キャリア教育の可能性と社会の接点」が行われた。

キャリアセンター設立の経緯としては、「就職活動支援」「キャリア支援」「キャリア教育」の三つを有機的に実行するためである。キャリアセンターでは、大人数から少人数までの講座、個別相談、OBOG 懇談会等、インターンシップ、就業力育成・認定プログラム等を実施している。全般的な特徴としては、学生に「答え」を与えるのではなく、自ら考えさせ、自ら「気づき」「意味付け」ができるようになるような支援を重視している点である。たとえば、単なるエントリーシートの添削指導は行わずに、内在化している学生の可能性を理解させるように支援する。テクニックやノウハウ中心の就職活動支援、また、アセスメントによる「あなたには〇〇（職業）に向いている度△%」を鵜呑みにするような受動的な就職活動には否定的である。キャリア教育の発想としても、エントリーシートの書き方などの直接的なものは含めず、就職活動とは異なるものを目指している。

外部評価委員会による成城大学就業力育成・認定プログラムの評価報告であるが、PDCA サイクルが機能している点が評価されていた。プランの部分として、成城大学生の現状がしっかりと把握されており、それを成城学園の教育理念とあわせて計画立案するという点がとりわけ評価されていた。ただ、課題としては成城大学における「大学生のキャリア形成」とは何かという定義があいまいなままで「キャリア形成支援」が行われている点が指摘されていた。

基調講演やパネルディスカッションでも話題となっていたのが、キャリア教育の在り方である。ともすれば単なる就職活動と混同されてしまいがちであるが、何のために大学でキャリア教育を行うのか、その理念と意義を今改めて見直す必要があるとのことである。

【本学の印活動における検討課題】

本学でもキャリア教育が行われているが、その理念と意義は何であるのか、またそれが学生に周知されているであろうか。1 回生時から、就職活動ではないキャリア教育を行う必要があるだろうし、キャリア教育を施すにしても、学生が内在しているものを教員が最大限に引き出すことができているであろうか。最終的な結果としての就職活動も見据えて、本学のキャリア教育をカリキュラム改編に合わせて検討すべきであろう。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	神奈川大学 メディア教育・情報システム委員会
企画名称・テーマ	第 10 回メディア教育シンポジウム 「授業支援システムの明日を考える」
開催日〈会場〉	平成 27 年 7 月 11 日(土) 〈神奈川大学〉
参加者所属	社会学部 現代社会学科

参加報告

【研究会の趣旨】

様々な大学の授業支援システム（LMS）の活用事例を紹介することで、現状と課題について広く共有し、それらを踏まえた今後の可能性について議論を行う。

【研修会の概要】

前半は各大学の活用事例紹介であり、主催の神奈川大学以外に明治大学・法政大学・青山学院大学・名古屋文理大学・玉川大学・東洋大学の担当者が登壇した。それぞれ使用しているシステムは異なっているものの、オープンソースをベースにカスタマイズして利用している大学とパッケージを使用している大学に大別された。講演では主に、LMS の利用状況、導入のきっかけ、導入までの過程（以前に使用していたシステムの説明含む）、導入成果、今後の展開といった点について説明がなされた。こちらも各大学の差異はありつつ、詳細な数値データを把握していること、目的を明確に掲げた上で全学的な推進体制が採用されていることは多くの大学で共通していた。数値データに関しては、ほとんどの大学で利用率は右肩上がりであり、特に、資料のダウンロードや講義に関する連絡がスムーズに行うことができるという面での評価の高さが目立っていた。一方で、双方向性やアクティブラーニング、PBL といった要素は活用事例としては触れられていたものの、統計データからはまだまだ LMS における主要な位置を占めるまでには至っていないようであった。また、今後の展開として、個別の講義で LMS を用いるだけでなく、学生が自身の学習履歴を管理し活用できる機能について言及している大学が多く見られた。具体的に進展している事例は少なかったが、講義間をシームレスにつなぐような役割が LMS 活用の方向性の 1 つとして期待されていた。

後半のパネルディスカッションは、会場から集められた質問紙に前半の講演の登壇者が回答するというスタイルで進行した。ほとんどは講演内容に関する詳細な質問であり、オープンソースとパッケージのどちらが良いか、学生の反応はどうなのかといったものが取り上げられていた。特筆すべきは、全学的に展開するためにはどのような工夫が望ましいかといった質問に対し、定型的で一方的な連絡だけでなく、ニュースレターを紙と Web の両方で発行してベスト・プラクティス事例を共有したり、場合によっては担当者が直接教員の研究室まで訪問して使い方を教授するといった推進策が回答として挙げられたことである。こうした定型外の情報共有が実践されていることに対しては他のパネリストからも肯定的な意見が示された。ただし、全学的な展開の目標については各大学での温度差も見られた。

【本学の FD 活動における検討課題】

本シンポジウムの内容を本学に適用するにあたっては、まず manaba を利用している東洋大学の事例が大いに参考になるものと考えられる。東洋大学では、2014 年の実績として学生利用率が 94.2%、教員利用率が 45.7% となっており、特に非常勤講師を含めた教員の利用率を上げていくことを目標として掲げていた。加えて、スマートフォンでの出席・リアルタイムアンケート機能を実装し、特に後者を用いたアクティブラーニングの推進を図っているとのことであった。これらの試みが学生の学習意欲の向上につながっていることも報告されている。

本学においては、まず現行の利用率・学習意欲との関係を数値的に把握した上で、普及にあたっての計画を練ることが不可欠であるように思われる。その後、先進的な活用を行っている講義での使い方を広く共有していくことが必要ではないだろうか。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	高大接続教育研究会・京都府高等学校数学研究会
企画名称・テーマ	高校数学・活用型授業を考える
開催日<会場>	平成 27 年 8 月 26 日(水) <キャンパスプラザ京都>
参加者所属	教育学部 教育学科

参加報告

【研修会の趣旨】

高大接続教育研究会は、大学コンソーシアム京都の後援事業として、京都府、京都市、大阪府の高校教諭と大学の教員とで組織し、河合塾教育研究開発本部の支援のもと、新教育課程の「活用」と「探究」の評価・育成プログラムを研究・開発してきた。高校現場から、新たな指導上の課題として、「活用型」の授業をどう教えたらよいのかという声が聞かれるようになった。そこで、京都府高等学校数学研究会との共同開催で、本研究会所属の先生方から研究・実践を紹介する研究集会を開催することになった。

【研修会の概要】

・講演：「活用とは何か？」名古屋大学名誉教授、神奈川大学特別招聘教授 安彦忠彦氏

・事例報告：

「条件付き確率の活用」京都府立嵯峨野高校 森田勝也教諭

「西京高校における活用型授業の必要性と実践報告」京都市立西京高校 岡本弘嗣教諭

「実生活における数学の活用・不等式の利用」大阪府教育センター附属高校 藤林則孝教諭

「数学の活用型授業のための授業デザインのポイント」大阪府立大学 川添充教授

・質疑応答：

主な質問として「各高等学校において、どのくらいの頻度で活用型授業を取り入れているのか」「生徒を班分けするときの留意点はあるのか」「数学的活動と数学的モデリングとの関係」等があった。

【本学の FD 活動における検討課題】

次期学習指導要領改訂に向けて、文部科学省が初等・中等教育（幼稚園・小学校・中学校・高校）での「アクティブラーニング」（能動的な学習）を強く推進する方向性を打ち出している。その 1 つの形が今回の活用型授業であった。今回の研修は、高等学校における数学の授業における取り組み事例が中心であったが、大阪府立大学における取り組み事例（数学）の報告もあった。習得型学習と探究型学習をつなぐものとして位置づけられているため、今後の FD の参考になると考えられる。また将来、初等・中等教育でアクティブ・ラーニングを経験してきた高校生が入学してくることになる。これを最大限にいかす授業のあり方を検討する必要があると考えられる。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	大阪大学 教育学習支援センター
企画名称・テーマ	導入に使える、コミュニケーションゲームのアラカルト
開催日<会場>	平成 27 年 10 月 13 日(火) <大阪大学 スチューデントコモンズ>
参加者所属	教育学部 教育学科

参加報告

【研修会の趣旨】

大阪大学コミュニケーションデザイン・センターが開講する「パフォーミングアーツの世界」や、「文理融合創造ゼミナール」などのワークショップ型・合意形成型の講義の導入で用いる、コミュニケーションゲームの紹介。

性別や属性、専門性の違う受講者同士が、いかに短時間でそれらの「差異」を超えて合意形成するのかというプロセスをゲームを通じて体験し、「研究・講義・社会学連携・社会実装」といった、大学人に求められる能力の向上につなげる。同時に、大学人という枠を超えて「他者との関わりの中で学び続ける力」を得る為のヒントを、120 分で生成し、共有することを目的とする。

【研修会の概要】

・研修講師：大阪大学特任教授（常勤） 蓮行（れんぎょう）…芸名・通称名

・体験・研修内容：

（1）「つかみ」の話題

①導入での受講者への構えの形成…「不親切グラフ」の説明

②従って、このセミナーは不親切理論により、受講者の達成度を上げる。

（2）「歩く、止まるゲーム」…古代ギリシャの市民演劇の有名なゲームと「講釈」

①ゲームのルールと体験

②ゲームの分析…グループワーク発表及び講師からの解説

③ゲームへの挑戦…受講者による試行

（3）「属性ばらばらゲーム」…自己紹介ゲームで、属性を調べて比較する。

（4）「1分間ジャーマネ・ゲーム」…5分インタビューにて、プレゼン1分で売り込み
他己紹介ゲーム、企業の採択がある

（5）3つのゲームから、ゲームの分析を行い、逆算のベクトルの必要性を考えた。

【本学の FD 活動における検討課題】

コミュニケーションワークショップを通して、いろいろな方向性から考えるきっかけとなり、学生を自主的に授業に参加させるヒントとなった。

従って、豊かな発想につながる FD 研修や研修後、試してみたいと思うような具体的で連続的な研修も必要ではないかと思った。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	教育サロン事務局
企画名称・テーマ	偏差値 39 と向き合う「イグナイト教育」の 8 年間 ～体系的、継続的なアクティブラーニングの実践から～
開催日<会場>	平成 27 年 10 月 24 日（土） <立教大学 品川キャンパス>
参加者所属	教職支援センター

参加報告

【研修会の趣旨】（主催者文書より抜粋）

学生を伸ばすこと、学生とどう向き合うか？日頃考え工夫していることを大学の職員・教員が、経歴・立場・専門・授業内容・向き合っている学生の違いを超えて、ざっくばらんに語り合う場。問題提起は準備されているが、その内容にとらわれることなく、その場で触発され浮かびあがった参加者の思いやワクワク感、うれしかったことや悩み、学生のことなどを心ゆくまで話し合い、共有することで新たな意気込みがわきあがってくる場となることを願っている。

【研修会の概要】（主催者事後報告書も参照して記述）

- ①いわき明星大学薬学部の取り組みである「イグナイト教育」について、立ち上げから 8 年間リーダーとして関わられた中越先生にお話がありました。
- ②「イグナイト教育」は学生の潜在能力に点火する教育であり、「イグナイト」には、「生涯にわたって主体的に考え、学び続ける力を育成して、医療薬学教育への接続を図る自立のための基盤的総合教育体制」という意味が込められているとのことでした。
- ③「イグナイト教育」の内容や学生の変容、「イグナイト教育」を实践される中で大変だった「教員の姿勢、学び」についてお話がありました。
- ④同じくいわき明星大学薬学部の若手の先生から、「イグナイト」教育を広めるにあたっての、苦労と工夫について報告がありました。かなり厳しい対立があった旨が語られました。
- ⑤参加者でのグループ討議。提案内容（問題提起）
偏差値 39 の学生たちの心に「学びの火を点火した」イグナイト教育のあり方が熱く語られました。
- ⑥グループ交流会

6 人ほどのグループで、「記者会見」方式でのアイスブレイクの後、交流会を行った。ざっくばらんに意見を出し合う中で、職種・校種等の枠を超えて意見交換と交流が深められ、そこでの気づきは貴重な物となった。この交流会にこそ、ここに来た価値があったのかも知れない。

【本学の FD 活動における検討課題】

小生は、ここ数年間受持の講義において、

- ①単なる伝達ではなく、「教育現場の現実を根底におき、学生諸君が現場に立ったときに、戸惑うことが少しでも少なくなるような具体的な場面設定を重視し、自ら学び、解決していける力と現場で活用できる」授業・講義形態を模索している。
- ②教員を目指す学生諸君に、特に多様なアクティブ learning の経験を積ませることが必要と感じている。特に、教育学部でない通学課程の学生や通信教育課程の学生にそのようなアクティブな「課題を見つけ自ら学び解決し活用し表現」できる力を涵養する方策を講師陣が意識することが求められているのではない。
- ③特に、教員免許取得の最終段階である「教職実践演習」において、どのような力を学生諸君に涵養するのか？そのために我々教師陣にはどのようなことが求められているのか？しっかりと見据え取り組む事が大切である。この FD 研修会での学びや気づきを本学においても具現化していくことが求められている。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	教育サロン事務局
企画名称・テーマ	偏差値 39 と向き合う「イグナイト教育」の 8 年間 ～体系的、継続的なアクティブラーニングの実践から～
開催日<会場>	平成 27 年 10 月 24 日（土） <立教大学 品川キャンパス>
参加者所属	教職支援センター

参加報告

【研修会の趣旨】

「学生に対する深い思い」や「授業の細部に対するこだわり」などをお持ちの先生方が、経歴、専門分野、授業内容、向き合う学生などの違いを超えて、気楽に深く語っていただきたい思いで開催いたします。参加者の日頃の経験者やかすかな感触をベースにして、話題提供していただいた話に触れてでてきた皆様の新たな感覚、アイデアなどについて、嬉しかったことや悩みなど、学生さんのお話しなどを織り交ぜてお話しいただけるような、新たな発見と共有の場になればと思っております。

【研修会の概要】

- (1) 開会挨拶 発起人 追手門学院大学 池田輝政氏
- (2) 学習スタイルの分析と交流（プレスタイムより）
4つの領域（Do・Look・Think・Plan）にて学習プロフィール分析を行う
- (3) アイスブレイク（7人グループ）…記者会見（キャストに5分のインタビュー）
インタビューのためのA4ネームカード作成と情報の記入
- (4) 話題提供「偏差値 39 と向き合うイグナイト教育の 8 年間～体系的・継続的なアクティブラーニングの実践から～」
いわき明星大学 中越元子氏・野原幸夫氏
★薬学部の6年間の学び方を初年次教育から、3年次までの体系的な教育課程をチームを組んで学生全員に指導する。
Step 1…フレッシュャーズセミナー
Step 2…ゼミ形式で学ぶ学習
Step 3…TBL 方式による学習
Step 4…TBL+PBL→プレゼン発表
- (5) 話題提供からのグループ討議、全体共有
- (6) 閉会のあいさつ
感想…多様な職種（教員以外）や地域の方がグループ内に多く、楽しく様々な交流ができた。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
企画名称・テーマ	教師教育実践交流 ワークショップ 教職実践演習の評価と質保証
開催日<会場>	平成 27 年 11 月 21 日 (土) <東京学芸大学>
参加者所属	教職支援センター

参加報告

【研修会の趣旨】

学部段階における教育実践演習では、ともすれば授業演習に偏りがちであり、学校運営、学級経営、生徒指導、教育課程経営をはじめ学校の教育活動全体について総合的に体験し、考察する機会とする必要がある。

学部段階における教育演習は、教員として最小限必要な資質能力を養成する課程の演習である一方、学校教育活動に関する基礎的な理解の上に、長期間にわたり、教科指導や生徒指導、学級経営等の状況を経験することにより、自ら学校における課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うものであることが必要である。今回、教職専門演習の評価を検討することで、学生の教師力の育成につながると考える

【研修会の概要】

岩田康幸氏（東京学生大学教員養成カリキュラム開発研究センター教授）

基調報告 東京学芸学芸大学の取り組み

東京学芸大学では、900名の大学生を38人の教師でグループに分けて教職実践演習の授業を担当している。評価は、以下の5項目である。1) 教職観：教職の意義や内容を理解し、社会が求める具体的な教師像を明確に意識した上で、教育実習等の経験を振り返って自覚ある行動をすることができる。2) 教科指導力：教科内容についての知識・技能が学習指導を支えることを理解し、これまでに獲得した知識・技能を振り返って深化・補充を行う。3) 学習指導力：効果的な学習指導を行うための知識・技能について理解し、授業の設計・実施・評価にあたって具体的な工夫をすることができる。4) 子ども理解力：子どもの発達的特徴や生活実態を把握することが生活指導を支えることを理解し、これまでに獲得してきた知識・技能を振り返って、深化・補充を行うことができる。5) 生活指導力：効果的な生活指導を行うための知識・技能について理解し、それぞれの子どもに応じた指導および学級としての集団的な指導の計画・実施・評価にあたって具体的な工夫をすることができる。教師によって評価にばらつきがあるが、90%の学生は教職専門演習においてA・Bの評価を得ている。

【本学FD活動における検討課題】

文部科学省は、教職大学院設置等教員養成において、大きな改革を行っている。今後10年たてば、教員採用が非常に少なくなり、私立大学教育学部の生き残りに迫られるであろう。教員養成段階における教職専門演習とその効果は重要であり東京学芸大学の評価方法を聞くことができたのは参考になった。私自身、学校現場の教員として勤務していたので、教職専門実習と授業を関係つけることが需要であると考え。学校には節目節目で行事があり、担任教師は、そこで学級作りを行う。そのように学校現場の行事と大学教育の演習と関連づけることにより、効果的な成果が得られると考える。教科指導だけでなく、学級経営も演習科目に入れることを希望する。新任教師は、最低でも10年間は担任教師とした勤めなければならない。さらに、新任1年目の4月から学級経営活動が求められる。本学においても、学級経営および担任教育の演習を教員養成段階から検討する必要があると感じた。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	京都光華女子大学 FD 関連 公開研究会
企画名称・テーマ	レポート課題において何を問うべきか
開催日<会場>	平成 27 年 12 月 5 日 (土) <京都光華女子大学>
参加者所属	教育学部 教育学科

参加報告

【研修会の趣旨】

学部生のレポート課題（以下、論題）において、剽窃のできないオリジナリティのある論題とは何か、レポート課題で何を評価するのかについて、研究成果を参加者と共有し、検討課題を見出すことを目的とした。

【研修会の概要】

(1) 研究成果の報告

- ①「レポート課題における到達目標と剽窃が困難となる論題について」（報告者：成瀬尚志）
この研究の問題設定と仮定、剽窃のできない論題の条件（類型化）について報告された。
- ②「レポート課題における『問い』の重要性」（報告者：河野哲也）
オリジナリティのある論題とその評価について、実践例を紹介された。
- ③「パフォーマンス課題とループリックについて」（報告者：石井英真）
学力の質的レベルとパフォーマンス評価との対応関係、及び質的評価規準（ループリック）の事例について説明された。

(2) 論題類型化ワークショップ

参加者の持参したレポート論題をグループで共有し、オリジナリティのある論題の条件についてグループ討議で検討した。

【本学における検討課題】

「知っている」「わかる」から「できる」「使える」レベルの学力をレポート、作品、発表等のパフォーマンスから評価する場合がある。学生の知識・技能の活用力や実践への応用力を熟達度の程度で判断した評価規準がループリックである。

本学では通信課程のテキスト履修や通学課程においてもレポートを課す機会が多い。学生が自分の頭で考えた、オリジナリティのあるレポートが書けるような論題をたてる必要性を感じる。報告（実践例）とグループ討議の意見を集約し、オリジナリティのある論題の立て方と評価について以下にまとめた。

<p style="text-align: center;"><学生></p> <p>知識の獲得 ↓ 自分の「問い」を出す ↓ グループディスカッション ↓ 発表と相互評価 ↓ レポート作成</p>	<p style="text-align: center;"><教員></p> <p>←自発性の促し、他との差異の気づき ←要約の仕方の説明 ←フィードバック（根拠は？具体例は？） →</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

上記は学生の活動と教員の働きかけを示している。学生は講義やテキスト等から知識を獲得し、そこから自分の「問い」を立てる。教員は個々の学生の差異にこだわる働きかけをする。似た「問い」のグループで、グループディスカッションをする。ここで共通テーマに関する問題の論点を見つけるために、教員は論文の要約の仕方を説明する。グループでまとめて発表し、相互評価をする。教員のフィードバックと学生の相互評価を繰り返し、学生の観る目（批判的読解と論理的な能力）を養う。学生は before-after 型の学びの成長を得られるようなレポート作成を目指す。

この実践例では学生の思考や能力を見る手段としてレポートを課している。学習した内容の「意味づけ」、理論や立場の当てはまる事例をあげる「事例提示」、カテゴリーに整理・分類する「整理・分類」等のタイプが、剽窃が困難になる論題としてあげられた。また、評価の基準を明示することや、論題の条件設定（場面、宛先等）の組みあわせが多様であることなど、意見として出された。どのタイミングで何を評価するかは、それぞれの授業設計で検討される課題である。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	北九州市立大学
企画名称・テーマ	北九州市立大学地域共生教育センター 地域連携教育における「経験」と「学修」
開催日<会場>	平成 28 年 1 月 23 日（土） <北九州市立商工貿易会館>
参加者所属	教育学部 教育学科

参加報告

【研修会の趣旨】

北九州市立大学は九州の国公立大学では唯一文部科学省「大学教育再生加速プログラム」として地域共生教育が採択された。今回は、学生たちの地域共生活動を紹介し、その成果を可視化するシンポジウムである。発表プロジェクトは、①北方市民センターにおける学生運営スタッフ、②北九州社会福祉協議会における防犯防災プロジェクト、③八幡町における外国人と地域の人々をつなげるプロジェクト、④学童保育における学生プロジェクト、⑤北九州エコクラブにおけるエコカフェ、⑥環境 ESD プロジェクト、⑦東日本大震災関連プロジェクトである。基調講演と合わせて学生の地域共生活動を評価する。

【研修会の概要】

基調報告：「体を学びに変える」岩弁雪乃（早稲田大学）

早稲田大学ボランティアセンターでは多くの学生がボランティアを経験しているが、従来は楽しかった体験でしかなかった。学生ボランティアをサポートしながら「体験的な知」と「学術的な知」をつなぎながら社会に貢献する人材を育成することを目指した。国内ボランティアは 18 団体 750 人が活動し、海外では 10 団体 400 人が活動している。授業内では 6 科目 200 人が活躍している。そのうち「体験の言語化」科目として 20 クラス 200 人が受講している。

近年その「体験の言語化」科目において、レベルの目安を数段階に分けて記述して、達成度を判断する基準を示す研究を行っている。そして、学習結果のパフォーマンスレベルの目安を数段階に分けて記述して、学習の達成度を判断する基準を示す教育評価法を示した。①自分および相手の気持ちを想像できるか、「自分の言葉」で語れるか、②体験からつながる「社会の課題」を発見できるか。「自分の言葉」で語れるか③体験が学びの意欲につながるかである。このような授業を通して体験を「楽しかった、面白かった」で終わらせず、社会における当事者意識を持たせることにつながると考えている。

【本学の FD 活動における検討課題】

佛教大学の学生の実態をみると、北九州市立大学のように、積極的な地域ボランティアを行なっていると思われる。北九州私立大学・早稲田大学と同様に、授業内で何らかの位置づけを行い、さらに、社会における当事者意識を持たせることにより、今後、地域のリーダーとなる教育につながると思われる。私自身は、教職大学院における教職専門実習をより深く省察させるために、このシンポジウムに参加した。①自分および相手の気持ちを想像できるか、「自分の言葉」で語られるか、②体験からつながる「社会の課題」を発見できるか。「自分の言葉」で語れるか③体験が学びの意欲につながるかという内省する学習方法を通して、子供との関係、自分自身の気持ちを語る力を学生に持たせることが、教師の育成にも重要であると考えます。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	教育サロン事務局
企画名称・テーマ	偏差値 39 と向き合う「イグナイト教育」の 8 年間 ～体系的、継続的なアクティブラーニングの実践から～
開催日<会場>	平成 27 年 10 月 24 日（土） <立教大学 品川キャンパス>
参加者所属	教職支援センター

参加報告

【研修会の趣旨】

中央教育審議会答申等をふまえ、上越教育大学が中心となり実施しているプロジェクト事業「教師の専門職化をフォローする研修体制の構築（平成 25～27 年度）」の取組や成果を発表し、今後の実りある事業運営に向けた情報を収集するとともに、専門家より助言を受ける場として、関係する教育委員会及び大学等とフォーラムを行います。3 回目の開催となる今回は、教育委員会や学校と大学が連携した研修成果の学校現場への還元について、成果を発表するとともに今後の教員養成のあり方について検討する。

【研修会の概要】

- ・ 開会挨拶 上越教育大学長
- ・ 事業説明 上越教育大学教職大学院教授
- ・ 基調講演 文部科学省初等中等教育局教職員課長
「アクティブラーニングに向けたプロフェッショナルな教員の育成」
- ・ ポスターセッション
上越教育大学教育実践高度化専攻 教職大学院生 21 ブース
- ・ パネルディスカッション
- ・ パネリスト 6 人 コーディネーター NHK 早川信夫氏
- ・ 閉会挨拶

【本学の FD 活動における検討課題】

- ・ 新学習指導要領改訂に伴って、並行して 3 つの答申が出ているが地域と学校・チーム学校・アクティブラーニングなど学生諸君をどのように意識させていくか。
- ・ アクティブラーニングとはどのようなモノなのか？ふり返り具現化を模索する。
- ・ アクティブラーニングの視点による不断の授業改善①深い学びの過程②対話的な学びの過程③主体的な学びの過程の 3 点をふまえる構想が必要。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	平成 27 年度京都ギャップイヤー事業合同成果報告会
企画名称・テーマ	京都キャリア教育推進協議会高大連携部会 京都ギャップイヤー事業から考えるアクティブラーニングの可能性
開催日<会場>	平成 28 年 2 月 13 日 (土) <京都産業大学むすびわざ館>
参加者所属	社会学部 現代社会学科

参加報告

【研修会の趣旨】

以下、HP に掲載されている当該研修会の趣旨について転載する。

『京都府では、平成 25 年度から、高校生や大学生が地域や社会での実践活動を通じて、社会性や思考の柔軟性、現実の事象を客観的に捉え分析する力や課題発見・整理力を培い、実践による解決体験を得ることで、次のステップにおける対応力をつけるとともに、地域を愛し地域に貢献するマインドを醸成すること等を目的として『京都ギャップイヤー』事業に取り組んでいます。今回はその成果として、本年度取り組んだ大学生プロジェクトや高大連携の取組みを発信します。また、大学教員による実践事例報告なども交えながら、学生、地域、企業に相乗効果を生み出すアクティブラーニングの可能性について考えたいと思います。』

【研修会の概要】

京都府の北部地域と中南部地域でそれぞれ展開されている『京都ギャップイヤー事業』についての報告がプロジェクト参加学生からなされた。併せて、実践事例紹介として、地域や企業と大学との連携に関する実践事例が大学教員より報告された。学生からの報告は大変興味深いものであったが、時間の制約が厳しく、やや消化不良気味であった。一方で、大学教員からの実践事例紹介は一方的に取り組みが紹介されるだけであり、学生の発表よりも多くの時間を占めている点は疑問であった。

パネルディスカッションでは、登壇者の教員と学生が「アクティブラーニングの可能性」について議論を展開した。学生がパネルディスカッションに登壇していることは斬新であったが、状況に委縮している様子が見られ、その点への配慮が十分でないように感じられた。加えて、教員が学生に指導するような様子が見られたのも、パネルディスカッションの趣旨を踏まえれば残念であった。

【本学の FD 活動における検討課題】

高大接続のテーマでは高校生が発表するなど、アクティブラーニングや PBL の実践は大学だけでなく高校にまで広がっている。そうした背景を踏まえると、本学においてもアクティブラーニングや PBL の適用範囲を拡大していくことは不可避だと考えられる。しかしながら、アクティブラーニングの成果は一樣ではなく、「実践」のみに重きが置かれている状況には若干の違和感を覚えている。本学における展開に際しては、「実践」のみに偏重しない評価指標の確立が求められるのではないだろうか。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	大学コンソーシアム京都
企画名称・テーマ	第 21 回 FD フォーラム 大学教育を再考する～イマドキから見えるカタチ～
開催日<会場>	平成 28 年 3 月 5 日（土）～ 6 日（日） <京都外国語大学>
参加者所属	社会学部 現代社会学科

参加報告

【研修会の趣旨】

大学教育を学生論、教育論・学問論、組織論・職員論といった様々な立場から再考するイベントであり、初日のシンポジウムと 2 日目の分科会+ポスターセッションで構成されている。大学教職員に留まらない多くの参加者がおり、分科会についても 13 のテーマが設定されるなど、大学教育の今日的なテーマが広範囲扱われていた。

【研修会の概要】

初日のフォーラムでは、大学教員・大学職員・大学経営・大学外部といったそれぞれ立場の異なる 4 人のシンポジストが「大学教育を再考する～イマドキから見えるカタチ～」といったテーマでディスカッションを行った。冒頭の 2 時間はそれぞれが 30 分程度の時間でプレゼンテーションを行い、後半の 2 時間でプレゼンテーションの内容を踏まえたディスカッションが行われた。ほとんどの議論では、PBL やアクティブラーニングといった教育手法に肯定的な態度が示されていたが、一方で安易な導入に疑義を呈する意見も見られた。しかしながら、今後の社会情勢を踏まえて大学教育自体が変革を迫られている点では見解が一致しており、そのためには教育面だけでなく、組織面や職員面での対応が必要であるという結論も同様であった。

2 日目は分科会とポスターセッションが行われ、「第 1 分科会 地域貢献アウトキャンパス活動がもたらす学生の成長：その現状と可能性について」に参加した。こちらは通常のプロジェクト報告と似たような内容であったが、グループワークを挟むなどの工夫も見られた。ポスターセッションでは様々な大学の実践事項が報告されており、学生が関与して講義の改善を目指す京都産業大学の一連の取組が目立っているように感じられた。

【本学の FD 活動における検討課題】

まず何よりも、当シンポジウムにおける本学の存在感の希薄さが気になった。特に、ポスターセッションでは市内のさまざまな大学が参加していたものの、本学からの参加はなかった。こうした状況から、本学の FD 活動が積極的でないような印象を与えてしまうのではないだろうか。また、前述の京都産業大学のように近隣の積極的に取組を発表している大学との教育の質の差が今後広がってしまう懸念もある。そのため、見学者の立場ではなく、発表者の立場として当シンポジウムに参加する必要性を一番に感じた。

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	東京大学教養教育高度化機構シンポジウム
企画名称・テーマ	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構 教養教育とアクティブラーニング
開催日<会場>	平成 28 年 3 月 9 日 (水) <東京大学 駒場 I キャンパス>
参加者所属	社会学部 現代社会学科

参加報告

【研修会の趣旨】

グローバル化や情報技術の進展による社会の複雑化・多様化を背景に、立場や考え方の異なる他者と協働して問題解決に取り組める人材が求められています。こうした中、東京大学教養学部では、アクティブラーニング（能動的な学習）の普及が目指され、学生の主体性を潤養する双方向型の授業や、異分野の学生との討議を通じて自らの専門分野を相対化する視点を養う授業が展開されています。教養教育高度化機構シンポジウムでは、「教養教育とアクティブラーニング」をテーマに、東京大学の前期・後期教養教育でなされてきた取り組みの紹介に加え、参加者の皆様に体験頂ける「アクティブラーニング体験ラボ」のコーナーをご用意し、新たな発見と共有の場になればと思っております。

【研修会の概要】

- (1) 開会挨拶 小川桂一郎（総合文化研究科長・教養学部長）
学びは能動的でないといけない、そのためにアクティブラーニングの実践が求められた
- (2) シンポジウム趣旨説明 松尾基之（教養教育高度化機構長）
教養教育が廃止される中で、東大のみが教養の学部として存続し、その意味は大きい
異種間の討論から生まれるものが多く、大きな意義がある
2014.2 より教養教育と専門教育を積み上げではなく、並行に行っている
- (3) 基調講演 「東京大学教養学部における構想と実践」永田啓総合文化研究科教
 - ・ AL の導入ー教育現場と教育工学との連携ー新たな教室空間の設置「KALS」
 - ・ AL の評価・AL 履修群に成果が見られた→討論する力・問題発見力・行動力
 - ・ AL の課題・教育工学との連携・AL 授業の拡大・AL 環境整備等
- (4) 学術英語のアクティブラーニング
トム・ガリー（グローバルコミュニケーション研究センター教授）
 - ・ 学術英語を AL で学ぶ意義…一人で解答する力から英語をどのように使うかへのシフト→
科学論文執筆 ALESS 理科 1 年 ALESA 文科 1 年 FLOW1 年全員のプログラムを TA の支援を受けて行っている
- (5) 初年度ゼミナール 増田健（教養教育高度化機構初年次教育部門長）
 - ・ Teaching から Learning への転換…文科と理科→アカデミック体験を通して、学生の学びの意識を変革する
 - ・ 基礎的な学術的スキル・マナーを習得する
- (6) アクティブラーニング体験ラボ
 - ・ 大人数講義における実践 吉田壘…Think Pair Share の体験
 - ・ 少人数授業における工夫 定松淳…ミニッツレポートの活用
「いかに多様性を引き出すか」
アクティブラーニングか否か、が問題ではなく、生き生きとした授業か否かが問題である
- (7) 質疑応答
Q, アクティブラーニングをどうして行うのか
A, 大学の最終目的は、人づくりであり、そのために必要であると考え行っている

2015 年度「FD 研究会」
「学外 FD 関連研修会 参加支援」報告書

発行 日：平成 28 年 10 月 5 日

発行 者：佛教大学教育推進部教育推進課

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町 96

TEL (075) 491-2141 (代)

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/>



BUKKYO UNIVERSITY